

KOBE FELLOWSHIP LETTERS  
Supplement No. 7.  
BURTON-ON-TRENT.

December 1946.

Kobe Fellowship Letters Vol. III

バジル書簡集 第3巻



ジョン・バジル・シンプソン 著  
ジョージ・ノエル・ストロング 著  
中原康貴 訳

日本聖公会神戸教区歴史編纂委員会

*Kobe Fellowship Letters Vol. III*

バジル書簡集 第3巻



ジョン・バジル・シンプソン 著  
ジョージ・ノエル・ストロング 著  
中原康貴 訳

日本聖公会神戸教区歴史編纂委員会

扉・『ゲッセマネの祈り』彫刻

中原祥志（1949-2017）作

## 推薦の言葉

日本聖公会神戸教区主教 オーガスチン 小林尚明

「内地留学をさせていただきたいのですが・・・」というメールを中原康貴司祭から頂いたのは、もう3年も前のことです。2017年9月23日の主教按手式前のリトリートを1人、宝塚黙想の家で行っていました。主教になるという恐れと不安の中に届いたメールでした。なんとか司祭の思いをかなえてあげたい、と心に強く思いました。

聖公会神学院からの「研究休暇」の案内を頂き、当時司祭が牧会していた神戸聖ペテロ教会の後任牧師も神様が備えて下さいました。そして、司祭に1年間の聖公会神学院での研究の時間を与えることが出来ました。神学院での研究中、西原廉太司祭（現中部教区主教）の親切な指導を頂いたそうです。この場を借りて感謝いたします。

今回、中原司祭が神学院の研究中に訳した『バジル書簡集 第3巻』が、教区歴史編纂委員会から発行されることになり心から喜んでいます。今回は、書簡43号（バジル主教56歳）から、バジル主教の逝去の2か月前に書かれ、最後のものとなった58号（バジル主教61歳）までとストロング司祭の増補7号までです。バジル主教は誠実に、精力的に活動されました。だんだんと戦争が近づいてくる中で英国人主教として、日本の動きとそれに翻弄されていく日本聖公会の姿を冷静に、愛と責任をもって見つめておられます。その思いが、重い病気の中でも「アメリカで死ぬのなら、私は神戸地方部主教として死にたいと願っています」という言葉に表れています。そして主教は、亡くなるまで神戸教区のためにフェローシップのメンバーに祈りと寄付を呼び掛けて下さいました。

その思いを引き継いで下さったストロング司祭も戦争中、神戸教区のためにメンバーに祈りと寄付の積み増しを依頼して下さいました。そして、終戦の

後、希望の光の中で神戸教区への支援の再開に胸を膨らませておられる同司祭の思いを受け取ることができます。

『日本聖公会神戸教区宣教 140 年史』の「神戸フェローシップ」の箇所には、バジル主教が主教に選ばれた時、彼が牧会していたロンドンのマンスター・スクエアにある聖マリア・マグダレン教会の信徒たちが「バジル主教を祈りだけでなく、財政的にも支えようと神戸フェローシップを設立し、500 人以上が直ちにこれに加わった」と説明されています。名前も伝えられていない多くのメンバーが、祈りと寄付によって私たちの神戸教区を支えて下さったことをこの書簡によって教えられました。バジル主教、ストロング司祭と共にこれらのメンバーに、改めて感謝するものであります。

ストロング司祭の逝去後、「Kobe Fellowship」から現在の USPG (United Society Partners in the Gospel) に移管されているファンドは、2つあります。

「A-fund」と呼ばれる「Kobe fund」と「B-fund」と呼ばれる「Kobe Bickers Bequest fund」です。「A-fund」からは、毎年約 90 万円の利息が神戸教区に送金され、主教の意向を常置委員会が承認し、その時に必要な所に充てることができます。コロナ禍で厳しい今年度は、教区の一般会計に入れました。「B-fund」は、神戸教区の聖職が英国にあった聖使修士会のケラム修道院へ留学するための基金でしたが、同修道院が閉鎖された後、他の留学に充てることができるようになりました。私も約 30 年前に英国南部のチチェスター神学校に留学させていただきましたが、この基金から支出していただいたはずです。今回、中原司祭の東京での研究を支えたのもこの基金です。

読者の皆さんが、バジル主教、ストロング司祭、フェローシップのメンバーの生き様をこの書簡集から読み取り、み心に適った生活ができますよう、心より願っています。

2020年 クリスマス

## 推薦の言葉

日本聖公会中部教区主教 アシジのフランシス 西原廉太

この度、これまで未発表であった、1937年6月以降のジョン・バジル・シンブソン主教の書簡が『Kobe Fellowship Letters—バジル書簡集』として翻訳・刊行されることとなった。20世紀初頭の日本聖公会、神戸教区の礎を築いた一聖公会主教の、異郷の地での宣教・牧会にかける情熱と、その涙と汗、喜びと悲しみが手に取るように伝わる書簡であると同時に、とりわけ第二次世界大戦に突入する日本に在住した外国人の視点から、当時の日本社会の実像が克明に記録された一級の歴史的資料が、このようにして出版公開されることを心から喜びたい。

翻訳者の中原康貴司祭によれば、信岡章人司祭所蔵の書簡であったそうである。中原司祭が信岡司祭のもとを訪ね、この貴重資料を見出し、さらには、この未翻訳部分は必ず訳出されるべきであるという、中原司祭のいわば執念が、奇跡的に本書の発刊を現実のものとした。中原司祭は2019年度、聖公会神学院において特別研究の時を過ごされたが、研究の傍ら、本書簡の翻訳作業を丁寧継続された。私は監訳を依頼されたのであるが、つい、その内容に読み入ってしまい、監訳作業は遅々として進まなかったため、ご迷惑をおかけしたことをお詫びする次第である。しかしながら、それほどに中原司祭の訳文は正確で読み易く、ほとんど修正提案をする必要もなかったのである。

1938年2月の「書簡48号」には、当時、天然痘が流行し、宣教師たちも感染症予防対策にいかにか苦労したかが窺える記録がある。「残念ですが、彼は天然痘で1週間前に隔離病院に入院しました。彼は本国で6か月前に予防接種を受けていたので、私たちは彼がすぐに良くなることを強く期待しており、病院からの報告は今のところ非常に良いのですが、知ってのとおり天然痘は恐ろしい病気です。どうぞ、彼のためにお祈りください。私たちは皆、予防接種を受け

ており、家は隅々まで消毒しました。しかし、それでも私たちのうちの誰かが感染する可能性はあります。その発疹は、それが何であるかを予想するまでもなく、明らかでした。彼がどこで感染したのかは分かりませんが、神戸で天然痘は少し流行しています。」今、私たちは新型コロナウイルス感染症蔓延への対応に疲弊しているが、私たちの宣教・牧会とは、常に感染症との苦闘の歴史でもあったことに、あらためて気づかされる。

1939年5月の「書簡49号」以降には、戦争への足音が高まる中、聖公会も宗教団体法などの圧迫を受け始めていく経緯が生々しく記され、読み進める内に胸が締め付けられる。1943年1月の「書簡増補3号」には、このような記述がある。「1941年12月8日のアメリカと英国に対する日本の宣戦布告は、英国のすべての人たちと同様に、日本にいる私たちにとっても大きな衝撃でした。状況は深刻でしたが、最悪の事態は起こらないと思っていました。もちろん、戦争が起こった場合、まだ日本にいる宣教師が抑留されることは十分理解していました。実際、宣戦布告の日、八代主教は地元の当局から宣教師は自分の家に留まることができるだろうと言われていました。しかし翌朝、聖ミカエル教会の聖餐式に出て、私も出席する予定だった教区会の準備をし、朝食のために家に戻ると私を逮捕しに来た警察に迎えられました。かれらはとても親切で礼儀正しく、拘留は大衆の興奮が落ち着くまでの数日だろうと話してくれました。「数日」は8か月になりました。7月29日に本国交換船に乗って出発するまで私たちは抑留されたままだったのです。」

今、私たちが、日本聖公会につらなる者たちとして、豊かな教会生活を送ることができているのも、バジル主教をはじめとする、海外からの宣教師たちの尊い働きや蒔かれた種のゆえである。私たちが、これからの未来へと向かう宣教のヴィジョンを模索するために、この『バジル書簡集』が必読の書であることは間違いない。

## 訳者まえがき

ジョン・バジル・シンプソン主教が 1925 年に日本聖公会神戸地方部の主教に就任する際、彼が直前まで牧師を務めていたマンスター・スクエア聖マリア・マグダレン教会が中心となり、在英有志によるバジル主教の私的後援会「神戸フェローシップ」が発足した。その神戸フェローシップに宛ててバジル主教が書いていた定期刊行物『Kobe Fellowship Letter』を日本聖公会神戸教区歴史編纂委員会（以下、歴史編纂委員会）が訳出し、上巻を『The Fellowship Letters』として 1985 年 10 月に、下巻を『Letters to the Kobe Fellowships』として 1987 年 1 月に発行している。

このときの翻訳に用いた『Kobe Fellowship Letters』の底本は、英国のケラム神学校付属図書館に所蔵されていたもので、ケラム神学校が閉校作業を行っているとき、同校に留学中であった伊神努司祭に譲渡され、1973 年に日本に持ち込まれたものである<sup>1</sup>。その底本に収録された『Kobe Fellowship Letter』の 1 号（1925 年 11 月発行）から 22 号（1931 年 8 月発行）までが上巻に、23 号（1931 年 11 月発行）から 42 号（1937 年 2 月発行）までが下巻に訳出された。

しかし、バジル主教が日本を離れたのは 1941 年 2 月、神戸地方部主教を辞任したのは同年 9 月 29 日付である。また、下巻の最後に収録された 42 号には『Kobe Fellowship Letter』がこれで終わるということは記されておらず、その気配もない。そこで、続きがあるのではないかと考えられていたが、これまでその存在は知られていなかった。

訳者は 2015 年に発足した神戸教区宣教 140 年史編纂委員会に加えられ、『日本聖公会神戸教区宣教 140 年史』の「バジル主教時代」他を執筆することにな

---

<sup>1</sup> 日本聖公会神戸教区歴史編纂委員会（1985）「書簡集出版の経緯」『The Fellowship Letters（上）』日本聖公会神戸教区

った。そして、2017年に「バジル主教時代」の初稿を書き終えた後、バジル主教時代のことをよく知っておられる信岡章人司祭を訪ねた。すると、信岡司祭はある書類を見ながら、訳者にご教示して下さったのだが、それは『Kobe Fellowship Letter』の1号から58号とジョージ・ノエル・ストロング司祭が記した『Kobe Fellowship Letter. Supplement』の2号から7号のコピーであった。信岡司祭は親交のあったストロング司祭からそれらを受け取ったとのことである。訳者はそれらをコピーさせて頂き、「バジル主教時代」に若干の加筆をすることができた。

その後、『Kobe Fellowship Letter』の未訳部分も翻訳されるべきだと考えている中で、訳者は2019年5月から2020年3月まで聖公会神学院で研究生生活を送る機会が与えられ、未訳部分をここに訳出することができた。尚、文中の注はすべて訳者による注である。

本書のタイトルについては、邦訳の上巻が『The Fellowship Letters—八代斌助主教の前任者、バジル・シンプソン主教が在英・神戸後援会にあてた書簡集』、下巻が『Letters to the Kobe Fellowships—八代斌助主教の前任者、バジル・シンプソン主教が在英・神戸後援会にあてた書簡集』となっている。一方、これらは「バジル書簡」として親しまれていることから、『Kobe Fellowship Letters—バジル書簡集』とした。また増補7号にも、これで書簡が終わるという記載はなく、神戸フェローシップは少なくとも1959年まで存在し、神戸聖ミカエル大聖堂建設のために、特別な寄付を集めている<sup>2</sup>。そこで、これに続く、神戸フェローシップの新たな書簡や会報が発見されることを願い、『第3巻』とした。

---

<sup>2</sup> 八代斌助 (1959) 『ランベスあとさき』 奇峰社、127頁。

## 目 次

推薦の言葉	1
訳者まえがき	5
書簡 43号 (1937年6月7日) バジル主教	8
書簡 44号 (1937年11月5日) バジル主教	14
書簡 45号 (1938年3月29日) バジル主教	20
書簡 46号 (1938年8月15日) バジル主教	26
書簡 47号 (1938年11月23日) バジル主教	32
書簡 48号 (1939年2月17日) バジル主教	38
書簡 49号 (1939年5月19日) バジル主教	44
書簡 50号 (1939年8月19日) バジル主教	50
書簡 51号 (1939年11月9日) バジル主教	54
書簡 52号 (1940年2月) バジル主教	58
書簡 53号 (1940年5月22日) バジル主教	62
書簡 増補 2号 [1940年8月頃] ストロング司祭	66
書簡 54号 (1940年9月22日) バジル主教	69
書簡 55号 (1941年3月22日) バジル主教	76
書簡 56号 [1941年5月頃] ストロング司祭	83
書簡 57号 (1941年11月22日) バジル主教	86
書簡 58号 (1942年2月22日) バジル主教	94
書簡 増補 3号 (1943年1月) ストロング司祭	100
書簡 増補 4号 (1943年10月) ストロング司祭	106
書簡 増補 5号 (1944年11月) ストロング司祭	109
書簡 増補 6号 (1945年10月) ストロング司祭	112
書簡 増補 7号 (1946年12月) ストロング司祭	116
訳者あとがき	120
索引	122

## 書簡 43号

シベリア経由

日本、神戸、四宮、松乃舎

1937年6月7日

私の友人ご一同様

書簡が1か月遅れて申し訳ありません。この6週間に多くの出来事があり、そのために遅れてしまったのですが、それらは書く材料となりました。まず、4月の終わりに日本聖公会組織成立50年記念式典が東京で開催されました。催しの次第は前の書簡で大まかに説明しましたが、参加者数、熱意、そして敬虔さが期待を上回りました。いくつかの予測では3,000人以上としていますが、それは言い過ぎでしょう。しかし、確かにメインの朝の聖餐式には2,000人以上が与りました。20人の司祭（各教区から2人）が分餐して、45分近くかかったほどです。前夜の聖餐式と歌による夕の礼拝にも、およそ祭服を身に着けた230人の司祭、30人の執事、そして60人の伝道師がプロセッションに加わりました。その人数にふわさしいホールを見つけるのは不可能で、私たちのどの教会もその10分の1すら収容できません。そのため、神学校のグラウンドに大きなテントを張り、天候にも恵まれて完璧でした。最終日の朝、東京のいくつかの教会で早朝聖餐式を終えた後、4時間半以上かけて講義、報告、講演が、もちろん日本語で行われたので、とても疲れしました。しかし、誰もが私たちの主の御旗の下、神の国の一員であるとの思いを抱いて帰りました。100周年に向けた今は、他の人たちも巻き込んだ全国的な伝道活動を始めています。

復活日の翌主日には、私の休暇中に火事で建物が消失した鳥取の境で新しい教会を聖別しました。古い建物は雑然としていました。1つの建物に教会として使用していた部屋とそれ以外の幼稚園や職員の住居が混在しており、どこも聖別されていませんでした。教会は小さいですが、今では3つの建物があり、

復活教会として聖別しました。

次に、英国の戴冠式の日〔5/12〕を迎え、日本でも英国人が集まる場所であれば、どこでも祝うことができました。神戸市内では、オール・セインツ教会と聖ペテロ教会の早朝聖餐式の後、オール・セインツ教会（英国会衆）では、子どもと大人の2回の礼拝が満員でした。大人の礼拝では母国が発行した礼拝式文を用い、説教もしました。そして、英国領事主催のレセプションです。午後、多数の外国人を招いて英国人コミュニティによる盛大なレセプションが広いレクリエーション広場で行われました。1,800 通以上の招待状が送られ、そのほとんどが出席しました。これで皆さんは国際都市神戸の規模を少し思い浮かべることができるでしょう。（ここに子どもは招かれず、翌日の午後、楽しい運動会が用意されていました。）夕方には、日本の公人だけが領事館に招かれ、舞踏会が行われました。この2つのイベントの最中に、戴冠式の時間を迎えたのですが、日本に伝えられたのはウェストミンスター寺院の外にいる中継者が人の出入りを日本語で簡単に説明したものでした。実際の礼拝を聞く唯一の方法は、強力な短波無線機を使うしかありませんでしたが、日本でそのような無線機を持つことは許されていません。

上記は宣教師団に関するニュースではありませんが、私たちがその日に何をし、また何を共有できなかったかを皆さんが知りたいだろうと思ったのです。この9日後、日本の単葉機「神風号」（英語では「Divine Wind」）が往復飛行に成功して帰還しました。その完成度はフランス人パイロットによる日本行きが墜落したことにより、これまで以上に注目されるようになりました。すでに他の経路で到着していたのかもしれませんが、この単葉機は戴冠式のフィルムを載せていました。その映像はわずか12分しかありませんが（寺院内部はそのうちの2分だけ）、私たちは皆でそれを見ることができました。

さて、三位一体主日〔5/23〕は皆さんが祈ってくれていた2人〔ステパノ袴田観一伝道師、ヨハネ信岡修吉執事〕の聖職按手式で、執事按手は3年半ぶりです。私がランベス会議で帰国するまでには、もう何人かの聖職按手式がある

と期待しています。金曜日の夕方から聖職按手式の前の短いリトリートを持ちました。幾人かの司祭が志願者とともに参加し、聖ヨハネ修士会の桜井〔健〕神父が黙想指導と按手式の説教もしてくれました。リトリートには 12 人が出席しました。聖職按手式は聖ミカエル教会が満員となり、14 人の司祭がともに手を置き、新司祭にチャジブルを着せました。彼は翌朝、私のチャペルで初聖餐をささげました。

聖職按手式に出席した司祭のうち 2 人はゲストで、1 人はザ・チャーチ・ユニオン国際主事のマシュー司祭です。彼はキルバーンの聖ペテロ共同体長でもあり、(多くの方が知っているように) 朝鮮宣教が始まって以来、朝鮮に支部を置いています。彼は今、朝鮮の修女会に滞在し、宣教師団がそこで行っている素晴らしい働きを目にしています。彼は朝鮮へ向かう途中で神戸に上陸したのですが、そのおかげで聖職按手に加わることができました。他の外部からの司祭はニューヨーク処女聖マリア教会牧師で聖ヨハネ修士会のウィリアムズ神父です。彼はアメリカ人と日本人の神父たちを訪ねて日本に来ているのですが、彼が聖職按手式に加わったことも、私たちにとって大きな喜びでした。

私たちはイースター以来、ショックを受けています。来春卒業予定の 2 人の神学生のうち 1 人が結核を発症したという知らせを受けたのです。幸い、日本の中部地方でカナダ聖公会が運営している〔新生〕療養所に彼を連れて行くことができ、療養所からは彼の症状は軽く、治癒の可能性があるとの知らせを受けました。しかし、それは追加の出費が必要であり、彼の伝道師としての仕事を始める準備が相当遅れることを意味しています。ミス・ウィリアムズは私が思っていたよりも回復に時間がかかり、イースター後まで入院していました。しかし、今は随分と良くなり、姫路の働きに復帰しましたが、しばらくは静かに過ごす必要があります。

更なる出来事は 4 日前の 6 月 3 日に行われた松蔭女学校のチャペル聖別式でした。これには SPCK〔Society for Promoting Christian Knowledge〕から幾らかの助成金が約束されており、SPG〔Society for the Propagation of the

Gospel in Foreign Parts] にも特別基金から同様の金額を求め、今月、それらが支払われると期待しています。また、先の書簡に書いた私の特別なお願いに対する、いくつかの寄付を受け取りました。学校のクリスチャンたちは鐘塔の追加を祈っていましたが、ある日、鐘が手に入ることになりました。寛大な母国の友人が助けてくださったのです。これらによって私たちは借金から解放されるでしょう。しかし、聖別式のために作られ、奉献された祭壇以外に新しい家具は何もありません。早朝、信者だけを迎えて、聖餐式とともに聖別式と祭壇の奉献式を行いました。そして、午後には未信徒も招き、夕の礼拝で感謝の祈りをささげました。チャペルは 50 人を優に収容することができ、特別な場合には 70 人が入るように建てましたが、その日の午後には 100 人以上がやって来て、入り口前の広場に溢れていました。名前についてはかなりの議論がありました。良く知られた聖女の名前はすでに他の聖公会学校で使われており、日本では本や写真でしか羊を知ることがないため、「良き羊飼ひ〔Good Shepherd〕」ではあまり伝わりません。最終的には聖ヒューに決まりました。聖ヒューは学校を設立した主教〔ヒュー・ジェイムズ・フォス〕の洗礼名であり、私が生まれたリンカン教区の主教でもあります。そして、彼の優しさ、勇氣、迫害下における加護、そして彼の紋章である白鳥の清らかさ、これらすべてが、彼女たちがこの国で直面しなければならない困難や危険の中で、少女たちの心を励ましてくれるでしょう。この長く待ち望まれ、私が昨年帰国している間に多くの人が乏しい中から持ち寄って建てられたチャペルで、聖ヒューが皆さんと私たちの祈りとともに神の永遠の祝福を祈ってくださいますように。

最後に昨日、6月6日の日曜日、私は明石で荘厳聖餐式をささげ、初めての堅信式を行いました。そして、聖ミカエル教会から分かれ（これまでは伝道所でした）、独立した教会としての始まりを宣言し、聖マリア・マグダレンの庇護下に置きました。教会はまだ借家を使っていますが、購入予定地は決まっております。購入資金もすでに手元にあります。問題はこの国の複雑な法律によって手間取ることだけですが、早く認められることを願っています。昨日、それが

完了すると期待していましたが、まだです。私はマンスター・スクエア聖マリア・マグダレン教会の皆さんがこの新しい教会に特別な祝福をお祈りくださると信じています。

一方、数日前にストロング司祭から、下関の追加の土地が最終的な法的問題を乗り越えて私たちのものとなったと聞きました。これで彼の休暇が始まるまでに老朽化した建物を取り壊し、囲いを完成させることができるので、とても満足しています。彼は7月の最終週に出航し、8月が終わる1週前にエンプレス・オブ・ブリテン号でサウサンプトンに到着する予定です。彼はヨハネ信岡〔修吉〕司祭のことも喜んでいます。ヨハネ信岡司祭は執事として数年訓練を受け、今は司祭となり、月に一度訪ねていたストロング司祭に代わって、松山の信徒とともに聖餐式と交わりを持っています。そして、日本人教役者はどこへでも出向き、四国北西部の町々で孤立したクリスチャンを発見しています。信岡司祭は今まで時間や機会がなかった場所で、聖餐式をささげることができるでしょう。

しかし、ストロング司祭のもう1人の協力者であるペテロ加藤〔九十九〕はまだ執事ではありません。そして、山口県には司祭が洗礼や聖餐の sacrament を執行している多くの集会があります。そこで、夏休みが終わり、(9月22日と23日に予定されている) 地方部会後から、ストロング司祭が留守の間はバッジャー司祭が住むことになりました。彼は2週間前に初めて日本語で聖餐式をささげ、夏休み前には最初の語学試験を終えたいと考えています。しかし、まだ彼には日本語で教会委員会などを行うことはできません。そのため、私は時々、必要な事柄に対処するため、また松山の新しい司祭を見守るためにも、定期的に出向かなければなりません。

ここは司祭たちが必然的に独身でなければならない地方部ではありません。宣教師が最初の任務期間中に結婚しないのは SPG のルールです。そのため、バッジャー司祭とミス・エドワーズは婚約していますが、4年以上、待たなければならないことを知っており、かれらはその婚約が宣教師としての活動の妨

げとなっていないかと心配しています。

この時期は多くの地方行事があり、より一般的な問題について書く余地がありません。しかし、重要な多くの問題は来年の総会で生じるでしょうから、次の機会に書きたいと思っています。

この秋、神戸フェローシップの主事が来訪することを楽しみにしています。以前、彼女がここでの働きを見てから9年ぶりのこととなるでしょう。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

## 書簡 44号

シベリア経由

日本、神戸、四宮、松乃舎

1937年11月5日

私の友人ご一同様

前回の書簡はちょうど5か月前でしたが、この書簡が遅れた主な理由は皆さんも新聞やラジオでご存じの日中戦争によります。

私は1920年代のはじめ、ロンドンで働いていたときによく使われていた表現を思い出します。聖職者の退職や死に際して「戦時下という困難な時にもかかわらず、彼は教会を守り続けた」と言及しますが、要約すると、教会はその期間、ただ状況を見守っていたということです。ここでも立ち止まって、次に何が起こるのかを見守っています。そして、今後のあらゆる動きはそれらの出来事次第と考えられている感があります。

この書簡は完全に私的なものではなく、ある程度、公開されているものであることから、私は書くことが非常に難しく感じています。いろいろと耳にしているかもしれませんが、あつてはならない多くの問題があります。皆さんがそれらの渦中にいるとき、大きな事件について判断することは、不可能ではないにせよ、常に難しく、間違っていることが多いでしょう。しかし、この混乱の中でお伝えしたいことがいくつかあり、合わせて話すと非合理的に聞こえるかもしれません。しかし、すべての戦争は罪であると私は考えており、ある戦闘の手段（特にこの機械の時代において）についてはこれまでより、残酷で恐ろしいものです。しかし、もし徴兵された人がクリスチャンであっても、司祭であっても、かれらが戦争に行くことを拒否すべきか尋ねると私はこう言います。「いいえ、あなたの国が求めている時は国に仕えなさい。そして、必要であれば国のために死になさい。神があなたを祝福してくださるように」。平和主義

者は私がおかしなことを言っていると見なし、論理的な人も別の観点から同じように見るでしょう。戦争は自分の国を守るときにのみ正当であるという人もいるかもしれませんが、ここでは誰もが現在の戦闘は国を守るためであると当局に聞かされているということ覚えておいてください。

小国の一般的な声は、この国が間違っていると言います。また、エチオピアにおけるイタリアについても、40年ほど前の南アフリカにおける英国についても、そう言っています。私は母国のそうした見解が自由都市への空爆に対する正しい怒りだと認識しています。しかし、母国も再軍備をもって、あらゆる形の防衛とこのような攻撃に対する反撃を準備しています。つまり、もしヨーロッパで再び戦争が起これば、同じような攻撃が双方で行われることになるのです。インド北西部の開拓地に関する C.F.アンドリュースの本を読んだことはありませんか。

タイムズ週刊版 10月14日号の一貫した2つの記事を読みました。同じ記事が、おそらく同じ日ではなく、直前の日刊にもあったように思います。1つは「日本の国防」という見出しで、日本の指導者たちによる自国防衛の声明を批判しています。その記事は「少し内容がなさすぎる」という言葉で控えめに締めくくられていました。それはそうですが、皆さんも私も母国の新聞で知っていますが、今もこれまでも、こちらの一般人には知らされていないことがたくさんあるのです。

その他の主要な記事は「麻薬取引」という見出しですが、個人的にはそちらの方が戦争よりも悪いと思っています。それは確かにかなり悪質です。しかし、次のことを知らないか、忘れていたら、思い出してください。ちょうど80年前、**私たちの船は川に並んで、24時間以上、広東を砲撃し、弾丸や砲弾を一般人の町に降らせました。**その動機の1つは英国の東インド会社が持ってきたアヘンに手を染めることを中国に強制することだったのです。中国は（現在もそうであるように）犠牲者です。戦後、中国は北京を放棄し（今は再び北京と呼ばれていると聞いています）、アヘン貿易の中心となった香港島を譲渡しまし

た。この条約により、中国は莫大な賠償を払い、恒久的に英国大使に裁判権を与え、アヘンの自由貿易を許可し、キリスト教宣教師の存在を認めなければならなくなったのです。広東での我が国の暴力に関する議会の議論は現状において興味深いです。特に当時のオックスフォード教区主教はそのことに反対しました。

今、話していることは真実であり、現在、私たちはそのようなことをすべきではないと信じています。しかし、当時の私たちは自分自身をキリスト教国であると今以上に考えていました。私はそれが戦争であろうと、いかなる国が自由都市を空爆することも弁護しません。神はこれを禁じています。しかし、この国では、ほとんどの人が今、中国で何が行われているかよりも、私たち英国人が何をしたかを知っているのです。

ご存じのように、日本では教会の教役者や聖職者も兵役を免除されていません。神戸地方部からはまだ誰も徴兵されていないことを感謝していますが、他の地方部では徴兵されています。私は2週間前、地方部の端にある牧師館を兼ねた教会にいました。夕食の少し前に、私がいると知らないで1人の男性が教会を探してやって来ました。私は玄関に出て、軍服を着た軍人に会いました。私が教会をお探ですかと尋ねると彼は「はい、私は司祭です」と言いました。彼は長居することはできず、夜には出発しましたが、旅立つ前に私は彼を祝福しました。その後、同じ夜に、3日前に徴兵され、連隊の駐屯地へ向かう途中だった神戸聖ペテロ教会の信徒が夕の礼拝に出席しました。彼は2日前に仲間たちに神戸で見送られたのです。全国の駅で、1日中、そのような見送りを目にします。日本の公的行事と同様に、この熱狂は組織的に行われています。かれらは軍歌を歌って国旗を振り、見送られている予備兵は戦争が終わっていることを願っているに違いないと、皆さんは思うでしょう。とにかく、兵士たちの多くは見送ってくれたすべての人にお礼の葉書を送るようです。

私が本州を何時間も旅した際、赤十字の看護助手と看護師がその列車にたくさん乗っていました。彼女たちは寒さに備えて厚手の服を着ていましたが、列

車の中はとても暑い午後でした。停車した駅で彼女たちは人々から歓迎され、花、果物、ビスケットなどの贈り物を受け取りました。私の向かいに座った看護助手と看護師は歓迎してくれた人々の名前と住所を書き留めるのに何時間も忙しくしていました。それは後でお礼の葉書を書くための準備に違いありません。

私はお礼の葉書に、生きて帰ることを期待してはいないが、あなたと再会できたなら、お国のために命をささげた兵士の魂のために神社を参拝したいと書いてあるのを見ました。その他にも、千人によって縫われた、千の縫い目を持つ腹巻が戦地で死に対して絶対的な防護になると広く信じられています。そのような腹巻は「千人針（千の縫い目のガードル）」と呼ばれています。1か月以上前に、多くの女性や少女が駅や大きな百貨店の外で、通りがかりのすべての女性に一縫することを頼みますが、ほとんどの人は拒否しません。最近あまり目にしませんが、他のお守りもあります。あらゆるお守りが母国でも信じられていましたが、20年前はそのようなことはなかったでしょう。

しかし、私たちとは全く違う、別の光景がこちらにはあります。フランスやその他の国々には多くの英国人墓地があり、そのうちのいくつかは巨大で、戦死者のための墓石が立ち並び、遺体がそこに安置されています。私には3、4か所の特に鮮明な思い出があります<sup>3</sup>。しかし、中国における日本人の死者に（この戦争の後）そのような墓標は残りません。かれらの遺体はすべて火葬され、遺灰が家に送られるのです。これには多くの時間と問題が伴いますが、常にそうされるのです。時には船が神戸や他の港にやって来て、白い布で包まれた四角い箱がいくつも運び込まれます。これらは陸上で宗教的儀式を経た後、列車で遺族に配られます。私は小さな村の駅でその列車の旅が終わるのを見ました。車掌は白い布で包まれた箱を持って列車を降ります。天候に恵まれた農民の一群は最上の服を着て、遺族とともにプラットフォームに立ち、お辞儀をして箱を

---

<sup>3</sup> バジル主教は第一次大戦中、従軍チャプレンとして奉仕している。

受け取り、立ち去って行きました。そこには最後の帰宅となる兵士もいました。新聞には負傷者と死亡者のリストが掲載され、時にはそれが遺族にとって最初の知らせとなります。ですから、英国のように日本は国内で戦う恐怖はありませんが、常に私たちは戦争中であるということを感じています。

税金と同じように、物価は着実に上がっています。そして今、輸入の多くは完全に禁止されています。母国の発言や行動の結果、日本聖公会が厳しい状況に置かれていることを報道されているでしょう<sup>4</sup>。しかし、状況はまだ落ち着いておらず、私はそのことについて書くつもりもありません。私たちのために知恵と導きを絶えずお祈りください。

この危機的な時期の最中、神戸フェローシップ主事のミセス・ジョンソンとそのご息女が、9年前より発展した宣教の働き、特に教会、学校、その礼拝堂などを見るためにやって来ました。彼女たちは、この9年間にどれほどのことが為されたか、ここで長年過ごしていた私には気づけなかったことを気づかせてくれました。到着の日、彼女たちは8時に着く予定で、私は7時半に家を出ました。しかし、彼女たちが上陸し、税関を通過したのは何と午後1時半のことでした。時間がかかったのは、主に埠頭の大部分で軍隊の乗船が予定されていたためです。そして、神戸での最初の夜は、空襲訓練のために停電していました。そのため彼女たちはすぐに普通ではないことに気づきました。しかし、それ以降、彼女たちは何の問題もなく、いくつかの新しい教会や地域に出向くことができましたので、帰国したら皆さんにお伝えすることがたくさんあるでしょう。

私はこの書簡で全般的な宣教活動については何も述べていませんが、誰も戦争や政治に関連することを考えたり、話したりすることはできません。しかし、宣教師たちについて言うておくべきことが2つあります。まず、私が6月に書

---

<sup>4</sup> 英国で開かれた日中戦争に対する反日抗議集会でカンタベリー大主教が議長を務めたため、日本聖公会は苦境に立たされた。

簡を書いた直後、ミス・ストークスから、ゆっくりと着実に良くなってはいるが、2年経っても片足は道具なしにはまだ上手く動かせないので、辞任したいという手紙が届きました。私たちは彼女を失うことをとても残念に思っています。彼女はどのようなときも勇敢で決断力がありました。私は今も彼女が良くなることを願っています。

それから聖マタイ日にアレン司祭の結婚予告が行われました。お相手は帰国していた時にブラッドフォード・デーで知り合った、『信仰深い生活への真剣な呼びかけ』の著名な作家ウィリアム・ローの子孫のミス・ローレンス・ローです。アレン司祭と過ごした10年以上の日々が、私にとってどのような意味があったかをすべて書き記すことはできませんが、皆さんにはそれが想像できるでしょう。彼は来年夏の休暇で帰国するまでは結婚しません。

明石の新しい敷地購入が7月の最初の教会記念日に完了したことを喜びをもってお知らせしたいと思います。

初夏のフェローシップ・ファンデーションへの急な呼びかけに対して、皆さんの素晴らしい応答に感謝しています。5か月前に恐れていたほど、私たちが落ち込むことはないでしょう。

子なるキリストの平和があなたがたの心にありますように、また世界にもたらされますように。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

## 書簡 45号

シベリア経由

日本、神戸、四宮、松乃舎

1938年3月29日

私の友人ご一同様

再び、前回の書簡から5か月も空いてしまいました。皆さんの周りでは多くの情報が出回っており、状況は毎月、時には毎週、目まぐるしく移り変わる中で、いつ書くべきかを見極めることはとても難しいことです。

しかし、前回の書簡で私は一般的な状況について書きましたが、今回は前回ほとんど語らなかった教会と宣教活動について書きたいと思います。秋の間、私たちの日本聖公会には内部の緊張とストレスがあり、国際的な緊張に関してもそうであったように、物事がかなり落ち着いた12月中旬、極限に達しました。突飛だと言う人もいるかもしれませんが、戦闘が続いているにもかかわらず、クリスマスには子なるキリストの平和が驚くべき方法で広がり、その影響が続いていると私は強く感じました。これはもう問題がないという意味ではなく、新しい問題は毎月起こっています。原則として、主教会は年に2、3回開催されますが、先週、半年で5回目の会合が東京で開催されました。遠方からの主教たちにとっては相当な時間と費用がかかっていますが、次に何が起こるのか気がかりなのです。

主教会の議長を務めている南東京地方部のサムエル・ヘーズレット主教には非常に深刻な結果が待ち受けていました。私が神戸に来る前の2年半、この新しく分割された地方部には主教がいなかったので、彼は自分の地方部と同じように管理しました。その上、1922年に接手された日から、さらに5年間、(以前から)空位だった最北の北海道地方部もヘーズレット主教が管理していました。そして、いくつものストレスの結果、片目の網膜がほぼ完全に損傷してし

まったのです。それは 13 年前のことで、彼はそれでもずっと主教職を続けています。しかし、昨秋の厳しい状況が極限に達した 12 月に、彼のもう片方の網膜が部分的に損傷しました。眼科医は目を大切に、使い過ぎなければ、悪化しないだろうと言っています。明るい日は拡大鏡を使ってゆっくり読むことができますが、曇りの日や人工の光では全く読むことができません。

特別に召集された主教会で（クリスマスの 3 日前！）、ヘーズレット主教は教務院の議長も兼ねている総会議長を辞任しました。そして、私たちは彼の代わりに年配の日本人主教、大阪教区の名出主教を選びました。しかし、ヘーズレット主教は引き続き、主教会議長と神学院と聖公会出版の理事長を務めます。彼は何事においても勇気があり、辛抱強いので、私は彼がその務めを続けることができると願い、信じています。どうぞ、彼のために特別にお祈りください。

3 年に 1 度の総会が今年予定されており、今回は 4 月 26 日から 29 日にかけて古都の京都で開催されます。皆さんがそのことを覚えて祈ることができるよう、この手紙が間に合うことを願っています。個人的には、状況はまだ非常に厳しいので来年まで延期した方が良くと考えていますが、そのように考えるのは少数です。困難は今も、そしてこれからも続くでしょう。それらすべてが神の栄光と神の教会の正しさによって覆されるようお祈りください。

マンスター・スクエア聖マリア・マグダレン教会の第 2 代牧師ボンソンビー司祭と関係のある、12 月に逝去したリチャード・ボンソンビー＝フェインについて記したいと思います。現在の牧師はミスター・ボンソンビー＝フェインがサマセットに美しい邸宅と敷地を所有していた頃から彼をよく知っていました。しかし、彼は 20 年以上、日本家屋で暮らし、日本の服を着て、ほとんど日本で生活していました。彼は未婚で、神道、特に歴史ある神社の研究に専念し、たくさんの本やパンフレットを書き残しました。私は彼と 2 度会ったことがありますが、彼は英国に行くとき、いつも聖マリア・マグダレン教会を訪れていました。日本では彼と会っていませんが、昔のよしみで葬儀には出席しました。彼は日本では出来る限り、すべての西洋に関するものや西洋人を避けており、

遺言でどの西洋人も葬儀に参加しないよう望んでいました。私は式場に到着するまでそのことを知らず、私とその地方部の米国人司祭と一緒に参加したのですが、西洋人で葬儀に出席したのは私たち 2 人だけでした。そこそこ広い〔聖アグネス〕教会が、彼の神道研究に興味を持っていた多くのノンクリスチャンでいっぱいになっていました。かれらは普段教会を利用したことがないので、二語からなる日本語の大きな張り紙をすることが賢明だと考えられました。それは「禁煙」です。

葬儀の最後に日本人の学者やその他の人たちによる長い弔辞が少なくとも 9 つありました。ミスター・ポンソンビー＝フェインが暮らしていた近くの教会の日本人司祭によって、葬儀の中で彼の略歴が紹介されました。司祭は 8 年前にその教会に赴任しており、彼について特に 3 つのことを話したいと言いました。まず、それ以前は行っていなかった毎週日曜日の早朝聖餐式を行うことを求めたこと。そして、家にいるときは、体調が良くないときにも、主日聖餐式を 1 度も欠かしたことがないこと。また、神道研究で（日曜日に）京都にいないときには、毎回、あらかじめ出席できないことを残念に思うメッセージやメモを司祭に送っていたこと。次に、彼は冬の間は留守にしていたが（大体は台湾へ）、イースターが早いか遅いかにかかわらず、いつもその頃、2 つのことをするために家に戻っていました。聖金曜日の 12 時から 3 時まで教会で 1 人黙想することと、イースター前に（日本語でその司祭に）個人懺悔をすることです。最後に、死が近づいたと分かったときも、彼は司祭を呼び、死ぬ前に個人懺悔と聖体拝領をしました。独特ではありましたが、一貫してクリスチャンのジェントルマンだったのです。彼の魂が平安のうちに憩いますように。

地方部で保留となっていた何人かの教役者の異動があります。今年、(教役者名簿によると) 71 歳になる年配の司祭、ヨセフ牧野〔興三郎〕が 5 月のはじめに辞任します。彼は 7 年前から姫路の牧師をしています。しばらく前から辞任を望んでいましたが、調整が上手くいくまで待ってもらっていました。昨年執事となり、まだ司祭にはなっていないステパノ袴田〔観一〕を姫路に送ります。

そして、ステパノは〔アレン司祭のもと〕聖ペテロ教会で働いていたので、アレン司祭を6月の終わりの休暇を迎えるまで姫路の管理牧師にすることにしました。ただ、牧野司祭は姫路に小さな家を手に入れているので、今しばらくは聖餐式の手伝いをしてくれると期待しています。

ステパノ袴田のいた聖ペテロ教会には下関にいるペテロ加藤〔九十九〕を送ります。そして、下関には先週、神学院を卒業したばかりで、新しく伝道師となったテトス秋田〔温人〕を送ります。ペテロ〔加藤〕がその教会と人々をよく理解し助けていたので、バッジャー司祭にとって新しいアシスタントを迎えることは少し大変でしょう。しかし、バッジャー司祭は（原稿を読みながらではありますが）すでに日本語で説教しており、これは私が派遣した中でも最も早いことです。彼は下関でとても幸せそうにしています。私たちはこの春に2人の伝道師を迎えることを期待していました。しかし、1人は10か月前の手紙に病気だと書きましたが、まだ療養中で、ともかく夏が終わるまで勉強を始めたいと言われました。

差し迫った他の問題は私たちの保有している財産の取り扱いに関することです。私たちの教会は全体として財産を保有するための許可を得ることができません。現在、ほとんどすべての教会財産は、アメリカ、カナダ、CMS〔Church Missionary Society〕、SPGの何れかの伝道協会によって、ずっと以前に専門機関を組織して許可を得ていました。しかし、現時点では外国関係だと、特に現在軍事強化されている地域に開設する教会の場合などは、あらゆる問題を解決しなければなりません。最近、神戸地方部ではそのような場合、必然的に2人の日本人に名義を変更しました。かれらは十分信頼できる人たちですが、将来のことは保証できません。

何年も前にある人が、古都・福山のCMS関係の教会で問題を起こしました。財産は合法的に彼のままであるという妥協がなされ、私たちはただ黙認するだけです。ミセス・ヘーズレット（主教会議長の子）は1年半前に亡くなりましたが、来日初期に福山で働いており、そこで幸せな日々を過ごしました。ヘー

ズレット主教は彼女の記念にファンドを立ち上げ、神戸地方部の主教と常置委員会にささげました。そして、元金は投資していたので、その利益は恒久的に福山の働きを助けるために使われることでしょう。また、その教会の歴史で興味深いことは、教会の礎石がエクセター教区のビカステス主教によって 1890 年初頭に築かれたことです。そのとき、彼の息子〔エドワード・ビカステス〕は、日本で最初の英国人主教でした<sup>5</sup>。その教会は現在、財政的に厳しく、多くの祈りを必要としています。

三位一体主日に再び聖職按手式を行い、聖ペテロ教会へ異動するペテロ加藤と、聖マリア教会でストラックス司祭のもとで働いているパウロ植村〔義久〕の 2 人を執事にしたいと願っています。

昨年日本聖公会組織成立 50 周年に続いて、今年は小さいながらも個人的に興味深い 50 周年を迎えます。5 月、フォス司祭（11 年後に主教になる）が建てたばかりのこの家「松乃舎」に引っ越して、ちょうど 50 年になるのです。彼の幼い息子の子守りとして、かれらと一緒にやってきた若い日本人女性は、私が神戸に来る前から今も使用人としてこの家で働いてくれています。毎年開催されている地方部婦人補助会大会の間、5 月 11 日にこの庭で宣教師会議が開かれます。そこで、この老女のために、フォス主教の長女で今は大阪教区で働いているミセス・ウッドを迎えたいと私たちは考えています。それをアレン司祭が主催しており、寄付はそれぞれ 1 円までとしています。合計は少なくとも 80 円になるでしょう。その老女の名前はフジモト・ツネと言います。

1 年の休暇を終えて戻ってきたばかりのレオノラ・リーを迎え、2 週間前にバイオレット・ウッドが初めての休暇を得て帰国しました。彼女たち 2 人は松蔭女学校で働いています。ボーイズ・スクール<sup>6</sup>のエヴァ・スミスはイースター後に出港しますが、戻ってはきません。彼女の父親の調子が悪く、自分は家に

---

<sup>5</sup> 実際は、最初の英国人主教はアーサー・ウィリアム・プール主教で、エドワード・ビカステス主教は 2 人目。

<sup>6</sup> 現在の聖ミカエル国際学校。

いるべきだと確信したのです。今回、彼女は6年、神戸にいましたが、学校だけでなく（彼女の後任はいません）、英国人教会のオール・セインツでも、最初にやって来た12年前から多くの働きをしてくれました。

神戸の修女の1人、シスター・メアリー・キャサリンも、イースター後に休暇を得て出航します。しかし、数週間後にシスター・マーガレットが戻ってきて、東京から修女の1人が合間を埋めてくれる予定です。

紙面の都合上、多くの大切なことを削ってこの書簡を記しています。それらについては次号に回したいと思います。しかし、最後に、こちらを訪れ、大きな励ましを与えてくれたフェローシップの主事と、その帰路に体調を崩したご息女のことをどれほど皆さんが心配してくれているか分かっているということだけは伝えておきたいと思います。早く処置されたようですから、快復すると信じています。

昨年のクリスマス・プレゼントに協力して下さったすべての人に感謝します。今回は本の代わりに、主教邸のカーテンや家具のカバーに使わせて頂きました。それらはとても素敵です。

皆さんがとても良いイースターを迎えることができますように。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

## 書簡 46号

シベリア経由

日本、神戸、四宮、松乃舎

1938年8月15日

私の友人ご一同様

6月に手紙を書けず申し訳ありません。私は今、総会や主要な関係者への報告さえ、その他の手紙のために延期しなければならない状態なのです。7月の第1週から神戸にいる私たちの最優先事項は、7月5日の凄まじい集中豪雨による災害についてです。私が見た英国の新聞でそのことについて触れた唯一の記事はタイムズ週刊版の4行ほどの小文でした。そして、それ以来、皆さんは英国の各地でひどい洪水を経験しています。

神戸の災害で際立っていたのは、それを引き起こした雨の強さはもちろん十分驚くべきものでしたが、それだけではありません。例年、神戸の24時間の最大降水量は250ミリと言われており、水道局は最大300ミリまで対応可能だとしていました。その日は合計で470ミリ（約18インチ）降り、前日も同じように降り続いていました。皆さんもラジオで聞いたでしょうが、こちらの当初の報告によると、丘にある貯水池の1つ（またはそれ以上）が決壊したとされていましたが、実際には決壊していませんでした。しかし、それらは石と土でいっぱいになり、もう使用不可能でしょう。火曜日の朝、水や泥や岩（車の2倍はあります）、そしてすべての木々が流された濁流の想像を超える破壊力を目の当たりにした人々は、池や貯水池が一気に決壊したと思いました。実際、いくつかの池は決壊しました。そのとき六甲山にいた友人は、まるで2つの谷（かれらの家はその上に建っていました）を流れる濁流は、道を譲り合うようにして合流した後、一気に降っていったように見えたと話していました。どこの谷でも（私が垂直に切り立った崖の上で見た多くも）同じことが起こったの

です。神戸の美しい丘を形成していた砂や土、砕けやすい岩が、全 11 マイルにわたって、ほぼ同時に飽和点に達し、下の人口密集地に流れ落ちました。ある目撃者は「激流が急行列車のように早く進んでいった」と言っています。松や壁や家の梁や巨大な岩、それらが生きているかのように濁流の中で身をよじらせました。それは、まるで巨大なシャベルが丘の上から海へと地面を削り取っているかのような音でした。別の人は「たくさんの遺体が路面電車の線路の瓦礫の下に埋もれているはずですが、私は何人かが飲み込まれていくのを見ましたが、かれらを助けることはできませんでした」と言っています。

被害状況を簡単に説明すると、死者と「行方不明者」800 人以上、負傷者 2,500 人以上、家屋の流失 2,000 件以上、家屋の倒壊 2,000 件。そのほか、床上浸水 84,000 件、床下浸水 99,000 件。150,000 人が家を失いました。

宣教師たちの詳細についてですが、丘のリゾート地の住人は排他的で、私の別荘は居住に適していないため、先週まで丘に避難しませんでした。それは起こったことの 1 つの良い知らせです。上の池は決壊しませんでした。家の下の土は流れ出し、一部屋が斜面の半ばまで下がり、もう一部屋は宙ぶらりとなっていました。山へのケーブルカーは完全に流され、その下で持ち主を待っていた自動車は泥とゴミで 4 フィート下に埋まってしまいました。

写真は御影聖マリア教会に下宿していた婦人伝道師が送ってくれたものです。その時、彼女は病気の親戚を訪ねており、(他の人のように) 新聞で小さな記事を読みましたが、全く状況が飲み込めませんでした。彼女は家に着いたとき、当初は自分の家を見つけることができなかつただけでなく、家のあった通りさえ見つけることができませんでした。幹線道路から分かれている細い脇道の地域は、1 階建ての家は屋根まで、2 階建ての家は 1 階の天井まで、すべて埋まっていました。一区画に何百万トンもの、砂と汚い泥が押し寄せているのです。誰も自分の家の片付けを始めることができません。片付けるにはトラック 500 台と 1 万人の男手によって組織的に行う必要があるでしょう。同じことが他の地域についても当てはまります。私が思いつく中で最も近い例は、歴史的に有

名な埋没したポンペイとヘルクラネウムです。

ストラックス司祭とその家族は、午前3時頃、急な丘の高台にある借家を出て、フォー・ロードのイングリッシュ・スクールに入りました。そのとき、フォー・ロードは問題ありませんでした。しかし、他の主要な通りほどひどくはありませんが、午前中には早い流れができていました。ストラックス司祭の家の丘に沿って作られたセメントの階段は流され、家の前の部分は張り出した部屋がそのままぶら下がっていました。それは背後の丘から窓を壊して後ろの部屋の中や上に押し寄せた土の重さで釣り合っていたため、落下しなかったのです。後ろの部屋にあった、200冊以上の本と家財道具が使い物にならなくなりました。

御影地区は他のどの地域よりも広範囲に被害を受け、聖ミカエル教会と昇天教会の被災した信徒の多くが御影地区に住んでいました。婦人伝道師の住んでいた通りについてはすでに話しましたが、幸いなことに、彼女は2階に居住していたので、履物などの階下にあったものは別ですが、彼女は自分の財産を失うことはありませんでした。しかし、彼女は住むところがありません。その地区の他の部屋は居住できないか、既に誰かが入居しているのです。御影の教会と牧師館は高い土手のおかげで氾濫した近所の小川から運よく守られ、敷地内には数インチの水しか入らず、庭に2インチの泥が残っただけでした。

昇天教会の礼拝堂、牧師館、幼稚園は、浸水しましたが、床上までは浸水しませんでした。しかし、その結果、牧師館の基礎の一部が沈み、建物は傾いて、かなりの修理が必要です。

同じ地区にあるミス・ボールズの家（宣教師団所有）はものすごく臭い泥と共に4フィートの浸水に見舞われ、1階のものはすべて使い物にならなくなりました。その日の夜、ミス・ボールズとそこに住む昇天教会の日本人婦人伝道師、使用人とその家族は、約30人の近所の人たちを迎え入れ、食事を提供しました。そして、ミス・ボールズが修女会のところに避難したとき、他の人たちは2階に残っていました。その日、その地域に住んでいる2人の幼稚園の先生

は荒れ狂う急流で帰ることができず、今も戻ることはできていません。片付け、修理、改修など、その家だけで1,000円は必要でしょう。同じ地区の山手にある日本人の船員ホーム（海の近くにある、より大きい国際的な船員のものとは混同しないように）は、背後の丘が崩壊して大きな損害を受けました。庭と1階は両方とも滅茶苦茶になり、そこにいる労働者は2階に閉じ込められたのです。幸いなことに、当時、ホームは満室ではありませんでした。

他の教会や宣教師の家が被災しなかったことはとても有難く思います。イングリッシュ・スクールはすぐ上の公立小学校に守られました。塀で囲まれた松蔭女学校の校舎は無事でしたが、むき出しで木製の扉だけがあった北側の校長宅や同窓会館は、泥や砂が大量に残っています。

松蔭女学校のクリスチャンの教師の妻が1人溺死し、ユーラシア人の母親と子どもが溺死しました。母親は聖ミカエル教会に、子どもはオール・セインツ教会（英国会衆）の日曜学校に通っていました。そして御影聖マリア教会の信徒1人が「行方不明」です。その他には、命を失うことはありませんでしたが、溺死した子どもの父親は、彼女を救おうとしたときに大ケガをしました。

床下浸水の家は数限りなく、信徒の約50世帯が程度の差はありますが甚大な損失を被り、そのうちの何世帯かは家とすべてを失いました。人々は驚くほど互いに助け合い、聖職者は疲れを知らないかのように信徒訪問をしました。全体的な財政状況や、他の地区の同じような水害状況を聞いたため、私たちは支援を申し出ませんでした。しかし、日本人、アメリカ人、英国人などの友人たちが日本聖公会を救援するための寄付をしてくれました。そして私はフェローシップ・ファンドからストラックス司祭とミス・ポールズに引っ越し費用を支給しました。ですから、どなたでもファンドの補填や建物修理のために特別な支援を送ってくださると、非常に助かります。しかし、通常の後援会費の代わりにはしないでください。なぜなら、ミセス・ジョンソンが6月に出したアピールに対して良い反応だったにもかかわらず、ファンドは昨年も減少しており、過去5年間の平均を200ポンド下回っていました。

洪水について長々と書いていますが、まだしばらくはこの問題に心を割かなければならないでしょう。しかし、もう1つの差し迫った課題について書く必要があります。それは宣教師団のスタッフが減り、交代することです。アレン司祭は来月英国で結婚することを、バジジャー司祭は来年結婚することを望んでいます。前者は私たちに既婚女性が加わり、後者もまたそういうことになるのですが、それは独身女性のスタッフが減ることでもあります。そして次に、ミス・オードリー・ウィリアムズは海軍の人と婚約しています。彼女は予定より9か月早く帰国したいと願っており、友人のミス・エドワーズがバジジャー司祭と結婚してすぐ出発する予定です。それで2人減ります。ミス・フォーウェルズは先月末に出発しましたが、もう戻ってはきません。これで3人です。以前から、私はミス・ドルイットが召命を見つめ直したいと望んでいたことを知っていましたが、来年3月の学年末には出発し、トゥルローのエピファニー修女会に入ることになりました。私たちにとって誰かが生涯をささげることが喜ばしいことであり、かれらの未来の生活すべてが神の祝福に包まれることを祈りたいと思います。しかし、これで少なくとも9か月以内に宣教師団の独身女性は4人減ることになります。**代わりの人がある予定はありません**。ミス・ストークスは代わりがないまま、3年近く経っています。前回の書簡でボーイズ・スクールのミス・スミスもいなくなることを話しましたが、来月、その学校で働く予定の青年、パトリック・ギボンが来日することをお伝えできることはとても嬉しいです。彼はまずストロング司祭や私と共に暮らします（ストロング司祭が戻ってきたことは申し分のないことです）。ミス・スミスが住んでいた校宅にはストラックス一家がいるからです。かれらの残された持ち物は今、壊れた家から運び出して、そこにあります。

今すぐ、神戸フェローシップの皆さんは激減したスタッフのために何ができるでしょうか。皆さんにお願いします。誰かこちらに来ることができる人を知りませんか。劇的に改善されることは願っていませんが、状況は絶望的なのです。しかし、皆さんが祈り、探し求めて、新しい人を見つけようとする際、「誰

でも」できるわけではないことを覚えておいてください。日本は（度々、洪水や地震や危険な出来事があり）伝道地としてロマンチックでもエキサイティングでもなく、精神面でも、忍耐面でも、この上なく困難です。ここでの魂の釣りは網ではなく、竿と糸、待ち続ける忍耐力と「祈り」の業で行われます。そして、多くの失望があります。ここに来る人には穏やかさや全く主に委ねることが必要であり、仕事としてではなく、召命によるものでなければなりません。また、誰かが志願しても、かれらが SPG に認められることを私は望みます。誰も来ないと私たちは合計で 5 人減ということになりますが、3 人の給与が SPG から支払われており、1 人は松蔭女学校のファンドから支払われています（ただし、それは皆さんの支援を含む、承認されていないお金であり、年金の見込みもありません）。そして、ミス・ドルイットの場合、彼女と同じように無償で働いてくれる誰かがいなければ、代わりはいません。日本語を習得しておらず、一時的にしか来られない人でも、松蔭女学校の授業は、2～3 年間は行うことができます。それは他の人をいくらか日常業務から解放することになるでしょう。しかし、誰かが志願しても、SPG のスタッフは喜ばないでしょう。かれらは特に今、日本に派遣された宣教師は困難に直面することをよく知っているからです。

どうぞ、心を尽くしてこのことについてお祈りください。神が皆さんと皆さんの祈りを祝福してくださいますように。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

## 書簡 47号

シベリア経由

日本、神戸、四宮、松乃舎

1938年11月23日

私の友人ご一同様

私は3か月前、私たちが受けた2つの大きな衝撃について書きました。1つは7月に神戸を襲った水害、もう1つは若い女性宣教師が去り、今後、新しく来る予定がないことです。

水害の後、夏から初秋にかけて、例年のない台風の上陸が続きましたが、神戸は他の地域ほど深刻な被害は受けませんでした。しかし、松乃舎の庭は、一番大きかったユーカリの木が倒れ、最も美しい松の木が枯れ（水浸して根腐れしました）、そして家の前の大きな藤棚が倒壊するという被害を受けました。それでも藤の木が生きていることを喜んでいます。台風で多くの被害が放置されたままになっていましたが、庭は他の仕事がある中、熱心な庭師となってくれたストロング司祭によって変貌しました。個人的にも、神戸市内の教会にとっても、この数か月間、彼と一緒にいられたことは有り難いことでした。ストロング司祭は1月中旬に愛する下関に戻りますが、私はとても寂しい気持ちになるでしょう。

1月11日にバッジャー司祭とミス・エドワーズの結婚式を行い、その月からバッジャー司祭はミス・エドワーズがミス・ウィリアムズと一緒に暮らしていた姫路顕栄教会の牧師になります。顕現後第1主日に彼の牧師任命式を行いたいと考えています。

その結婚式の2日後、ミス・ウィリアムズは帰国し、(以前、書いたように)戻ることはありません。今年のフェローシップ会議の前に、ミス・ウッドも日本に戻らないとSPGから聞きました。このことによって先に書いた時よりも、

新しい宣教師の必要性が一段と急を要するものとなりました。私たちの訴えは、9月末に本国で皆さんが困難な中ささげた平和を望む祈りに、しばらく飲み込まれていたことでしょう。私はそのことを皆さんの困難が過ぎ去った後、何人かから聞きました。私たちが必要としているこれらの多くのためにささげられた祈りは、まだ志願者の声は上がっていませんが、必ず聞き入れられると信じています。それでも覚えておいてください。ミス・ボールズは12月末に休暇を得て帰国し、この女性宣教師（SPG 関係）は10人から4人に減ります。そのうち3人は自給しており、その1人であるミス・ドルイットは3月に自らの召命感を問うためにトゥルローへ行きます。

地方部内で、CMS が支援している地域で唯一の司祭の宣教師、アーネスト・ハッチンソンは1月に休暇に入りますが、彼が留守の間、代わりは誰もいません。しかし、CMS の地域の3人の女性宣教師はしっかりしていて、困難な時にもかかわらず素晴らしい働きをすることでしょう。そのうちの1人、マーベル・バッグスは、春に休暇から帰ってきましたが、それ以来、福山に派遣されています。そこの若い日本人伝道師は孤独などの厳しさに押しつぶされていました。ミス・バッグスの到着が助けになることを願っていましたが、それはすぐに満たされるものではありませんでした。東京の大学での秘書という誘いは彼にとって非常に魅力的なもので、先月教会を辞めて私たちのもとから去りました。春に亡くなった司祭や、軍に徴兵された聖職者や他の教役者に代わる者はなく、他のどの教区も私たちを助けることはできないので、しばらく私たちはミス・バッグスを1人にしなければなりません。そこを管理している日本人司祭は遠方にいるので、月に1度しか行けません。ですから、私も月に1度、行くことを約束し、クリスマスはそこで迎える予定です。

次に、神戸で英国人会衆のチャプレンをしているフォード司祭が来年のイースターに離任することを発表しました。最近、彼はずっと体調が思わしくなく、また彼はどの司祭であっても、港のチャプレンは10年で十分であると考えており、多分それは正しいでしょう。ですから、私たちは別のチャプレンを見つ

けなければなりません。どうぞ、良い司祭が与えられるようお祈りください。この英国人商人や他の英国人たちは、毎月あらゆる取引で規制が増えるため、財政的にも厳しく見積もっています。それでかれらはフォード司祭の後任の給料の全額を支払うことを確約していません。しかし、SPG が3年間は支援金を送ってくれることになったので、ある程度の支援の見通しがつきます。SPG がこのように支援できるのは、この地方部には有給の女性宣教師がとても少ないからです。

しかし何よりも、私たちは本国から大きな衝撃の知らせを受け取りました。ミセス・ジョンソンのご息女、プリムローズ・メアリーが1年前に日本を訪問した後、どれほど病で苦しんでいたか、皆さんはご存じでしょう。彼女はとても元気になって、夏に母親と一緒に海外渡航することができました。しかし、この秋に再発して手術を受け、医師は娘と同様に、ミセス・ジョンソンの健康のためにも、すべての仕事から離れなければならないと言いました。それで、彼女は遺憾ながらも主事の辞職を申し出、1週間前に私は大変残念ですが、その辞職願を受理しました。神戸フェローシップの土台はミス・サンダースによって最初の数年間で実によく整えられ、ミセス・ジョンソンは過去10年間を通して実に上手く運営してくれました。そんな彼女なしでどうやって続けなければよいか、私には分かりません。幸いなことに、数か月間仕事を手伝ってきたミス・プライムは、あと1、2か月は続けられるようです。皆さんは私がミセス・ジョンソンに対して思っていることをしっかり書き残すようお願いすることでしょう。しかし、彼女がフェローシップのためにしてくれたことのすべてに謝意を表し尽くすことなどできません。

前の書簡で地方部内の出来事と日本聖公会の出来事の2つについて書き漏らしていました。前者は明石の新しい牧師館の献堂式についてで、メインルームは仮礼拝堂として建てられていました。土地は昨年購入し、その後、法律面で遅れていましたが、すべてが聖マリア・マグダレン日に整えられたのです。それから大水害が起きました。明石は被害がありませんでしたが、いくつかの

最終的な建具を注文した業者との連絡が全く取れなくなりました。それで献堂式は1週間延期しなければならず、それは聖マグダラのマリア日の7日後でした。それまでの借家ではなく、新しい建物で初めて聖餐式をささげ、会館と牧師館を献堂しました。こうして3年前に私が帰国した際、特別に訴えた2つのうちの2番目を完成させました。

もう1つの出来事は、7か月前に行われた3年毎の総会です。私は皆さんに総会での神の導きを祈るようお願いし、皆さんや日本の友人たちも祈ってくれたことを知っています。皆さんは医者の方でヘーズレット主教が総会議長を辞めたことを覚えているでしょう。そのため、初めて日本人主教、大阪教区のヨハネ名出保太郎主教が議長となり、総会が行われました。

最後の最後まで、私たちは日本全般における超国家主義について多くを議論しましたが、実際に決議されたものはとても穏やかなもので、争いを通して苦しんでいるすべての人々、特に仲間であるクリスチャンへの哀悼を表したものでした。そして教会の主な仕事は福音宣教であることを強調しました。その結果、海外伝道部の予算がかなり膨らむことになりました。経済的に極度に厳しい時期であることを考慮すると、私はその予算通りに集まるか、少々、疑わしく思っています。もう1つは、この夏、東京教区の日本人主教の満州への巡回に神戸の八代〔斌助〕司祭が同行することになったということです。かれらは1か月に渡って危険な時節中、各地を訪れ、伝道説教を行いました。また、北京に行き、中国北部の主教だけではなく、中国全土の主教会議長を務めるノリス主教に会いました。東京教区主教にはノリス主教の管轄下にある満州の日本人会衆の監督権があります。かれらはノリス主教に、日本聖公会から中華聖公会への哀悼の意を伝えました。それは伝える方にとっても、受け取る方にとっても、簡単なことではありません。そして、将来直面するであろう、あらゆる難しさを含んでいます。どうぞ、お祈りください。

総会のもう1つの非常に重要な決定は、各教区に連絡委員を持つ自治自給中央委員会を設置し、段階的な自給を目指して大規模な新しい計画を立案するこ

とでした。これまでの計画は、特定の力のある都市部が、かれらが属していた伝道協会による地方部から切り離され、正規の教区になって日本人主教を選出し、その主教のために伝道協会は1つか、2つの小さなファンドで援助する責任を負うということになっていました。次に約4年前、カナダ聖公会が15年間、かれらが支援する地方部の日本人主教に資金を提供することに同意し、かれらはその後、地方部が自らの主教を十分に支えられるようになるのを助けています。今のところ、この新しい計画は個々の教区や教会であまり関心を持たれておらず、まだまだ不確かです。進展したら、このことについてもう少し書きます。

総会は、以前に提案された新しい聖書日課を確認し、それが今では唯一のものになりました。また、先に提案された逝去者記念式の特祷と、使徒書・福音書（それぞれ2つの選択肢があります）を確認し、これらは今、祈祷書に組み入れられています。クリスチャン以外の死者のための祈りについては、聖餐式で使用するのではなく、祈祷書にも入れず、別冊に組み込まれます。別冊には家族の祈り、そして特定の国家祭儀や特別な行事のための祈りが含まれています。前の総会以来、試用されていた改訂版の天皇や国家の祈りの葉は取りやめにし、代わりの新しい葉を向こう3年間、既に祈祷書にある祈りとともに使用することになりました。今回、初めて私たちは結婚と離婚に関する規則を持つこととなりました。その主なポイントは、どのようなケースも決断は主教に任せるということです。何度も結婚に関する規則は総会の決議に持ち込まれ、否決されてきました。ですから、これらが通過したことは素晴らしいことです。そして、ほとんどの主教たちは真っ白ではないにしても、ほとんどが白髪ですので、それが完全に抜け落ちるほど長生きしない限り、これ以上大きく変わることはないでしょう。

10月上旬、朝鮮で毎年恒例の英国人と日本人の司祭のためのリトリートを指導するという嬉しい務めがありました。素敵で大聖堂で礼拝するのは光栄なことです。しかし、最後の聖餐式を待つことなく、就寝前の祈りの後、出発しな

ければなりませんでした。三位一体主日に按手したばかりの最年少の執事が徴兵され、翌日の夜、下関を通過するという電報を受け取ったのです。列車と船で下関まで 21 時間かかりましたが、彼が通過する 1 時間前に到着し、彼と会いました。九州への海峡を渡ろうとする彼を見つけ、フェリーで彼に祝福を祈る機会を得て、私は下関に戻り、真夜中にベッドに入りました。この出来事の滑稽な顛末は、彼は医者診断を経て徴兵されたのですが、2 度目の診察で引っかけ、家に帰されたということです。同じようなことが全国で起こっています。彼は病気ではなく、基準に達していなかったのです。このことはどれほど人手が不足しているかを示しているでしょう。

水害の義援金と異動費のファンドへの援助を求めた私の訴えに応えてくださった方々に特別な感謝を表したいと思います。フェローシップに送られてきたものと、それらの目的のために直接私に送られてきたものを合わせて、50 ポンド以上になりました。

皆さんは私がいつもクリスマスカードとして日本の写真や絵ハガキを送ろうとしていることをご存じでしょう。今年は 3 種類あります。1 枚は、今年の総会で日本の 10 人全員の主教たちと撮った写真です。もう 1 枚は、明石の海岸の景色で、それは聖マリア・マグダレン教会の宣教地域です。そして、最後の 1 枚はピクニックに参加した 3 人の日本の女の子のスナップ写真です。彼女たちは、姫路でミス・ウィリアムズとミス・エドワーズの隣人愛によって実を結んだ友人です。

皆さんがクリスマスまでにこの書簡を手に入れることを願っています。そして、幼子キリストの平和があなたの心にありますように。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

===

ブリムローズ・メアリー・ジョンソンは 10 月 25 日に逝去しました。

## 書簡 48号

シベリア経由

日本、神戸、四宮、松乃舎

1939年2月17日

私の友人ご一同様

前の書簡から約3か月ですが、今週、至急お伝えすべきことがありました。それについては後ほど記します。

まず、今回は本国でのニュースから始めたいと思います。プリムローズ・メアリー・ジョンソンの逝去は皆さんにとっては最早ニュースではなく、彼女の母親から聞き、とても悲しんだことでしょう。私が電報で知ったのは（神戸から何百マイルも離れていたときのこと）、前回の書簡を書いてわずか数日後のことでした。ミセス・ジョンソンは神戸フェローシップのために素晴らしい働きをしてくださり、ミス・ジョンソンは懸命に母親を助けました。特に恒例のセールでは格別の奮闘を見せてくれ、病気で床に臥せった後も、昨年の秋まで働き続けました。マーガレット・ストリート諸聖徒教会のスタッフとして彼女の堅信準備をして以来、私は彼女を知っており、彼女の死が母親にとってどれほど苦しいことか、私にも少しは分かります。皆さんは彼女の求めに応じて祈り、これからも祈り続けることでしょう。神がその子どもである彼女に永遠の安らぎを与え、永遠の輝きで照らして下さいますように。

とても残念なことに、フェローシップは主事のミセス・ジョンソンを失いましたが、ミス・プライムの貴重な助けと共に、ミス・スウィンフォード＝エドワーズがしばらく手伝ってくれることは非常に有難いことです。しかし、私はミセス・ジョンソンとミス・プライムから、いつまでも続けることはできないと聞きながらも、続けてほしいと祈っていました。ですから、最初に電報で、そして今週手紙でミス・メルヴィルがこの重責を喜んで引き受けてくれると聞き、

とても安心しています。ミセス・ジョンソンのようにフェローシップの働きを維持することは簡単ではないでしょうが。

皆さんのほとんどはミス・メルヴィルという名前を聞いても誰のことか分からないでしょうが、多くの方はマーガレット・ストリート諸聖徒教会の教会委員だった彼女の亡き父は知っているでしょう。そして、私はミス・ジョンソンと一緒に彼女の堅信準備も行ったのです。彼女はフェローシップの最初からのメンバーで、皆さんはすぐに彼女を私たちの新しい主事として親しく受け入れてくださると信じています。そして、彼女たちが、私がいろいろと書いていることを許してくれるよう願っています。私に今できることはこれぐらいなのです。

私は理事会についても感謝の言葉を述べなければなりません。ベッキンガム司祭は、最近までラベンダーヒル昇天教会の牧師で、ロンドンに戻って以来、神戸地方部とフェローシップを助けるために多大なる貢献をしてくださりました。どうぞ、マーゲイトの牧師という新しい重責を担う彼のためにお祈りください。定期総会に出席される皆さんは3人の理事を知っているでしょう。かれらも普段は舞台裏でよく働いてくださっています。

今、日本にいる人たちについては、バッジャー司祭とミス・エドワーズが1月11日に幸せに満ちた結婚式を挙げ、姫路で楽しい新婚生活を送っています。そして、1週間後、ストロング司祭は下関に戻りました。聖ペテロ教会だけでなく、この家で暮らす者にとっても、彼が神戸で過ごした5か月間は大きな助けとなりました。そして、地方部の反対側の下関で広大な地域の働きを再開する前に、日本での新たな難しい状況を地方部の中心で見聞きしたことは彼にとっても良いことだったでしょう。

南東京地方部主教の好意により、経験豊かな宣教師のパーキンソン司祭が私と暮らし、アレン司祭が夏に帰ってくるまで、聖ペテロ教会の牧師として働いてくださることになりました。女性宣教師と英国人教会のチャプレンの募集について、問い合わせはたくさんありますが、まだ明確な結果は得られていません

ん。引き続きお祈りください。

大人になってからも子どもがよくかかる病気を患う人はいるようで、12月中、バッジャー司祭は麻疹で苦しんでいました。彼は下関での最後の5週間、ほとんど何もすることができず、私たちはできる限りの支援をしなければなりません。クリスマスは誰も手が空いていなかったのも、私が福山でクリスマスを過ごした後、聖ステパノ日に下関でクリスマス礼拝をおさげしました。

しかし、今月はバッジャー司祭の麻疹だけでなく、ここの宣教師団の全疾病記録を見ても前代未聞となっています。皆さんは宣教師団の激減するスタッフについて書いた8月の書簡に、ボーイズ・スクールで働いていたミス・スミスの代わりに、青年のパトリック・ギボンが加えられることを聞いて、私がとても喜んでいてことを覚えているでしょう。彼は7月に本国の訓練校のコースを修了してすぐ出発し、9月中旬にやって来ました。彼は学校によく馴染んでおり、年長の男子たちを教えて、ミスター・ウォーカーを多くの運動や遊びから解放しました。彼はここ、松乃舎に住んでおり、(スイスでの経験から)スキー遠征やスケートなどを行っていました。

残念ですが、彼は天然痘で1週間前に隔離病院に入院しました。彼は本国で6か月前に予防接種を受けていたので、私たちは彼がすぐに良くなることを強く期待しており、病院からの報告は今のところ非常に良いのですが、知ってのとおり天然痘は恐ろしい病気です。どうぞ、彼のためにお祈りください。私たちは皆、予防接種を受けており、家は隅々まで消毒しました。しかし、それでも私たちのうちの誰かが感染する可能性はあります。その発疹は、それが何であるかを予想するまでもなく、明らかでした。彼がどこで感染したのかは分かりませんが、神戸で天然痘は少し流行しています。そして2日前、都市の全人口、約100万人が今月予防接種を受けるよう、指示されました。6週間ほど拘束される場合に備えて、私はできるだけ多くのことに注意を払っています。とりわけ、この春の書簡に。

神戸には英国人の医者と看護師長のいる国際病院がありますが、かれらは隔

離病院に行かなければならない深刻な感染症や伝染病を受け入れることは許されていません。そして、日本の病院では、通常患者が自分の看護師や介助者、そして西洋の食べ物を必要とする場合、自分で何とかしなければなりません。ミスター・ギボンはその必要とし、まだ日本語もあまり知りません。そこで私たちは神戸で、ある程度の看護、英語、また英国の食べ物についての知識を持ち、6週間も外出することなく看護をしてくれる女性を3日間探しました。最終的には、嬉しいことに優秀な女性を見つけることができました。しかし、本国で病院の知識を持っている人々にはその違いがおよそ理解できないでしょう。日本の医師はその多くが賢明で技術も進んでいるのですが、看護師の訓練はかなり遅れています。感染の拡大を防ぐ方法は非常に慎重で、面会者は天然痘患者に会えないだけでなく、看護師にも会えず、仲介者にしか会えません。ですから、2つの言語でやり取りされたメッセージはすっかり誤って伝えられます。それで私たちはメモを書き、彼は答えをその裏に書くのですが、その際、紙は消毒剤の中に入れられるので、よくびしょ濡れになって面会者に戻ってきます。

先の手紙では触れませんでした。3月5日の大斎節第1主日にさらに3人の伝道師を執事に按手することを願い、執り成しの祈りをささげました。残念ながら、この書簡は大斎節第1主日には間に合わないでしょうが、皆さんは最新の執り成しの祈りの葉を使うことができます。按手を受けるのはヨハネ末好 [時信]、長寄 泉、アブラハム米村 [勇雄] です。ヨハネ末好は36歳で、神学校で学んでいる間に健康を害し、神学校に復学する前に、2年間私の秘書をしていました。後の2人は彼より4歳と5歳若いです。どうぞ、かれらの執事按手のために祝福をお祈りください。

神学生の健康状態はあまり良くありません。彼以外にもう1人、結核にかかり、療養所や自宅に2年間いた神学生がいました。彼は随分良くなりましたが、神学校に戻る召命を感じられず、今は8年近く私の秘書をしています。私は彼なしにはやっていけないでしょう。それから皆さんに1年半前に祈ってもらっ

た結核の疑いのあるテトス中道〔淑夫〕がいます。何か月も病院と療養所で過ごした後、彼は結核ではなく、慢性気管支拡張症と診断されました。彼は2年ぶりに神学校に復学することを許され、非常に喜んでいます。そして今、最終学年のパウロ山本〔早太〕はイースターから伝道師として働く予定でしたが、腎臓を悪くして臥せっており、計画が大きく狂ってきそうです。日本では学生の健康状態が非常に悪いことを懸念しており、常にそれらについての議論と対策を耳にしていますが、改善の兆候は見られません。

他にも無数の支援の訴えがあるにもかかわらず、皆さんがフェローシップ・ファンドを維持してくださっていることをとても感謝しています。総額は低下しており、状況はより悪化しているかもしれません。継続的な支援と共に、新しい主事を励ましてください。

CMS は深刻な赤字に直面しているようで、まだ明確なことは何も分かっていませんが、かなりの削減予告を出してきました。この地方部でかれらは3つの地区の宣教活動を支援しています。私たちの北側に広がる海岸地域〔山陰〕、四国東部の県〔徳島〕、そして広く、人口の多い広島県です。広島で、かれらは3つの拠点となる教会と講義所を支援しています。最も大きな教会は、30万人以上が住む（6大都市に続く）日本の大都市にあり、9割が自給しています。二番目は重要な港〔呉〕がある、自給に向かっている教会です。そして三番目が、前回書いた不幸な福山です。来たる削減に備えて、日本のCMS常任委員会は、この4月からこれらの3つの教会を支援する責任を私に引き継ぐよう依頼し、私はフェローシップの援助を頼りに、そうすると答えました。2つの拠点には年間60ポンドで十分でしょう。しかし、福山には居住する日本人教役者がおらず、あまり聖餐を受けることができないようなところに、若い伝道師を派遣したくはありません。しかし、列車で1時間15分のところに、隣の県庁所在地の岡山市があり、そこの司祭は八代司祭の父親〔八代欽之允〕です。そこで、卒業を予定している神学生が伝道師として働き始めるに際して、その司祭のもと、岡山に派遣することにしました。そうすれば、かれらは福山も管理できる

でしょう。この新たなスタートを楽しみにしていますが、若い神学生の病気が治らなければ、これは非常に厳しいこととなります。どうぞ、神学生とこれらの教会のためにお祈りください。この地域の2人のCMSの女性宣教師がそこに留まり、働き続けられるよう願っています。それはCMSの赤字の程度によって決まるでしょう。

教会の学校を建てたり、改装したり、新しい住宅街に教会を建てるという本国の主教たちの訴えは、もちろんすべて実際にとっても必要なことです。そして今、無数の人道主義者が難民のために支援を訴えている中、私たちの宣教師団が継続的な支援を受けているということは素晴らしいことだと思います。私はそれがこれらの困難な時代における母教会の活力のしるしであると信じています。

皆さんにお祈りしてほしい病者がもう1人います。最近、マドラスで行われた国際宣教会議に日本を代表して出席した1人は、日本聖公会で最も若い、中部地方部の佐々木鎮次主教でした。日本に帰国してから、彼は重篤な心臓発作を起こし、数週間何もすることができず、安静に過ごしています。このことは彼や彼の地方部にとって、とてもつらいことです。

皆さんがこの手紙を受け取るのは大齋節の中頃でしょう。大齋節中は世界情勢が奮める多くの努力や鍛錬に敏感であるべきです。神への奉仕は完全に自由なものであり、私たちが自己鍛錬を超えて、自らを神へ完全に明け渡し、信頼することができますように。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

===

3月10日、主教より次の電報を受け取りました。

「ギボン随分良くなっており、他のみんなも元気にやっています。」

## 書簡 49号

シベリア経由

日本、神戸、四宮、松乃舎

1939年5月19日

私の友人ご一同様

今回は皆さんの祈りへの感謝から始めたいと思います。多くの個人的な手紙から、宣教師不足の私たちの求めに応じて多くの祈りが寄せられたことを知りました。そして、今はもう最悪な時が過ぎていると信じています。ミス・ドルイットは3月中旬に、フォード司祭は4月中旬に母国に向けて出航しました。ミス・ウーレイは今月初めに到着しました。

キャサリン・ウーレイは1914年から日本で宣教師として活動しており、20年以上にわたって神戸の松蔭女学校と関わりのある東京の香蘭女学校で教えていました。彼女は重い病気を患って帰国しなければならなくなり、2年前に辞職しました。その後、病気は治り、随分良くなりました。それでも私たちの学校を助けようと申し出るのは、本当に勇敢なことであり、その申し出を受け入れると決めてくれたSPGにも感謝しています。彼女はこの国の言語に精通し、その分野で十分な経験があるので、あらゆる面でミス・リーを助けることができます。彼女のここでの働きと健康を覚えてお祈りください。加えて、私たちは今、秋学期の初めから学校で働くための別の人材を探しています。

フェローシップの3人を含め、私たちを助けに来ることを明確に申し出てくれた人々に私は感謝を表したいと思います。その人たちの申し出が受け入れられなかったとしても、その思いに感謝していないということではありません、皆さんの祈りと同様に。

私は最悪を乗り越えたと書きましたが、実際の宣教師数は7月が最も少なくなるでしょう。ストランクス司祭と家族は昇天日に休暇で帰国の途に就きまし

た。これはストラックス司祭の予定や私の希望よりも早いのですが、夏の後半に取得できる適当な便がないのです。日本への行き来はますます混雑し、困難になっています。アレン司祭たちは7月の第3週まで日本に到着せず、夏の2か月間は、北部のすばらしい丘のリゾート地で、その主教から直接求められてチャプレンを務めることになったので、9月中旬まではここで活動できないでしょう。(ボーイズ・スクールの) ウォーカー夫妻は夏学期終わりの7月に休暇で出航します。かれらの休暇は1年遅れの上、わずか半年の離日に減らすつもりです。それでも、ミスター・ギボンのかれらがいない間、ボーイズ・スクールで慌ただしく過ごすことになるでしょう。彼から皆さんの祈りをどれほど感謝しているか伝えるよう頼まれています。彼はとても良くなり、今はここによく馴染んでいるとお伝えできることを嬉しく思います。

英国人教会のフォード司祭の後任については、まだ何も新しい知らせが届いていません。彼の出発とストラックス司祭の出発の間の1か月、ストラックス司祭は御影聖マリア教会とともに英国人教会を管理してくれました。そして彼が行ってしまった今、北関東地方部のアメリカ人主教から聖ヨハネ修士会のヴァイアル神父を6週間派遣して頂き、非常に助かっています。日本におけるアメリカの修道会、(カウリー・ファーザーズとして知られている) 聖ヨハネ修士会については以前書いたことがあると思います。アメリカのかれらの修士長は5月3日にハイチの補佐主教に聖別されました。彼は修士長を辞任しましたが、修士会の一員のままです。新しい修士長は長年ニューヨーク処女聖マリア教会の牧師を務めていたウィリアムズ神父です。彼は2年前、東京で行われた組織成立50周年記念の際に来日し、三位一体主日に行われた神戸の聖職按手式に来てくれました。日本の修士会長はケネス・ヴァイアル神父で、彼は今、日本にいる唯一のアメリカ人神父ですが、3人の日本人神父と2人の日本人修士がおり、2人は5月6日のかれらの記念日に初誓願を立てます。ヴァイアル神父はこの6週間、神戸のオール・セインツ英国人教会を牧会し、夏が来るまで私が堅信式で何度か遠方に行く際は御影聖マリア教会も手伝ってくれています。

しかし、7月からは私がオール・セイントズ教会と聖マリア教会の両方を管理しなければなりません。

日本人の教役者についてですが、大齋節にとっても幸せな聖職按手式を行うことができました。ストロング司祭が按手前の黙想指導と按手式の説教をしました。神学生のテトス中道〔淑夫〕は2年間、病で臥せっていましたが良くなり、神学院での学びを再開したことをお伝えできるのは嬉しいことです。しかし、パウロ山本〔早太〕は神学院の卒業前に病気になり、入院して3か月以上になります。医者は少なくとも8月の終わりまでは休むよう言っており、今年は何もできません。それで、年配の八代司祭は助けなしに、今いる岡山に加えて福山も管理しなければならなくなりました。私は今も時々福山に行って聖餐式をささげ、彼を助けています。

前回、神学生の健康について書いたとき、私はすべての神学生の中で最も悲しいケースについて言及し忘れていました。その青年は予科の1年生のとき、腸チフスによる発熱と髄膜炎を12月に併発し、去年のクリスマス前に逝去しました。彼の名前は小池晃男で彼の兄〔小池俊男〕は大阪教区の司祭であり、彼の父〔小池耕造〕は長年忠実に、この地方部の北西部〔浜田〕で伝道師として懸命に働いています。昨年中、彼の父はピリピリしていました。ここでの一般的な緊張状態、忠誠心の衝突、困難なキリスト教宣教、これらすべてがその一因です。そこへ、息子の死の知らせが決定打となって、ひどく神経が衰弱してしまい、彼は3か月の休暇を求め、私はそれを与えました。先月、彼は再び礼拝を執り行おうとしましたが、また発熱して、病床に就きました。

彼の教会から最も近い隣の教会は、75マイル東にある県庁所在地の松江にあります。私は前の休暇の直後に大原辰三という司祭を新たな牧師として派遣しました。イースター、私はその少し東にある境復活教会で聖餐式と堅信式を行い、夜は米子でした。そこで、大原司祭が病気だと聞き、急いで松江に行き、午後には到着しました。見ると、彼もかなりひどく神経が衰弱していました。彼は何週間か、教会のことは何もできませんでしたが、その日はイースターだ

ったので苦しみながらも会衆のために聖餐式をささげました、説教はそうでもなかったようですが。以来、寝込んでしまい、彼にも3か月の休暇を与えました。彼の場合も、教会と家族の双方において地域的な問題だけでなく、このご時世の政情不安にもその原因があります。しかし、そこには6つの教会があり、その周辺には他の会衆もあります。そして、2人だけが残っており、1人は新しく按手された執事、もう1人は71歳の伝道区長ヨハネ寺本〔房吉〕です。しかし、ここでもしばらくの間、助けを借りることができました。大阪教区の若いCMS宣教師のフレッド・ウッド司祭で、北部地域に月に1度行ってくれることになり、その地域の教会は月に1度だけですが、定期的に聖餐式に与えることができます。そして、一時的に他の執事を松江に住まわせて、他の礼拝を行い、彼が信徒たちにできることをするよう調整しています。けれども、それによって彼が任されている2つの教会と司祭が取り残されることとなります。

40年以上、2〜3年ごとに宗教を監視する法案が日本の国会に提出されてきましたが、それはいつも可決されませんでした。しかし、他の多くの問題と同様に、現在の危機に対する切迫感は、部分的に意義あることを軽視し、宗教法案はついに可決されました。それによる影響がどのようなものかを知るのは時期尚早であり、実際、その法律の施行日はまだ決まっていません。しかし、2つの興味深い点が挙げられます。1つは、この度は宗教を支配するための法案ではなく、宗教団体を支配するための法案と呼ばれていることです。そしてもう1つは、神道、仏教、キリスト教と共に、イスラム教を含めた動きだということです。その理由は政治的なもので、日本人のイスラム教徒は合計で50人もおらず、外国人（主にインド人とロシア人）を含めても、おそらくイスラム教徒は500人いないでしょう。数年前、神戸でのモスク建設について言及しました。この国で他のモスクは東京にあります。それも昨年からです。

宗教団体の統制は包括的であるべきです。文部大臣の承認なしには、いかなる宗教団体も設立することができません。承認を申請する際にはその宗教団体の信条または教義の概要、ならびに儀式、組織、活動の範囲、および役員の資

格、特権、権限についての報告書を提出する必要があります。そして、宗教団体の設立が承認されると、これらの事項は変更できず、もし何か変更する場合、それが宗教団体としての在り方に影響を与えるならば、文部大臣、または彼が任命した代理人による承認が必要となります。各団体は公式の代表者を任命しなければならず、この代表者は政府によってその団体の特色と活動内容に対して責任があると見なされるでしょう。いくつかの問題が生じていますが、おそらく、それだけでは終わらないでしょう。

日本聖公会の至る所に女性の組織があり、それは母親だけではないという点で、マザーズ・ユニオンよりも幅広いものとなっています。それはアメリカ聖公会で「婦人補助会」と呼ばれる組織により近いものとなっています。その主な目的の1つは台湾、満州などでの宣教活動資金への寄付です。神戸地方部のこの組織の日は通常5月で、2週間前に開催され、ほとんどの教会の代表者たちが神戸に1泊しました。いつものように、それは夜通しの歓迎会と朝の荘厳聖餐式（このときは昇天教会で）で始まり、それから定例総会で、一緒に昼食を囲み（皆さんはそれが最も奇妙だと思うでしょう）、そして午後閉会聖餐式となっています。今年のこの会合で主題講演をした女性は、最近満州と中国北部の占領地を巡った一団と旅をしました。そして彼女が言ったことの1つは、そこにある大都市で3か国の人々が明らかな存在感を放っていたということです。英国人は競技場で、ロシア人（彼女は戦前のロシア人を意図していました）は教会で、そして今、日本人はいたるところでカフェ・バーを計画しているとのことでした。そして彼女は日本や英国でも理解できない道徳を説きました。しかし、それらの地域で起こっている、天への叫びといった、もっと重大な問題についての示唆はありませんでした。

大陸への日本人の移動は毎月物凄い勢いで増えており、どのルートでも輸送不足とともに、旅行者の過密度は常に拡大しています。先月末、11時間近くかかる列車の旅では最初の4時間立っていなければなりません。ガソリンの規制が増すにつれて、バスや自動車での移動はますます困難になっています。

自家用車を持っている人も今では 15 ガロン以上は走行できません。金属不足のせいで、(たとえば) 釘さえ買えなくなり、金属製の郵便ポストが陶器製に置き換えられています。パーキンソン司祭が最近ブーツを修理に持っていくと、店員は圧縮した紙でブーツをすぐに修理しようと言ったのです！皆さんは今、ウールや綿の服を買うことはできません。それらはすべて水に弱いレーヨンでできているからです。しかし、英国との一番の違いは、この国では少なくとも日本人が食べるものは自給自足していますが、私たち西洋人が望む輸入食品だけが急速に入手不可能になりつつあるのです。

先の 2 通ではヨーロッパの情勢についてコメントしていません。それはもちろん、私がこちらで書くことは、皆さんがそれを読む頃にはほぼ間違いなく時代遅れなものとなっているからです。しかし、私たちは母国でのすべてについて祈っており、また皆さんのすべての祈りと助けにとっても感謝しています。そして、遅くなりましたが皆さんのクリスマス・プレゼントに特別な感謝の言葉を加えたいと思います。そのうちの多くは長く望んでいた百科事典の購入に今回は使わせて頂きました。

どうぞ、私たちがこれらの困難の中においても神に忠実であり、そして御心ならば、強められるようお祈りください。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

## 書簡 50号

シベリア経由

日本、神戸、四宮、松乃舎

1939年8月19日

私の友人ご一同様

数年前、母国で私の上司であったワトソン司祭のリクエストにより、ストロング司祭が、母国のフェローシップに属している人もいますが、そうでない友人にも宛てた定期的な手紙のコピーをフェローシップの書簡とともに一般配布用として印刷しました。そしてこの度、50号に達するフェローシップの書簡は手短に書き、ストロング司祭に手紙を書いてもらって、この書簡と共に再び一般配布用にその手紙を印刷することにしました。どうぞ、お読みになって、神戸から300マイル離れた地方部西端の広い地域で行われている彼の働きを覚えて特別にお祈りください。

ストロング司祭は神戸で私のもとへやって来た最初の司祭です。14年前、私事でリバプールに寄ったとき、聖職者の小さな集まりで彼に会いました。そして9か月後には、彼は私と一緒にここに住んでいました。2年の語学学習の後、下関に派遣しました。そこには、ミス・ケニオンが先に派遣されており、彼女は四半世紀前に、ストロング司祭が手紙で書いているすべての地で、最初に居住した宣教師です。ストロング司祭はフェローシップの特別な宣教師です。彼はSPGからの給与を受け取らず、生活費とフェローシップの皆さんが援助を約束したものでやり繰りしています。そして、私が神戸に引き留めた5か月間を除いて、彼は前の休暇から戻って以来、下関とその周辺地域に生活をささげました。現在も下関に住んでミス・ホームズ、岡上〔千代〕さん、そして若いテトス秋田〔温人〕伝道師がすべての働きを助けています。岡上さんと秋田伝道師は聖フランシス・ザビエル教会として使われている家の二部屋でスト

ロング司祭と共に暮らしています。私たち全員にとってストロング司祭の手紙を毎年読むことは良いことだと思います。

H.B.ウォルトン司祭は今回のことについて何も知りません。多くの方は彼が3か月前に頭蓋骨骨折という悲劇によって、もう意識が回復する見込みはほとんどないと知っているでしょう。どうぞ、彼とミセス・ウォルトンを覚えてお祈りください。私が29年前、初めて日本に来たとき、かれらも日本にいて、10年間横浜で働きました。私は彼が代理人を引き受けてくれたことを感謝しており、ストラックス司祭が日本に来たのは彼のおかげです。ストラックス司祭は最初の休暇を母国で過ごしており、ウォルトン司祭の教会を管理しています。

前回の書簡のすぐ後に出たチャーチ・タイムズの「英国人教会の新しいチャプレンが見つかった」という記事をご覧になった方もおられることでしょう。O.E.ブルックス司祭はブライトン聖ルカ教会を辞めて神戸に来てくれます。しかし、残念ながら彼は10月末までここには来られません。そして今のところ、他の地方部からの応援はもう終わりそうなので、秋の間、この教会をどうやって運営すれば良いか分かりません。

書簡47号で知らせたように、英国人の商人や他の英国人たちは神戸でもとも困難な時を送っています。ですから、SPGがチャプレン給与の援助を約束してくれたことをとても喜んでいますが、しかし、その一方で女性教役者の求人枠を1つ減らさなければなりません。そして現在、学校は再び3人の宣教師となる予定で、残りの給料枠は1人分だけです。それも満たされるなら、素晴らしいことです。

前回、松蔭女学校の更なる働き手を望んでいると書きましたが、その人はもう出発しており、皆さんがこれを読む前、秋学期に間に合う9月初めに到着予定です。イーニッド・ラドフォードは寡婦で、オーストラリアのシドニー大学を卒業しており、ここ何年かは英国に住んでいました。

1週間前、神戸聖ペテロ教会で7か月働いてくれた南東京地方部のパーキンソン司祭に別れを告げました。彼なしでやれたとは思えず、彼を派遣してくれ

た主教にとっても感謝しています。そして、アレン司祭が戻ってくるまでの4週間はストロング司祭と私でオール・セイントズ教会を管理します。聖ペテロ教会と聖マリア教会は私たちが夏に利用する丘の上の別荘の近くにあるので、その丘の小さな教会や塩屋郊外に加えて、私たちはできる限りのことをします。次の日曜日、ストロング司祭は夏休みで下関を訪れるので、私は7時に聖ペテロ教会、8時にオール・セイントズ教会、9時30分に聖マリア教会で聖餐式をささげます。

ミスター・ウォーカーの不在により、ミスター・ギボンにはボーイズ・スクールに住む必要があるため、来月の秋学期が始まる前に彼は私の家を出ます。このところ、松乃舎には4人住んでいましたが、秋には1人だけになりそうです。

ミス・ボールドは再び秋にやって来ることを希望しており、定例のフェロシップ会議のすぐ後に英国を離れます。そして、彼女が到着するとミス・ホームズが休暇に入ります。

多くの方が日本人教役者のために祈ってくれていることを知っていますので、かれらの病状について知らせなければなりませんね。年長の伝道師、小池耕造はとても良くなり、徐々にですが元の仕事に戻りました。そして若いパウロ山本〔早太〕はまだ休んでいますが、順調に回復しており、資格を得て、1か月くらいで徐々に仕事を始めたいと願っています。しかし、松江の大原辰三司祭は悪化しました。彼の病は精神的なものです。1度は、何とか彼を説得して丘のコテージに行かせたのですが、彼は1週間しか滞在せず、妻に迎えに来させて再び家に帰ってしまいました。彼は皆さんの祈りを強く求めています。彼はイースターの日以来、聖職者としての務めを何も果たせていません。

9月19日から22日まで地方部のすべての聖職者と教役者の夏期修養会を行います。相互の励ましが大いに必要です。どうぞ、この会の上に神の祝福があるよう、お祈りください。

国内外の情勢については言及しません。現状においてはその方が良いでしょう。しかし、状況は明らかに困難です。皆さんがそのことをも覚えてくださっ

ていると私は信じています。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

## 書簡 51号

シベリア経由

日本、神戸、四宮、松乃舎

1939年11月9日

私の友人ご一同様

2名の方から書簡50号を受け取ったと聞いていますが、主事がいつも私に送ってくれているコピーはまだ届いていません。前号のコピーを手に入れる前に、次の書簡を書かなければならないというのは初めてのことです。戦争によって母国からの手紙が混乱しているのでしょう。母国からの手紙で最も新しい消印は10月8日ですが、昨日受け取ったものは9月21日となっていました。手紙は(どういうわけか)シベリア経由の方が早いのですが、他のものはアメリカ経由の方が早いです。それらがどのようにになっているのか詳しいことは分かりませんが、どうやらすべてアメリカが関わっているようです。もし7週間近くかかるようであれば、この書簡もクリスマスカードもクリスマスに間に合わない恐れがあります。母国からの新聞や雑誌も非常に遅れており、9月末以降のものはまだ何も届いていませんでした。

もちろんこの2か月、私たちの関心は主に母国に集中しており、皆さんがどのように過ごしているか、そして誰が「残り」、誰が移ったのかと思ひめぐらせていました。こちらの新聞は主な戦況を伝えていますが、ニュースの多くを母国の新聞に頼っているので、母国からの新聞の遅れはとても厄介です。そして、程度の差はありますが、私たちがこちらでしなければならないように、皆さんからの最近の手紙も本当のことは抑えられているでしょう。

戦争の勃発は旅行中の2人を巻き込みました。1人は渡航中のミセス・ラドフォードです。彼女が乗っていた定期船はシンガポールで政府に徴用され、彼女と他の乗船客はそこで立ち往生してしまいました。シンガポールの主教はと

でも親切で、彼女は面倒を見てもらい、数日後、小型の船で送り出され、12日遅れでようやく神戸に到着しました。

もう1人は朝鮮からのハント司祭です。皆さんの中で朝鮮の宣教師団について知っている人は、個人的な面識はなくとも、ハント司祭の名前は知っているでしょう。彼は今年の春に休暇から戻ったばかりで、そこは貧しい中国北部ほどではありませんが、神戸よりも厳しい状況にあります。そのうちにお伝えしますが、朝鮮の暑さと干ばつは、ここよりもさらに厳しいものでした。私は彼を休ませようとこちらに招き、私たちが英国人教会の管理をどうすべきか、とても苦しんでいることを話しました。最終的に彼は9月初旬にやって来たのですが、その日は英国が宣戦布告した日でした。

ハント司祭は朝鮮の主教に相談した後、新しいチャプレンが到着するまでここにいてくれることになりました。彼は私と共に暮らし、英国人のオール・セイন্ツ教会のために懸命に働き、そこの通常の礼拝のすべてを引き受けてくれています。また、ボーイズ・スクールの生徒の洗礼や堅信の準備をするグループも担ってくれています。週2回、正午に戦争の嘆願の祈りをささげています。10月1日には、英国人教会で母国のナショナル・デーの祈りを持ちました。そして、今月の11日と12日には戦没者の追悼記念を守ります。

先ほど、今年の暑さと干ばつについて少し触れましたが、それらはとても酷く、7月22日から給水が午前2時間、午後2時間の1日4時間に制限されました。下関はより酷く、1日2時間のみ、真夜中から午前2時までで、女性全員がその日の洗濯をするために夜中に起きなければなりませんでした。もちろん、何百もの不具合があったのは当然でしょう。神戸の給水は、毎年1、2か月の制限はありますが、今年はまだ制限が続いており、冬まで続く恐れがあります。この地方部の多くの地域で米の収穫が深刻な被害を受けており、例年の30%減とされていますが、日本の北部と東部が豊作で少しはましです。しかし、朝鮮の状況はここよりはるかに深刻で、広い地域で70%が完全に実を結ばず、何千本もの木も枯れてしまいました。

病気だった日本人の教役者が随分良くなったとお知らせできるのは嬉しいことです。司祭の大原辰三は着実に回復しており、降臨節から通常の仕事再開したいと考えています。新しい伝道師のパウロ山本〔早太〕はとても良くなって神戸に戻ってきましたが、すぐに虫垂炎になってしまいました。しかし、手術は簡単で無事に成功し、1 か月後には仕事を始めました。そして私は彼を 3 週間前、岡山聖オーガスチン教会に派遣しました。9 月の聖職者と教役者のための夏期教役者修養会は、今までで最も良く、幸せなものとなりました。前回の書簡の郵送が遅れたので、修養会が終わるまでにお知らせできなかったことを残念に思っています。

他の多くと同様に、フェローシップの定期総会は中止しなければならなかったと聞いています。そして、聞いてはいませんが、定例のバザーも中止となり、少なくともランベス会議が来年の夏に開催されることはないでしょう。フェローシップ・フアンドについてお話したいと思います。フェローシップと SPG のような大きな協会の両方が大打撃を受けるはずで、皆さんのうちの何人かからも残念ながら定期購読数を減らすか、止めなければならぬとお聞きしました。私にはそのような困難の中にある人々のことをどれほど心に留めているかを伝えることしかできません。その上で、このような状況下においても、私たちが活動を続けられなくならないよう、皆さんがあらゆることをしてくださるよう願っています。日本の通貨がドルのポンド相場を離れた今、私たちはまた為替レートに苦しむでしょう。この書簡は経費削減のために、いつもの半分にします。

CMS は既に更なる撤退に動いており、この地方部で唯一の CMS 宣教師である E.G. ハッチンソン司祭に、給料の支払いを停止したいので母国で暮らすよう頼みました。彼は地方部の常置委員であり、熱心で忠実な宣教師でした。私たちは彼がいなくなることをとても寂しく思っています。

私たちは戦争をものともせずに来て来る新しいチャブレン、オスカー・ブルックスと休暇から戻ってくるミス・ボールズに期待しています。しかし、か

これらの遅れている航海予定については何も分かりません。休暇が遅れているミス・ホームズのために予定を知ろうと努めているのですが、まずはミス・ポールズが戻ってくるのが先決です。

再び、3枚の異なる写真をクリスマスカードにしました。1つは私たちの6人の執事です。年長者のステパノ袴田〔観一〕は来年司祭にしたいと考えています。彼は私の左側にいる3人の按手式に出席できませんでした。それで松乃舎の戸口にいるかのように、彼の顔を後ろにはめ込んだのです。もう1つは明石聖マリア・マグダレン教会の牧師館にある聖所です。3枚目は姫路城からの新しい景色で、皆さんはバッジヤー司祭とステパノ袴田が働いている教会と広い地域を眺めることができます。

戦争や戦争の噂をもとせず、クリスマスの平和と喜びが皆さんとともにありますように。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

## 書簡 52号

日本、神戸、四宮、松乃舎

1940年2月

私の友人ご一同様

私のもとにはまだ母国からクリスマスカードや手紙やプレゼントが届いています。フィンランドが悲惨な戦いに巻き込まれて以来、シベリア経由の手紙は確かなものではなく、今では平均 5~7 週間かかるようになりました。ですから、皆さんはイースター後までこの書簡を受け取ることができないのではないかと心配しています。私のクリスマスカードが間に合つたと聞いてとても喜んでいますが、書簡 51 号は母国のクリスマスと年末のラッシュに巻き込まれてしまったようで、その後も流通が正常化したとは聞いていません。

書簡は半分の長さで続けようと思います。いくつかの宣教師団が公報の発行を中断していると聞いていますが、会議を開くのが難しいときは、こうした文書による連絡の方が重要になります。ですから、私たちのいくつかの動向について皆さんに伝え続けたいと思いますが、重要で、興味深く、気がかりなことの多くは伝えることができません。皆さんの手紙も同じことが言えるのではないかと思います。こちらにいる私たちにとっては、皆さんからの限定された知らせでも聞けることが、これまで以上に嬉しいのです。

手紙についてはもう 1 つお願いがあります。どうぞ、皆さんの中で引越したことを主事のミス・メルヴィルに知らせていない方は、この書簡を受け取ったら、すぐに新しい住所を葉書で知らせてください。この半年の移動は大規模であったに違いありませんが、当然ながら彼女はフェローシップの住所録を最新に保つことを望んでいます。分からない人のために、彼女の宛先をお知らせすると「ロンドン W1 ハーラム・ストリート 49、ミス・L・メルヴィル」です。

とても悲しいお知らせがあります。ストラックス司祭は日本での働きが少な

い今は戻るべきではないと考え、地方部を辞任しました。とても残念ですが、彼はそれが正しいと思っているので、無理に慰留することはできません。日本での教会の働きは明らかに世界で最ももどかしいものの1つであることは確かです。私たちが果たしてきたゆっくりとした成長は「日中戦争」の最初の年に止まり、昨年私たちは間違いなく、それらの成長を失いました。私たち全員、皆さんの母国での祈りの支えなしに前進することができるとは考えておりません。それに、世界情勢に大きな影響を与えているこの日本で、キリストの十字架を打ち立てる努力をやめられるでしょうか。日本人クリスチャン、特に聖職者の愛国心による対立については前に書いたことがあります。そして今年は日本にとって非常に特別な年で、最初の天皇がかれらの国を始めて 2600 周年記念となり、2月11日がその記念日として毎年守られています。ですから今、国家総動員の流れは途方もなく、浅間丸に対する英国の行動は「中国店でのジョン・ブル」と表現されるほどの緊張状態にあります。

ストラックス司祭の辞任は、私が前回書いた CMS の司祭の辞任よりも手痛いです。かれらの未来とかれらのいない私たちのためにお祈りください。伝道協会からの補助金がさらに減額されるという深刻な可能性が回避されたとしても、戦争が続く限り、かれらが新たな宣教師を派遣する見込みはありません。

アレン司祭は神戸に戻って以来、聖ペテロ教会と聖マリア教会を管理しており、私も平日や日曜日に他の用事がなければ、両方の教会で聖餐式をささげて、彼を助けています。しかし、そのようなことをいつまでも続けることはできないので、イースターの後、村田〔俊雄〕司祭を明石聖マリア・マグダレン教会から聖マリア教会に、パウロ植村〔義久〕執事を聖マリア教会から聖ペテロ教会に、ペテロ加藤〔九十九〕執事を聖ペテロ教会から明石聖マリア・マグダレン教会へ異動させます。八代〔斌助〕司祭が聖ミカエル教会に加えて、明石の管理牧師を務めており、私の聖餐式の応援もそこに移す予定です。やっとな

---

7 英国の高慢さを擬人化した表現。

司祭に協力者を送ることができたので、このようにできます。長い間、病床にあった大原辰三司祭が先月から完全に仕事に復帰したことをお伝えできるのは嬉しいことです。そして、彼の教会に応援に行っていたヨハネ末好〔時信〕執事を八代司祭のいる聖ミカエル教会に派遣しました。3年前に独立するまで、明石の教会は聖ミカエル教会の伝道所だったことを覚えているでしょうか。2つの教会はともに3年間で25%の堅信受領者増となりました。ですから、今も心配事は尽きませんが、その中でも輝きがあることがお分かりいただけるでしょう。

姫路のステパノ袴田〔観一〕は三位一体の聖職按手節に行われる司祭按手に向けて準備しています。どうぞ、彼やその他の新たな働きに従事する聖職者を覚えてお祈りください。

嵐の後のまだ海が荒れている中、ブルックス司祭とミス・ボールズは12月のはじめに同じ船で到着しました。しかし、ミス・ホームズは1月中旬まで母国に向けて出航することはできませんでした。彼女がこの書簡が届く1か月前に無事に帰国できるよう願っています。また、少なくとも皆さんのうちの何人かは彼女に会えるよう願っています。しばらくの間は、他の人が休暇でそちらに帰ることはないでしょうから。ランベス会議の延期は、私の次回の帰国が最低1年延期されたことを意味しますが、必ずしも「1年間」とは限りません。ブルックス司祭が到着した10日後、ハント司祭は朝鮮へ戻りました。ここで時間が私たちと同じように、彼にとっても良い時間であったことを願います。

私たちの地方部の2人の神学生、テトス中道〔淑夫〕とヨハネ広安〔孝夫〕が来月、聖公会神学院を卒業します。かれらの伝道師としての働きを覚えてお祈りください。しかし、神学院の生徒数は最近大幅に減少しており、今年の新入生はどこの教区・地方部からもありません。数年後には、日本人の教役者不足が深刻な問題となるでしょう。4月に施行することになっている新しい宗教団体法に関連した問題も多く、心配です。そのことについてはまた別の機会に書きます。

干ばつは続いており、冬の間は西日本に限られたことでもありません。神戸の給水制限は今まで以上に悪くなっており、水が使えるのは1日2時間だけです。そして、石油、石炭、木炭が圧倒的に不足し、電力不足も深刻です。昼間は3~4日ごとに電灯やヒーターが使えません。ですから、皆さんのように夜間の停電で苦しむということはありませんが、普通の生活はますます困難になっています。

皆さんからの個人的なすべての贈り物に感謝しています。今回は現金で受け取りました。まだ手をつけていませんが、全般的な活動への寄付が減り続けるようであれば、赤字を補うために使用することをおゆるしてください。

皆さんが幸せなイースターを迎えることができますように。何ものもイースターの希望を破壊することはできません。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

## 書簡 53号

日本、神戸、四宮、松乃舎

1940年5月22日

私の友人ご一同様

三位一体主日にステパノ袴田〔観一〕は司祭に按手されました。彼は私が聖職養成のはじめから関わり、按手した最初の司祭です。そして、彼の聖職養成費用はフェローシップが担い、その多くはボーンマス聖ステパノ教会が支えてくださいました。按手式には大勢が聖ミカエル教会に集まり、説教と按手前の黙想指導は聖公会神学院でステパノを指導した教員の1人である神学博士の稲垣〔陽一郎〕司祭が行いました。そして、新司祭は翌朝、初聖餐を私のチャペルでささげました。それは彼が聖職候補生として訓練をはじめてからちょうど12年のことです。私をはじめ彼と出会ったのはその1年半前、敬愛するロンドン教区主教が来日し、東京から神戸に向かう列車での移動途中に停車した駅で、主教を迎えた一群の中に彼もいたのです。彼は、そのとき主教から受けた祝福を決して忘れることはないと言っています。

遠く離れた過去の日々、そしてリトリートと聖職按手の日々は、ヨーロッパで起こっていることに対する私たちの悩みと不安という砂漠のオアシスのようでした。これが読まれるまでに2か月はかかるでしょうから、ヨーロッパの出来事について私を書くことに意味はなく、新たな歴史は私たちの目の前で次々と繰り広げられています。しかし、私たちは常に皆さんのことを覚えて祈っています。

前号を書いた後、**今年**は神戸地方部へのSPGの交付金は減らないという良い知らせがありました（為替でとても損をしていますが）。しかし、大部分はこの家に費やさなければなりません。築52年でベランダを支えている木の柱が老朽化し、屋根全体がゆがみはじめたのです。ですから、必要な大規

模修理のためにフェローシップからの個人的な寄付を使わせて頂きました。皆さんの助けにとても感謝しています。これは母国の教会が牧師を損害補償で助けるようなものでしょう。

聖職按手式の2週間前は、新しい宗教団体法の関係で今年4度目となる東京出張でした。今回は主教団を含む教務院が4日間、1日4回の会合を持ちました。その作業を通して、宗教団体としての日本聖公会の新しい規則を何とか修正することができ、文部省の承認（今は必須）を待っています。現在の法憲法規は50年かけて慎重に構築してきたのですが、「宗教団体法」によって大幅な変更を余儀なくされました。コメントしたいことはいくつもありますが、しない方がいいでしょう。しかし、最も重要な点は、将来的にキリスト教、仏教、神道の各宗教団体は、政府に対して責任を負う1人の代表者を置かなければならず、その1人は当然日本人でなければならないと考えられていることです。そして、例えば聖職者やその他の教役者の認可や異動など、団体に関するあらゆる行為は、団体の代表を通じて政府に通知しなければなりません。この代表は日本語で「統理者」と言います。これは新しく造られた言葉で、英語で相当する言葉は見当たりません。2週間前の苦勞によって、私が恐れていたよりは、何とか地方部主教の立場を守ることができたと思いますが、まだ安心できません。

宗教団体法では団体の代表と地方教会の聖職の違いがありません。しかし、主教とその職務についての細かな説明は私たちの団体規則に含まれることになっています。地方の聖職者や教会に関するあらゆる種類の新しい法律や面倒な規制があり、教会総会も法的機関となります。そして私が懸念していることの1つは、新しい教会を立ち上げることがこれまで以上に困難になるということです。新しい規則による最初の総会はおそらく来年までではなく、そこで最初の団体の「代表」が選ばれるでしょう。もう1つの懸念は、地方の教会や聖職者も地方当局によって管理され、さまざまな地域規制が行われることです（おそらくそうなるでしょう）。この地方部には10の県があります。

最長老の司祭が今月辞任するので、袴田司祭の叙任が地方部の司祭数を増やすことにはなりません。彼は満 75 歳で、30 年間、四国東部の田舎にいました。名前はバルナバ吉本〔要太郎〕です。どうぞ、彼と彼が去る教会〔富岡キリスト教会〕を覚えてお祈りください。その教会は CMS 系で、現在、教役者数は限られており、その教会に誰も派遣することができません。少なくともしばらくの間、列車で 1 時間離れた街からの応援に頼らなければなりません。

一方で、姫路では、他の教会とは違って、しばらくの間、2 人の司祭〔バジャー司祭、袴田司祭〕がいることとなります。これは地方部史上、初めてのことで、2 か月間はこの状況が大きな助けになります。現在、八代〔斌助〕司祭は聖ミカエル教会とともに明石の管理をしており、私も彼を助けています。7 時の聖餐式があるときは、目覚まし時計を 4 時 30 分にセットします。夏の今はそれほど悪くありませんが、冬が来ると辛くなるでしょう。

そして 6~7 月、中国北部の慰問団として八代司祭を派遣することを許可しなければなりません。そこに渡った幾千の日本人の中に、聖公会の信徒も増えているのです。日本聖公会の伝道局は、八代司祭に各地を巡回してかれらとコンタクトを取り、その要望と将来性を見極めて報告をするよう求めました。しかし、そうすると聖ミカエル教会で聖餐式をささげるのは私以外に誰もいません。そして、明石の助けは姫路の 2 人の司祭に大いに頼らなければなりません。どうぞ、その教会を覚えて特にお祈りください。現状であれば、7 月 22 日の聖マリア・マグダレン日には、皆さんはこの書簡を手に入れることができるでしょう。

私たちはもう 1 人、司祭を失います。エリック・ワッツです。彼は 13 年以上も神戸のミッション・トゥ・シーメンの仕事を担当した精力的な司祭で、近頃はとても困難な時を過ごしています。イースターに休暇で出航し、日本には帰らないと決めました。彼とその妻はオーストラリア人で、休暇の際はいつもオーストラリアに帰っていました（かれらはもうオーストラリアにいます）。もちろん、世界の大部分が戦禍にあつて、神戸に来る外国船の数は随分減ってい

ます。現在、横浜のチャプレン、トマス・カーフォートが両方の港の責任を負い、大体隔週でこちらにやって来ています。そして、彼がいないときは、誰かがシーメンズ会館にいること、特に夕方にいることが重要なので、パトリック・ギボンがボーイズ・スクールから引っ越しました（もちろん、変わらずこれまでの仕事を続けています）。ウォーカー夫妻は戦争による船の遅延が多かったにもかかわらず、何とかギボンの引っ越しを可能とするタイミングで無事に戻ってきました。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

## 書簡 増補2号

下関聖フランシス教会

[1940年8月頃]

私の親愛なる友人ご一同様

昨年と同様、神戸フェローシップの書簡として手紙を送ります。しかし、今年は厳しく「戦時制限した」内容にしなければなりません。皆さんが祈りによって親しくつながっている働きを思い描いていただくために、いくつかのエピソードを語ることで満足したいと思います。

しかし、一般的な状況について一言、言っておかなければなりません。引用します。「過去1年間、1つの大きな事実が日本人の生活を支配しました。宗教を含む、すべてにおいて重要なことはただ1つの物差しではかられます～東アジアにおける新秩序の確立に貢献すること」。著名な宣教師がこれらの言葉について多くのコメントを出しているかもしれません。コメントは母国にいるほとんどの人が今までに理解していたに違いないことを説明しているでしょう。現在、日本聖公会の教会が直面している問題、特に英国とアメリカの教会との関係は非常に複雑です。たとえば、聖フランシス教会の「遠方での働き」～遠方に暮らす信徒を訪問することは、これまで私たちの物語の重要な部分を形成してきました～は「外国人司祭」にとって、非常に困難になったことを知って失望したとしても、驚くことはないでしょう。私たちの信徒は、以前のように外国人司祭の訪問を歓迎してくれます。しかし、訪問の後に、特高警察が度々やって来るので、心ならずもかれらは外国人司祭に来ないように頼まなければなりません。

それは一面にすぎず、別の面があります。これらの困難にもかかわらず、活動は継続され、聖霊が私たちの中で働いている証を見ることができます。その証をいくつかご紹介しましょう。

昨年、書簡で、信徒の多くが下関から離れることで起こっていた「信者の拡散」についてお話ししました。それによって日曜日の礼拝出席者は減りましたが、新たな伝道心を起こさせる機会となったことを覚えているでしょう。クリスチャンの家族は常に教会の最高の仲介者で、例として漁村の K さんの家族について書きました。かれらの家で行われている隔週の求道者のための集会は、婦人伝道師によって続けられています。出席するのは主に労働者階級の若い夫婦です。かれらにとってこの集会在キリスト教と初めて触れる機会であり、そこでの教えは最も基本的なことからはじめなければなりません。しかし、すでに実った果実を見ることが出来ます。特に、ある夫婦においては大きな変化が起っています。酒飲みだった夫は今、まじめな生活を送り、彼とこれまで口論していた妻は近所の尊敬を勝ち取っています。素晴らしいクリスチャンである K 夫人は、地元の小学校の教師です。この学校の教師（仏教の僧侶もいます）には「精神文化」の時間があり、教師は資格のある友人を順番に招待します。K 夫人の順番が来ると、驚いたことにクリスチャンを招く許可を得て、婦人伝道師が行きました。その日の講話は、それまでのどの講話よりも熱心な議論と関心で目立っていました。その後、今後について多くの質問が出ました。かれらのほとんどは、キリスト教と「国家政策」との関係を心配していましたが、単なる質問以上のものが引き出されました。6月の第1日曜日に主教が堅信式のために聖フランシス教会に来たとき、後で私に話してくれたのですが、会衆についていくつかのことが主教に衝撃を与えました。極めて明らかな変化が1つあったのです。それが非常に特別なのは、主教はそれまでに見たことのない男の顔に衝撃を受けたそうです。その顔はクリスチャンの輝いた顔とは対照的で、非常に印象的でした。その男はこの村落の教師でした。キリスト教の信仰に関する話は彼の心を非常にかき乱したので、安心することができず、すぐに彼は来て、罪に汚れた良心の重荷を赤裸々に告白したのでした。その日、彼は妻に連れられて教会に来たのですが、それはかれらにとって初めての礼拝でした。かれらが家に帰ったとき、妻は夫に言いました（彼が伝道師に書いた手紙から

引用します)。「私は礼拝のことはよく分からなかったけれども、1つ、はっきりしたことがあります。あのクリスチャンたちは幸せと平和の秘訣を見出しています。かれらが持っているものを私たちも見出すことができるでしょうか。どうぞ、これらの求道者のために、かれらの足が平和の道へ導かれるように、お祈りください。Kさん一家と伝道師のためにもお祈りください。

下関の教会が抱えている広い地域のもう一方の端では、若い花嫁が洗礼志願者として信徒の1人である医者と結婚しました。彼女は毎月、徳山を訪問する婦人伝道師から洗礼準備を受けました。昨年10月、最初の赤ちゃんが生まれたとき、彼女は絶望的な病気になりました。3人の医者が彼女の命を救うために最善を尽くしましたが、ついに治療を断念し、彼女はもう助からないと告げました。彼女の人生が終わりを迎えようとしていたので、夫の母親～信仰深い信徒～は彼女に洗礼を授けました。すると、直ちにヨシカさんは持ち直したのです。その後、彼女はゆっくりと回復しました。医者はそれを奇跡だと言いました。この秋の聖フランシス日に彼女が堅信式を受けるために下関に来られるよう願っています。

伝えたいことは他にもたくさんあります。イースターの3人の子どもの洗礼式。聖霊降臨日の4人の学生の洗礼式。皆さんに祈ってもらった、女工(マリア)の工場での葬送式。それはその島で行われた最初のキリスト教の葬儀でした。その他にもいろいろあります。現在、世界で起きている重大な出来事に比べれば、島で起きた事はほんの些細なものです。しかし、それらは、聖パウロが宣べている「弱く、軽蔑されていること」のいくつかです。それらは、私たちの間で働いている聖霊の証であり、私たちみんなが、世の東西を問わず、等しく、祈り、来たらせることができる、唯一の「新しい世界」によって、新しい男と女とされているのです。そして、それらは皆さんの祈りによって実った果実なのです。

G.N.S [ジョージ・ノエル・ストロング]

## 書簡 54号

RMS エンプレス・オブ・エイジア

仮住所：カーラー・ホテル

アメリカ、ミネソタ州、ロチェスター

1940年9月22日

私の友人ご一同様

仔細は省きますが、ストロング司祭の手紙〔増補第2号〕を送ってからわずか7週間。そして、前の定期的なフェローシップの書簡から4か月が経ちました。しかし、5月と6月の2か月、ヨーロッパほど規模は大きくありませんが、日本聖公会でも息を飲むような出来事がたくさん起こりました。優れた印刷業者が、戦争前に使っていた書簡用の用紙を十分供給してくれることを願っています。

実は、この書簡はカナダ太平洋鉄道に揺られながら書いているのですが、そのことについて書き始める前に、少し確認しておくべきでしょう。郵便による私の母国に向けた個人的なすべての手紙、またそれ以上にこれらの印刷されるフェローシップの書簡（ご存じのとおり、これらは公報ではなく、メンバーだけに配布されるものとして印刷されます）は、事実よりも控えめに書く必要があるということです。

今年のはじめに起こった事件で、神戸のミッション・トゥ・シーメンのチャプレンである F.E.ワッツ司祭が、宣教師ではない他の英国人と一緒に逮捕されました。2人ともスパイを疑われていた第三者と接触していたからです。かれらは数週間監禁され、ワッツ司祭は多くの精神的拷問を受けました。そして、そのことは彼の妻にとっても非常に苦しいことでした。かれらは復活日に故郷（オーストラリア）に向けて出航し、神戸には帰りません。戦争の影響は海上輸送にも及んでおり、シーメンズ会館の仕事は非常に少なくなっています。そ

ここで、横浜のチャプレンが両港での働きを担い、ミスター・ギボンが神戸のシーメンズ会館に住み、チャプレンのカーフォート司祭がいない間は誰かを送らなければなりません。

宗教団体の統制に関する新しい法律については何度も書きました。母国の日本を知る人々の中には、仏教や神道と同じようにキリスト教を宗教として認識したとして、この法律を称賛したと聞いています。実際には、他宗教と同等の認識などではなく、「統制」という言葉が強調されたのです。おそらく、このキリスト教諸教派もまだその認可を受けておらず、そして認可保留という態度は非常に強力な武器となります。

前回の書簡を書いた 5 月に、主教たちを含む教務院は、新しい法律に従い、4 日間で 400 項目以上の新たに提案された法憲法規の見直しを行いました。いくつかの項目は半世紀以上にわたって徐々に構築された現在の法憲法規のバランスを根本的に変えるでしょう。それにもかかわらず、宗教団体を担当する文部省は、すぐに更なる変更と修正を要求しました。

しかし、本当の危機は 7 月末に始まり、日本全土で多数の英国人男性が逮捕されました。朝鮮でも同様です。ちょうど私が出航する 10 日前に、そのことについてコメントしている英字新聞が到着し始め、それらは主にヨーロッパでの出来事に原因があるとしています。そして、訴えていることは、どこも同じで真実を無視していますが、日本のものよりは遥かに賢明です。

母国の新聞にも新たな段階のニュースが掲載されていると思いますが、それらがどれほど皆さんに伝わっているかは分かりません。日本人の救世軍の高い役職にあるものが逮捕されましたが、このときは外国人ではありませんでした。そして、かれらは釈放される前に、以下の条件に同意しなければならなかったのです。教団とその役職の名称を変更しなければならず、今後は軍事用語を使用しない。すべての外国人宣教師は国を離れなければならない。そして、今後は海外からお金を受け取らず、自給しなければならない。

それからまた前年と同じように反英国デモが始まりました。しかし、人々は

今回のデモを以前よりも恐れています。そして、特定の新聞や雑誌の記事は聖公会を救世軍のように扱うべきだと主張しました。2年前に日本人で最初に総会議長になった年配の日本人主教は、聖公会に対する公的な行動を防ぐために（と彼が言っています）、地位ある彼の友人に当局と話し合ってもらう必要があると考えました。そして、その人を通して2つの理解に至りました。外国人は日本を離れることを要求されず、望めば留まることができるが、何もしない。すべての外国人主教や司祭は現在の役職を辞任し、いかなる教区や教会も管理してはならない。そして、日本聖公会は海外からこれ以上の支援を受けてはならない。

8月20日に東京で、各教区から1人の司祭と1人の信徒が緊急招集され、教務院の拡大会議が行われました。これ以降の会議で興味深い点は、表決が行われなかったということです。どこでも、新秩序はそのような自由主義と民主主義の痕跡を取り除くのです。その会議は「即時」がいつかを示すことなく、「即時」自給を承認しました。会議中、外国人の辞任については言及されませんでした。辞任する方向となりました。そして、翌日の主教会で、私は日本人主教たちに、即時の辞任は何を意味するのか、それは今日または明日を意味するのかと尋ねると、そのうちの1人が「明日よりは今日の方がいい」と答えました。しかし、私は「それはできない」と言いました。そのようなことは地方部の常置委員会と協議して決めるべきことだからです。

神戸から1週間離れ、同志と集まっていました。そして、戻った日に、痛みと猛烈な不快感の原因を見つけようと英国人医者 の 診察を受けました。長時間の診察後、彼は「おそらく、腸の下部で悪性腫瘍が成長しています。私はここでの治療はお勧めしません。できるだけ早く、アメリカのメイヨー病院に行きなさい」と述べたのです。私は「先生、それは無理だ」と言って、教会の危機について説明しようとしてしました。しかし、私はやがて、誰かを助け、何かを為すことがほとんどできなくなるので、私が留まることによって本当に教会を助けることができるとは思わないように、と彼は言ったのです。そして、最後は

彼に従いました。

英国が今年、ノルウェー、ベルギー、フランス、ソマリランドなどから撤退したことはとても良いことであると考えています。そうすることでかれらは信じられないような英雄的偉業を成し遂げました。神がかれらを祝福してくださいように。私の退避には英雄的なものは何もありません。しかし、生きて、それが可能ならば、地方部に戻りたいのです。古典にはあまり詳しくありませんが、そこに留まり、何もしないことで偉大なハンニバルの計画を破り、名声を博したローマの将軍がいたように思います。とにかく、常置委員会の理解を得て、私は辞任せずに出航しました。そして、アメリカで死ぬのなら、私は神戸地方部主教として死にたいと願っています。

しかし、他の英国人主教たちは寛容で日本人に同情しているので、私に同意しませんでした。北海道の主教はこの危機の前に、通常の休暇で帰国し、日本には戻らないと決めました。彼には家族の事情がありますが、こちらの状況は多くの面で居心地の悪いものになっています。

別の地方部の常置委員会は、霊的にも物質的にも、そしてあらゆることで外国人教役者やその資金とすぐに縁を切ることを望む決議を全会一致で可決し、署名することによって主教の立場を追い詰めました。私が主教会議長と理解しているヘーズレット主教は彼の地方部と中央での責任の両方を正式に今月終わる準備をしています。このすべてのことは3人の米国人主教が本国の総会に出席して不在の間に表面化しました。しかし、2人の主教は急いで戻り、日本に2日前に着いたはずですが、かれらがどのような態度を示すのか、私には分かりません。しかし、かれらの地方部の少なくとも1つでは、一時的に管理していた日本人主教が米国人司祭たちに辞任を求めました。そして、別の日本人主教の教区では、すでに外国人聖職者の役職が取り消され、他でもかれらは礼拝することすらできません。南東京地方部で日本に残っている唯一の英国人司祭は、昨年アレン司祭がいない間、神戸で私たちを助けてくれたパーキンソン司祭でした。それ以降も、彼はいろいろな穴埋めをし、今月から1年間、日本人司祭

が不在となる教会に行きました。しかし、その教会は、もし外国人司祭が牧会していたら、誰も教会に来なくなってしまうことを恐れているという手紙を主教に書きました。それで、主教は彼を母国に帰すことにし、彼は私と同じ船に乗り、とても親切で遠回りして病院まで私に付き添ってくれるそうです。北海道地方部主教と彼の妻も同じ船に乗り、九州にいた2人の救世軍の大尉もいます。かれらが夏休みから戻る直前に、暴徒がそのうちの1人の家にやって来て、家主に今月の家賃とかれらの服と持ち物すべてを詰めてその日のうちに送らなければ、その家を燃やすと言ったのです。それで、家主は従いました。その他に同じ船には日本の英国聖書協会主事が乗っていました。日本聖書協会も独立を望んでいますが、その前に多額の資金を望んでいます。

神戸は本当にどこよりも幸せな地方部で、私はこれまで通り、英国人司祭が教会でその働きに留まらせることができました。

しかし、これまで書いたことに加えて、さらに2つの重要な出来事があります。文部省がミッション・スクールに関する命令を出す準備をしています。いかなる外国人も校長になることは許されない。いかなる外国人教師も「思想」を教えるのではなく、「言語」のみ教えることを許される。そして、理事長は日本人で、理事と役員も多くも日本人でなければならない。これは聖公会神学院にも影響しており、3人の外国人教師は来年の春までしか続けることができません。それは松蔭女学校においてもそうです。しかし、このことは私が出航した後に行動に移されるので、私の情報はすでに古いものとなっているでしょう。

その他の出来事はプロテスタント諸教派の「合同」で、宗教団体法のもと、教会数50、現在信徒が5000人以下の教派には、いかなる認可も与えられません。それでいくつかの小さな教派（たとえば、ホーリネス教会、ナザレン教団、フリーメソジスト、日本伝道隊など）は合併計画を進めています。また、当局は会衆派の個人主義を好ましく思っておらず、メソジストと一緒にするよう圧力をかけています。また、日本基督教連盟は外国からの影響を排除した聖公会の行動を称賛し、同じことをするよう諸派に提案しました。私たちと救世軍と

ローマ・カトリックを除いて、日本のほとんどの宣教師は米国人です。

このいわゆる合同（完全な、唯一の日本人による教会）の考えの広がりには非常に急速で、文部省は突然これに気づき、そして個々の教派をまだ許可していないということは、私たち聖公会を含む、唯一のプロテスタント教団を推進しているということです。そして、聖公会の多くもそうすることが正しいと考えています。

出航する前に、私は地方部に手紙を出しました。要点は2つで、1つは「もし私がアメリカで死ぬなら、辞任することなく死にたい」ということ、もう1つは「このいわゆる大合同教会は神の御心にかなっていないと確信している」ということです。有難いことに、若い神戸の聖職者は全員それに反対してくれています。しかし、反対する側の難しさは、そのような団体は公的な宗教団体と認められないことがほぼ確実だということです。

もう1つの私の最後の働きかけは、臨時地方部会の招集です。これは出発の2日後に開かれ、バンクーバーでその結果を知らせる電報を受け取りたいと願っています。その招集は日本人補佐主教を選ぶため、主教が病気等によって職務を果たすことができない場合、そのような招集を発する権限が主教に与えられるという条項が私たちの法憲法規にはあるのです。現在の4人の日本人主教は誰も神戸地方部を運営するべきではなく、外国人主教たちは全員辞任するようなので、このことは重要なのです。

これらの出来事において八代司祭は申し分なく、どのようなときも私の右腕で、特にプロテスタント諸教派の計画に反対する戦いにおいてはそうです。そして、いつものように夏の間、ストロング司祭と一緒にいてくれたことも素晴らしい助けになりました。

この限られた紙面の書簡では多くの大事なことを省略せざるを得ません。しかし、可能な限り、忠実な残された者たちを支えることができるよう、寄付と祈りの継続的な支援をよろしくお願いします。そして、私の個人的な問題を差し挟んだことを申し訳なく思います。生きるにしろ、死ぬにしろ、私は皆さん

のために祈り続け、皆さんの祈りを求めてやみません。神の祝福が皆さん一同  
にありますように。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

## 書簡 55号

カーラー・ホテルより  
アメリカ、ミネソタ州、ロチェスター

1941年3月22日

私の友人ご一同様

今回は私自身のことから始めることをご容赦ください。6か月前に私が書いた書簡54号以来、私や私の居場所について、多くの方がいろいろな報告を聞いたと思いますが、何も聞いていない人もいるでしょう。最初に、この書簡の見出しにある住所は実際に使用されている住所です～一時的なものではありません。このホテルは手紙を病院のいずれかに転送する際、迅速かつ効率的で、冬の間、日本に戻っていましたが、その間もそうでした。病院は郵便を扱いません。

10月上旬に私は人工肛門手術を受け、4週間後に病状を抑えるための放射線治療を受けました。私が回復した10日後、神戸からいくつかの手紙を受け取り、英国大使館と領事館が、命令ではないが、可能な人は日本から退去することを勧めているとのこと。このことは教会の状況に加えて、かなりの精神的苦痛と困惑が宣教師の間に生じました。

その翌週、バンクーバーから出航する英国船に乗ることができると知っていましたが、外科医に外出を認めるよう説得するのに数日かかりました。私は旅をするにはまだ十分に回復していなかったのです。彼が最終的に同意したとき、荷造りと片付け、そして看護師から包帯をどのように取り替えるか習うのに24時間しかありませんでしたが、私は出航し、旅を終えることができました。

私がそのように間隔を開けて治療を受けられたのは、医師が私に受けることを薦めた2つの放射線治療が最初の治療から体力を回復させるために、通常3か月間をおく必要があったからです。

薬を飲んだとき以外は痛みから解放されませんが、毎晩アヘンを服用すると痛みがなくなり、神戸に戻っている間は、本当に安らかな夜を与えてくれました。しかし、こちらに戻る船に乗ったときから、突然、あまり効かなくなり始め、常に痛みが伴うようになりました。それで、ここに戻ったとき、放射線治療の前に、何か痛みの一部でも取り除く方法はないかと尋ねました。それで先週、私は2本の神経を切断しました。それらの傷が治った後、放射線治療が効くことを願っています。また、戸惑いながら診察を受けた後、私の今後の見通しについて、率直な意見を求めました。腫瘍は癌で、まだそれほど進んではいませんが、背骨の付け根の血管や神経の中に入り込んでいて手術はできないようです。最初の放射線治療はほとんど効果がありませんでしたが、かれらは2回目の治療も同じように試したいと考えており、それが次の治療です。

この書簡で私自身について多くを取り上げて申し訳ありませんが、私は米国聖公会からどれほど恩恵を受けているかも皆さんにお伝えしたいのです。現在の世界情勢では、ドルを使用している国にポンドを送ることはほぼ不可能です。米国に入ってくるカナダ人でさえ 25 ドル以上を受け取ることはできません。そして日本を去るときはまだその約4倍の金額を引き出すことができ、バンクーバーの2人の優しい司祭が手助けしてくれたのですが、それはアメリカの病院では長続きしませんでした。私は、今にも無一文の英国人難民になろうとしていたとき、米国聖公会の総裁主教によって救われました。最初は貸付だったのですが、その後、SPG 総主事のハドソン主教が秋にこちらに来て、すばらしい援助に関する正規の取り決めを交わしました。それは英国の伝道協会が戦争の危機を乗り越えるために、米国聖公会は今年度寄付を集めるという約束です。この教区の補佐主教と特にこの病院のチャプレンであるブラウン司祭にはとても助けられています。彼は定期的に御聖体を持ってきてくれるのです。セント・ポール市の大きな教会の牧師は、私が神戸に行き来する際の列車の手続きを助けてくれ、その教会は英国の伝道協会の活動資金を集めるために特別な努力をしてくれたと聞きました。そこで、私は今月戻ってきて説教をした際、彼の教

会に感謝を伝えました。

私が神戸に戻ったとき、バジジャー司祭夫婦はすでにオーストラリアに向けて出航していました。彼はメルボルン教区の教会を任されたそうです。ある英国人医師が神戸に留まり、英国領事館を支援して人々に避難を促しました。医師自身も現在は先にオーストラリアに送っていた家族と合流するために出航しましたが、彼の言葉がバジジャー司祭夫妻の背中を押したようです。私が到着する1週間前に夫妻は出航しており、かれらに会えなかったのはとても残念でした。もうこの世で会うことはないでしょう。

その他に唯一なくなったのはミス・ウーレイで、秋の終わりに引退した先輩宣教師の代わりに、松蔭女学校から東京の女学校に異動しました。彼女は体調を崩すまで長年東京の学校にいました。そして、私たちの緊急要請を受けて松蔭女学校に来た時、彼女は私に「本当は東京に戻ることを望んでいる」と話していました。ですから、驚くことはなく、彼女がクリスマスの後までは動かなかったということから、その気持ちを察することができます。

他のミッション・スクールのように、松蔭女学校ではキリスト教や聖書を教えることはできません。現在、ミス・リーとミセス・ラドフォードは英語だけを教えています。彼女たちの家や寄宿舎、聖ヒュー礼拝堂で学校の時間外に、より多くのことを教えることができます。それらの建物や土地は学校ではなく、ミッションが所有しています。神戸にいた9週間で3度、聖ヒュー礼拝堂で聖餐式の司式をすることができました。これらすべての学校の変化は、教育委員会から圧力を受けて行われたことです。

しかし、ボーイズ・スクールは影響を受けていません。政府の認可も受けておらず、神戸の数少ない外国人を受け入れているためです。完全に英語で教えており、ウォーカー夫妻もミスター・ギボンも楽しくやっています。神戸だけでなく、東京や横浜の他の外国人学校は、米国人や英国人の母親や子どもたちの避難が進むにつれて消滅したり、徐々に減ったりしています（こういうことは母国ではまだ知られていないのでしょうか）。しかし、私たちのイングリッシ

ユ・ミッション・スクールは発展しており、来学期は待機児童がいて、改築を検討しています。

私が着いたとき、八代主教は過労で寝込んでいました。彼は何事においても素直で申し分なく、補佐主教に留まると言い張っています。ですから、私は辞任することなく再び日本を離れ、まだ日本聖公会で管轄権を持つ唯一の外国人主教です。私は体調が悪いので会議に出席したり、中央の問題に干渉したりすることができないので、他の日本人主教たちも同意したのでしょう。

一方で、八代主教は英国人司祭については折れなければならず、もはやかれらは正式に教会の牧師を務めることはできません。実際にはかれらは以前と同じように教会の仕事をしていますが、正式には補佐主教のもと、副牧師となっています。

ストロング司祭とアレン司祭の2人もこの状況を受け入れており、ストロング司祭とミス・ボールズは下関を去ることが最善と考えています。夏に戻ってすぐ、ストロング司祭自身が、非常に悲しいことではあるが、そのような異動は避けられないと考えていると言っていました。外国人が訪問した後のクリスチャン家庭に対する警察の取り調べ(迫害であることは言うまでもありません)は耐え難いものになっていたのも、信徒の半数以上がいる、教会から離れた地へのいかなる牧会も外国人はできなくなりました。

それで、ストロング司祭は現在、松乃舎に住んで、そこからバジジャー司祭がいた姫路顕栄教会の牧会をしています。下関にいた伝道師は執事に按手されて姫路に住み、姫路の遠方に住む信徒は神戸にいる日本人司祭が協力して牧会しています。ミス・ボールズは再び神戸昇天教会に派遣され、昇天教会と須磨聖ヨハネ教会の幼稚園を任されています。

すべての混乱の最中でも皆さんに理解しておいてほしいことの1つは、神戸の信徒・聖職の多くがこれまでのように私たちに友好的で、西洋人宣教師の退去を望んでいないということです。退去要求は極端な国家主義者から出ているのですが、他の人々は退去要求に反対すると非国民と見なされることをとも

恐れているのです。それでも、多くの教会には以前のように数人の新しい求道者と洗礼や聖餐の sacrament を待っている人々がいます。

日本のミッション・トゥ・シーメンの働きは、秋から冬にかけて減少し続けています。神戸も管理していた横浜のチャプレンは、増えている南アフリカ・ダーバンの働きを強化するために急に異動させられ、アレン司祭に神戸会館の管理を委ねたいというかれらの申し出を私は認めました。私が出航した後、彼とミセス・アレンは賃貸住宅を出て、シーメンズ会館に住みます。これは彼が日本宣教の働きから離れることを意味しません。彼は神学院を卒業した新人の助けを得て、来週から神戸西郊外の須磨聖ヨハネ教会での牧会をはじめます。

神戸にいる間、神戸地方部の半分の聖職者の異動を命じました。それは就任直後の補佐主教にとって簡単なことではなく、必要なことでした。その異動の中には、前の三位一体主日に按手したステパノ袴田〔観一〕司祭の派遣も含まれています。下関のストロング司祭の献身的な働きを引き継ぐためです。その人事異動は2月2日の日曜日に行われたペテロ加藤〔九十九〕とパウロ植村〔義久〕の司祭按手によって可能となりました。ペテロ加藤は執事として明石（バジジャー司祭が出た後）にいましたが、私以外に聖餐式をささげる人がいませんでした。現在は補佐主教の年老いた父親がそこに異動し、司祭となったペテロ加藤には松山を任せました。神戸聖ペテロ教会は外国人宣教師はおらず、司祭となったパウロ植村のもとで再出発しています。すべての異動を皆さんにお知らせする余裕はありません。ストロング司祭は按手前の黙想指導を任せられ、八代主教が聖職按手の説教をしました。

東京、横浜、神戸の英米人会衆のためのチャプレンは別として、現在、日本聖公会で働いている外国人司祭はストロング司祭とアレン司祭以外にいません（2人のカナダ人はすぐに出発する予定なので例外です）。私たちの地方部には、まだ何人かの女性宣教師が働き続けており、留まることを望んでいます。

SPG は来月から日本聖公会の活動や教役者への助成金をやめる予定だと伝えていますが、私たちの減少している宣教師団への助成金は継続してくれてい

るので、とても有難く思っています。フェローシップからの寄付は自然に減っており、今後も減り続けるでしょう。しかし、どうか皆さん、フェローシップから派遣されたストロング司祭の給与等や修女たちの家の家賃が払えなくなないように、最善を尽くしてください。また私は八代主教の末弟〔祥吉〕や彼の長男〔欽一〕を含む、聖職志願者たちの養成も支援したいと思っています。

心を合わせ、祈りを約束してくれている皆さんからの多くの手紙に感謝します。現在、私のペンはとても遅く、不確かなので、しばらくの間は返信できないかもしれませんが、手紙を受け取って非常に喜んでます。そして、皆さんのうちの幾人かにも感謝しています。2冊の本をミス・メルヴィルがフェローシップから送ってくださり、先週、こちらに届きました。

日本聖公会の全般的な事柄について簡単に記す必要があるでしょう。九州地方部のマン主教は10月初めに辞任し、八代主教は神戸の補佐主教として聖別されてすぐ、九州を管理する主教にもなりました。主教会議長だったヘーズレット主教と2人の米国人主教はともに10月中旬に辞任し、米国聖公会の総会后、11月中旬まで日本に戻らなかった米国人主教はクリスマスの直前に辞任しました。米国聖公会は日本の3つの地方部のそれぞれに、地方部の助けとなるよう、自由に使うことのできる多額の資金を贈りました。ほとんどの地方部は日本人教区主教の早期就任を希望しており、そのための十分な資金を準備しなければなりません。

2人の米国人主教はすでに他の主教職に任命されています。1人〔シャーリー・ニコルス〕はアメリカ本国、1人〔ノーマン・ビンステッド〕はフィリピンです。もう1人の年長の主教〔チャールズ・ライフスナイダー〕は、2～3年間は管轄権を持たずに日本に滞在し、その後で引退する予定です。ヘーズレット主教も同じことを考えています。彼は辞任後も、重い病で入院している東京教区の日本人主教〔松井米太郎〕の要請で、最近かなり多くの主教の職務を果たしています。ヘーズレット主教は、できるだけ宣教師団は日本に留まり続けるべきだという私の意見に賛成すると話していました。

この地における CMS の責任者でもあるマン主教はイースターに仕事を終わらせ、母国に帰る予定です。現在、CMS の聖職者は日本からインド、東西アフリカ、西インドといった他の地へちりぢりに派遣されています。

5 人の日本人主教はいくつかの地方部が自らの主教を得るまで、それらの管理を振り分けています。秋の中頃、かれらは日本聖公会がプロテスタント諸教派による合同教会に加わるべきではないと決め、主教会教書を発表しました。しかし、その教書発表の前後に、それに反対する継続的な妨害がありました。その妨害は複雑で、それを操作しているのが他の教団の指導者によるのか、私たちの教会の人々によるのかを識別するのは、簡単ではありません。再び私が離日するとき、日本聖公会はもうすぐ別の宗教団体として政府の認可を受けることになるだろうという希望が本当にありました。申請を出す際は、信経を含めて、十分検討された教団規則を提出する必要があります。

まとまりがなく、十分に検討されていない合同教会では、合意を見出すことがとても難しいでしょう。合同教会が使徒信経を採用しようとしていたのは事実ですが、かれらはすでにそこから処女降誕と復活を省いており、さらに最後の審判を省く案についても激しい議論が交わされていました。この最後については国家主義者が強く主張していますが、カール・バルトを偉大な教師としている若い長老派の牧師が反対しています。

さて、この書簡はもう長すぎるので、そろそろ終わらなければなりません。私の祈りはどんなときも母国の皆さんとともにあります。神が祝福し、ともにいてくださいますように。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

## 書簡 56号

日本、神戸四宮、松乃舎

[1941年5月頃]

親愛なる友人ご一同様

この前の2月に、私たちは下関の教会の物語に一区切りをつけました。その一区切りには、12年以上に及ぶ皆さんの祈りと寄付によって ～ 神戸フェローシップによって成し遂げられた非常に特別な意味があります。それを皆さんにお伝えしたいと思います。

1928年10月、私はバジル主教によって、司祭として初めて下関に赴任することを命じられました。そして、私にとって最初の主日礼拝の会衆席にミセス・ジョンソンとご息女のプリムローズがいました。その時から下関の働きを支援することはフェローシップの特別な責務となったのです。今年の大齋節第1主日に私は聖フランシス教会の牧師として最後の聖餐式をささげ、その責任をステパノ袴田〔観一〕に託しました。皆さんは彼の聖職按手式の写真をご覧になったでしょう。（今でも皆さんの特別な関心と祈りの的である）聖フランシス教会が、新しい歴史の物語を書き始めたのだと考えてください。どの国においても、キリストにおける兄弟姉妹が本来そうであるべきように、かれらのうちの1人によって牧会されるようになったのです。そして、このことを真に達成させたのは、フェローシップの特別な祈りと寄付によるのですから、皆さんにはそのことを私とともに喜んで頂きたいです。

私たちが感謝のうちに覚えている、過去数年間の皆さんの祈りと寄付による神の祝福の形跡を簡単に要約したいと思います。1928年、下関の教会は本州西端の町で、港を見下ろす小さな家を借りていました。孤立した信徒を含めて、この遠く離れた教会の信徒数はわずか27人でした。そして、年間収入は900円程度です。1928年以降、130人以上がその教会を経て他の地へと移り住んでいます。ですから今日、聖フランシス教会の元信徒（以前の教会に対して驚く

べき愛着を持っています)とは、ほとんどの大都市で会うことができ、その教会でとても貢献しています。そして、この幸せに満ちた「神の家族の絆」を継続できたのは、下関の教会のためにフェローシップが絶え間ない祈りをささげてくださったことにほかなりません。元信徒全員が、かれらの信仰生活の多くを皆さんに助けられたと認めています。8年前まで私たちの教会は借家でした。その後、主にフェローシップのメンバーの好意によって、私たちは現在の土地を取得することができました。そして教会は今や確たる家を持っています。神よ、いつか聖フランシスの庇護の下に恒久的な教会がその良い土地に建てられますように。

これらの年月、私たちの主は、皆さんの祈りを用いて、どのようにして男女を「暗闇から主の素晴らしい光へ」と招き、かれらが主の愛による贖いを知り、かれらの人生を変えられるのかを私たちに示されました。その素晴らしい出来事によって、私はたくさんの物語のページを綴ることができました。そして聖フランシス教会の祭壇を中心とした交わりによる素晴らしい出来事によって、私は物語のページを満たすことができ、宣教師団の司祭は日本人の心にある豊かな愛情を知ることが許されたのです。神よ、この暗い日々の憂鬱が私たちを押しつぶそうとしているように見えるときには、いつでも私たちはその思い出によって、明日への希望を新たにすることができますように。私の年老いた忠実な使用人のワキノさんが、この10年、彼の家でもあった教会を去るとき、門にたどり着くと振り返って、長い厳粛なお辞儀をしました。そのとき、聖フランシス教会は真の日本の敬意を受けるものとなったことを意味したのです。どのような言葉もこのことを十分に言い表すことはできません。

現在、私の家はバジル主教とともに再び「松乃舎」となりました。公的には、私は八代主教のもと、聖ミカエル教会に派遣されていますが、実際には、今は執事のテトス秋田〔温人〕がいる姫路顕栄教会を手伝っています。

日本聖公会は重大な試練に直面しています。外部の援助に多く依存していた状態から完全な自給へ急遽移行すること。より大きい試練は ～ 日本人指導

者のもと、抑えの利かない国家主義の中でのカトリック的遺産と使徒継承を守ることです。皆さんの絶え間ない祈りが、今日、最も必要とされています。日本人の聖職と会衆は、厳しく管理された状況で、また「新秩序」が要求する非常に限られた手段の中で、これまでの働きを保つのはとても難しいでしょう。それでも、宣教師の出番や必要性は決して大きくはありません。皆さんの祈りに対する、何という答えでしょう。

ちょうど、東京で総会が開催されました〔1941年4月22日～24日<sup>8</sup>〕。新しい宗教団体法に合わせて改定した教団規則は可決されました。しかし、聖公会はまだ正式な宗教団体として政府に認可されていません。今のところ、5人の日本人主教は旧制度の10教区で運営しようとしています。「5つか、それ以上か」という問いが大きな争点になっています。八代主教はバジル主教不在の神戸教区を任されていますが、九州教区も管理しています。それは経験豊富な主教にとっても難しいことであり、彼の体調はあまり良くありません。また、突然、教会ですべての牧会的責任を引き受けなければならなくなった若い司祭たちのことも、特に覚えてください。東京の小さな日本人修女会がトゥルローの修女会の指導と交わりを奪われたことも覚えてください。神戸の女性宣教師たちは彼女たちの祈りの家にいます。新秩序の厳しい条件の下、教区の財政的および牧会的な運営を計画しなければならない様々な委員会を覚えてください。

こちらの教会は重大な問題に直面しています。日本聖公会は愛国心で満ちています。教会のカトリック的遺産への忠誠を尽くすということと現在の移行作業にとって、その熱意が適切であるかどうかは、皆さんの祈りがもたらす、聖化の恵みによるところが大きいでしょう。

感謝を込めて

ノエル・ストロング

---

<sup>8</sup> この第20総会で全地方部が自給し、教区となることを決議したため、今号以降はすべてを教区と称する。

## 書簡 57号

オックスフォード、ウッドストック牧師館

1941年11月22日

私の友人ご一同様

私の個人的なことから始めることをご容赦ください。上記の住所は、私の妹とその夫であるウッドストックの牧師の好意により、私が今住んでいるところで、しばらくはお世話になろうと思っています。日本からの帰国に際して、親しい人たちとはあまり会っていません。現在、私は辞職し、病人として2人の介助を受けています。

ご存じのとおり、私は飛行機で帰国しましたが、病気のせいで非常に興味深いはずの旅が悪夢に変わりました。幸運にもリスボンと呼ばれるヨーロッパの玄関口では、英国人の小さな病院に直行し、母国に向かう英国の飛行機を待つ12日間、そこから全く動かされることはありませんでした。帰国すると神戸で最初の数年間、私の主治医をしてくれたバーカー先生の家のおすぐ近くに運ばれ、親切なことに彼は自身の家のベッドに4日間、私を寝かせてくれました。その間に親しい人たちがオックスフォードの小さな病院のベッドを見つけてくれ、化膿した手術痕の再手術を受けることになりました。その後の回復は非常に遅く、4か月以上経っても1日3回の包帯交換が必要です。

私はハイヤーで2回、ロンドンに行きました。1回は8月中旬にカンタベリ一大主教〔コズモ・ラング〕の要請で面談するため、もう1回は案内で皆さんもご存じのとおり、フェローシップのフェスティバルに出席するためです。会議で多くの方に迎えられ、聖ミカエル日の朝に神戸教区を覚えて聖餐式を司式することができて、とても幸せでした。どちらも聖ルカ・ホステルの親切で手際の良い奉仕があったおかげです。9か月以上前に日本を離れてから、聖餐式を司式したのはわずか5回です。あれ以来、体調は悪化しており、癌が血管を

侵してかなりの出血があったので、外出していません。

飛行機で帰国した際、カナダにトランクを残し、後から貨物便で送らなければなりません。先月、トランクは無事に到着しましたが、蔵書、家具、その他の所持品はすべて、まだ松乃舎にあります。今は移動させることができないので、敵によって、家やその他すべてを失った人々の気持ちが少し分かります。私は聖ミカエル日に神戸教区の主教を辞任しました。ご想像のとおり、それはとても辛いことでした。しかし、たとえ私が何とか日本に戻れたとしても、病院に入院するだけで、他の人々の重荷にしかありません。そして、この2か月、追い出された西洋人主教たちに代わって、九州以外の空位の教区で日本人主教の選挙と按手が行われているというニュースが少しずつ届いています。まだ、明確な選挙結果が得られていませんが、5人の新しい主教のうちの1人だけが英国から支援を受けて養成されたという事実を変えることはないでしょう。他の主教の支援はすべて米国によるものでした。9月末までに全員が按手されました。九州教区はまだ自身の主教を持つ余裕がないと言い、八代主教が管理主教となったことにとても満足していると聞いています。2つの教区の仕事が彼にとって重荷となるのではないかと、私は恐れています。しかし、他の教区主教たちにとっても、彼だけが神戸教区の補佐主教であることは苦しいことであり、私が辞任するまでそれを変えることはできません。1年前に書いたことを忘れてはませんが、事情によって状況は変わります。

聖ミカエル日の会議で行った私の講話では、すでにフェローシップの書簡に書いたことをいくつか振り返りました。しかし、日本聖公会の危機に関する報告の中で、強調も言及もされていない重要な点を説明するためにそれらをお話ししようと思いました。東洋の国々では「面目を失うか、保つか」が重視されていることを皆さんはご存じでしょう。危機が到来する2か月前、すべての主教と聖職と信徒からなる教務院会議を東京で4日続けて開催し、日本聖公会の成立から50年以上かけて徐々に構築してきた法憲法規を見直し、修正し、(可能な限り)新たな教団規則として完成させました。新しい規則は単なる修正以上の

ものでした。新しい法のもと、公認の宗教団体として認可申請する場合は、国家当局に提出して裁可を得るという事実を考慮したのです。

新しい規則の大部分は、主教、聖職者、信徒の規律に関するものでした。その規則の恐ろしいところは、(たとえば) ある司祭が国家または軍当局によって逮捕された場合、彼がどんな罪を犯したか明らかにされるのを待たずに、あるいは裁判に送られただけでも、教会は(主教会議長を通して)すぐに彼を教会の職から解任しなければならないというところです。教会が彼を罰するのは、彼が有罪だからではなく、告発されたからであり、それは教会の面目を保つためなのです。皆さんにはこれによって噂や誹謗中傷がどれほどの誘惑となり得るかが分かるでしょう。

4 日間の新しい規則についての話し合いの中で、年長の日本人主教はこの問題がどれほど深刻であるか理解していましたが、教会(の面目)を保つためには、そのような規則を持つ必要があると言いました。そして2か月後、救世軍の日本人指導者たちが逮捕されたとき、報道機関は、次は私たちの教会、日本聖公会がこうなるだろうと言い出し、逮捕されて面目を失うことよりも、むしろ国家主義者の望みにしたがって、進んで長い道りを行く方が理に適っているとしたのです。

聖職者の立場を悪くする別の問題もあります。もちろん、日本に英国人聖職者が持つ自由保有権のようなものはあり得ません。しかし、神戸教区では教区から聖職者に給与を支払っていました。けれども、今では英国と米国から日本人給与の援助金を送ることができず、たとえ送ることができたとしても受け取ることができないため、個々の教会は自給を増やすよう強く求められています。かれらはある基準に達すると、自らの司祭を選ぶでしょう。そして、このことは司祭との関係においてかれらに大きな権限を与えることになります。

増加した財政的負担を何とかするためのもう1つの方法は、有給の婦人伝道師全員に辞職を求めることです。彼女たちは6月末に辞職し、6か月分の給与を退職金として受け取った後は、**非常に**少ない年金を受け取ります。彼女たち

のうちの数人（4、5人）は、教区の資金によってではなく、八代主教との特別な約束によって再雇用されたと思います。経済的困難を克服するために抜本的な措置を講じる必要があることは分かりますが、婦人伝道師を失うことは本当に悲しいことです。いくつかの教会では、彼女たちが伝道と改宗の主要な働き手であり、そのほとんどが教会での奉仕に生涯をささげることを楽しみにしていました。

他にも、すべての年配の司祭に年金をもらいながら働き続けられないなら、辞職することを求めました。そして年金のほか、かれらは地方教会から与えられる給与だけを受け取ります。これは教区財政をかなり助けますが、実際には20年は保つと考えられていた聖職者の年金制度を破綻させ、ほとんどの教区が年金制度を完全に廃止しなければなりませんでした。

聖ミカエル日の講話ではプロテスタント諸教派の合同教会の問題について話す時間がありませんでした。合同教会も、聖公会もまだ政府の認可は得られておらず、キリスト教ですでに認可されているのはローマ・カトリックだけです。しかし、認可された団体は正式に神社参拝を受け入れたことが知られています。そして、かれらの対外関係にはイタリアが含まれており、政府の観点からすると英国よりも良いのです。認可申請書とともに政府に提出した新しい規則には、教皇さえ言及されていません。

最新の情報では、私たち日本聖公会も、プロテスタント諸教派も、合同に同意しない限り、認可は得られず、そのための圧力が再び強まっているとのこと。メソジストの有名な監督の阿部〔義宗〕は教団議長に選出されましたが、彼は代表（統理者）ではなく、その地位は長老派の富田満博士が務めました。富田博士は使徒信經を取り入れることを強く訴えましたが、それは不確かです。新しい規則に含まれ、認可申請書に示されたかれらの信仰告白は次の通りです。「この教会は信仰と行動の基本的な基準として旧約聖書と新約聖書を受け入れます。使徒信經に従い、そして合同する教会の信仰告白の調和を保って、私たちは次のことを最も重要なこととして明示します。『聖書の中で明らかにされ

ているように、父と子と聖霊の三位一体の神は、キリストの贖いを信じるすべての人の罪を赦し、義とし、聖として、永遠の命を授けます。御子はこの世の罪のために死に、復活されました。教会は恵みによって招かれ、礼拝し、洗礼と聖餐の神聖な儀式を守り、福音を宣言し、主の到来を待ち望む人々の体です。』

日本聖公会の総会では、3人の日本人教区主教を対象とした選挙において、2年以内に80歳になる年離れた名出主教が、主教会議長となるのに十分な多くの支持を得ました。選挙は全会一致で賛成でした。総会は教区数をそのまま残すとし、私がその決定を（アメリカで）聞いたのは、聖ミカエル日で辞任願いを神戸に向けて出したときでした。

各宣教師について簡単に報告したいと思います。3人のCMS女性宣教師、エリザベス・ナッシュ、コンスタンス・リチャードソン、マーベル・バググスはそれぞれの孤立した宣教地にまだ留まっています。彼女たちをととても誇らしく思います。

ジェシー・ボールズは初夏に思わしくない診断書を受け取り、神戸の他の人々にとって自分が重荷になると考え、9月下旬に英国人の女性と子どもたちを避難させるための特別な船でオーストラリアに向かいました。あともう1人、九州教区に残っていた唯一の英国人宣教師も出航しました。かれらは出発して間もなく巨大な台風に遭遇しましたが難を逃れ、ミス・ボールズはまずメルボルンのシスターたちのもとに向かいました。

パット・ギボンは夏休みに中国に行きましたが、彼を乗せた船は上海で全員を降ろして日本に引き返しました。それはちょうど航行停止などの「凍結」命令が出された時でした。数週間、上海にいた後、彼はインドの軍隊に志願し、最後の知らせはカルカッタからで、将校の訓練キャンプに参加すると聞きました。

皆さんは昨年オーストラリアに向かったバッジャー司祭のことを覚えているでしょう。私はバッジャー司祭からとても幸せそうな手紙を受け取りました。しかし、ここに着いて間もなく、彼は電報で妻の両親に、彼女が安らかに死ん

だことを伝えたとのことです。どうか彼女の魂のためにお祈りください。そして彼と母を失った2人の赤ん坊を覚えてお祈りください。この書簡を書いている間に郵便で新しい知らせが届きました。死因はある種の中毒で、彼女は24時間以内に体調が悪化したようです。

2年前、減少する英国人会衆はSPGにかれらのチャプレンに支払う給料の援助を要請しました。そこで、SPGは欠員となっているスタッフ1人分、女性宣教師の給与と同額をかれらに支給することにしました。今では神戸の英国人は大幅に減少しており、来年からチャプレンの給与の一部さえ支払うことができそうにありません。それでブルックス司祭は去らなければならず、シンガポールのチャプレンになります。英国人会衆は神戸にいるストロング司祭とアレン司祭がオール・セインツ教会で英語礼拝を司式できるよう願っています。

英国とアメリカによる資産凍結の報復として、日本政府は英国との郵便をほぼ停止したようですが、先週たくさんの郵便物がまとめて届きました。7月から9月に発送されたもので、すべてではなさそうです。最新のニュースはほとんど電報に頼っています。また、日本にお金を送ることはできず、残っている宣教師たちはかれらが持っている日本円で何とかして生きていかなければなりません。しかし、その差額は通常の生活に戻ったときに支払われなければなりません。ですから、十分な積立をしておくために、どれほど少額でも構わないので、各々ができる寄付をよろしくお願いします。それはまた、後に十分なファンドを神戸教区に贈るためでもあります。私たちが前々から日本人教区主教の給与を支援し、可能とすることを願ってきたように。11月18日、教区会が神戸で開催され、八代主教が教区主教に選出されたことを私は何よりも喜んでます。戦争中は英国の重要な闘いを支援するためにフェローシップの資金を政府に貸します。今期の年間総額がさらに減少したのは、これまで物惜しみしない人たちからの多額の寄付がいくつか中止されたためです。今年の少額寄付の口数は昨年を大きく上回っており、申し分なく、とても感謝しています。

日本における最近の更なる制限は、外国人が電車で旅行できないことです。

その結果、ストロング司祭は姫路に行くことができなくなりました。神戸の日本人司祭が姫路へ聖餐式をささげに行き始めたので、代わりにストロング司祭は彼の教会へ行っています。姫路のもう1つのショックは、私が今年姫路のために執事接手をしたテトス秋田〔温人〕が、軍隊に召集されたことです。この春から神学院で学び始めた八代主教の末弟〔祥吉〕も召集されました。テトス秋田だけでなく、司祭の息子でもう1人のテトスのテトス中道〔淑夫〕は、執事試験を受けていますが、おそらく姫路に異動となるでしょう。司祭試験は聖ミカエル教会で八代主教のもと副牧師をしているヨハネ末好〔時信〕が受けています。最新の電報によると、主教着座式は聖フランシスコ・ザビエル日〔12月3日〕の週の8日とのことです〔実際に行われたのは1942年1月6日〕。私の着座式は16年前の聖フランシスコ・ザビエル日でした。八代主教の神戸教区での最初の聖職接手式は降臨節に行われます。彼はすでに九州教区で聖職接手式を行っています。

ミス・リーとミセス・ラドフォードはまだ松蔭女学校で英語を教えています。現在、学校の理事会は敷地内にある宣教師団の財産を買い取ろうとしており、その売却金は日本人教区主教が必要としている主教基金の3分の1となるでしょう。このことは今年初め、私がまだ神戸にいる間に決まっていたが、夏休みから着手されました。ミセス・ラドフォードは学校の上の丘側にある日本家屋を借りています。ミス・リーは修女会が住んでいた家の一部を彼女たちがオーストラリアに去る前に借りました。しかし、校内の礼拝堂は、百人の会衆には小さすぎますが、(私が思うに) 神戸教区で最も満足のいく教会堂で、宣教師館や女子寄宿舎と一緒に売られてはおりません。慎重に解体され、教会堂とするために明石に運ばれました。ミス・シメオンが明石での8月と9月の建築の様子を知らせてくれました。ミス・シェパードは、以前は南東京地方部で働き、その後、草津のハンセン病者の救済活動をしていましたが、政府がすべてのハンセン病救済活動を引き受けたので、そこを去らなければなりません。彼女はミス・シメオンのもとに行き、ミス・コンウォール・リーの世話

を一緒にして、お金を節約するために日本人看護師を解雇しました。彼女たちの所持金はあと数か月しか持ちませんが、アレン司祭が会計担当者として彼女たちを助けるでしょう。世界が激しく揺れ動く中、明石聖マリア・マグダレン教会の静かな敷地内で、気高い患者によってとても堅実な看護師が回心し、クリスマスに洗礼を受け、私が日本を発つてすぐに八代主教から堅信式を受けました。

(電報は別として) 郵送による最新のニュースは 10 週間前に書かれたものです。ミスター・ギボンがいない中、ウォーカー夫妻がイングリッシュ・ミッション・(ボーイズ) スクールを運営するのに、どのような手助けをすれば良いのか分かりません。7 月に書かれたミスター・ウォーカーの報告によると生徒数は 90 人とありましたが、夏に起こった出来事でほぼゼロになったと思っていました。しかし、ストロング司祭は秋学期が始まった時点で、60 人以上の登録があったと書いています。

より詳細な説明や解説をお望みであれば、また要約したことが明確になっていない場合も、遠慮なくお尋ねください。

感謝を込めて

神戸地方部主教 バジル

追伸 12月8日、開戦。神が正義を守ってくださいますように。

## 書簡 58号

オックスフォード、ウッドストック牧師館

1942年2月22日

私の友人ご一同様

日本が宣戦布告したのは、皆さんに前の書簡を送った時です。(太平洋戦争により)現時点で日本から直接の知らせはなく、これから当分はないでしょうから、それほど頻繁に書くことはなさそうです。しかし、不必要に遅らせることなく、現在、皆さんに知ってほしいことがいくつかあります。まず、前の書簡が発送された後、何と「神戸教区主教を辞任した」と明確に書いていなかったことに気づきました。むしろ、私はそれを自明のことと考えていて、教会の公報を見ていないメンバーやフェロウシップ会議に出席していないメンバーから辞任について尋ねる手紙を受け取りました。私は自分の主教按手16年記念であり、ミカエル八代主教の主教按手1年記念となる昨年の聖ミカエル日をもって神戸教区主教を辞任しました。私は彼が全会一致で教区主教に選出されたと言いましたが、前の書簡を書く直前に電報でそのことを知りました。その後、手紙で「日本の使徒」聖フランシスコ・ザビエル日の週の8日に着座することになっていると聞きました。おそらく、日曜日の朝、日本がアメリカと英国を攻撃し始めた、まさにその日に行われたのでしょう。なんと悲しいコントラスト。実際、日本が行っていることは私たちの希望に反しており、心を痛めています。また、(ご存じでしょうが)日本では聖職者に対する兵役免除はなく、何人かの日本人司祭は私たちに反し、そして良心に反して、実際に戦闘に加わっているかもしれません。神戸教区で働き、現在は何年か母国の地方教会の牧師をしている年配の英国人司祭から、最近、独り息子が楽しい子ども時代を過ごした人々と戦うために、マレーシアに到着したという手紙を受け取りました。もちろん、攻撃は決行されなければならず、日本は必ずや敗北するでしょう。

しかし、個人的な悲しみを軽減することはなく、先の大戦と同じようにヨーロッパの各地でもそのような悲しみはたくさんあるはずです。

戦争は太平洋と太平洋に接するすべての陸地に及んでいるので、日本の宣教活動は巻き込まれている一部にすぎません。隣には朝鮮があります。現在、主教は常駐しておらず、日本聖公会の一部ではありませんが、過労気味の八代主教が秋に堅信式を行うために渡航しました。神戸のように、朝鮮には英国の2つの伝道協会の司祭がいます。

その向こうは「占領地」と呼ばれるようになった中国の教区です。最近まで、中国に派遣された何人かの宣教師はよく神戸に数日間泊まっていたので、かれらの多くを知っています。3か国では宣教活動の大変さが異なりますが、中国北部は病院や学校を失い、その他のことでも苦しんでいることでしょう。中国から南へ向かうと香港を経て、次にフィリピンがあり、その臨時主教に東北教区の米国人主教〔ノーマン・ビンステッド〕が着いています。主教館と主教座聖堂はマニラにありますが、日本が占領したとき、彼は「奥地」にいました。彼についての新しい情報はありません。夏、カンタベリー大主教はその米国人主教をシンガポールの管理主教に任命しました。フィリピンを越えるとボルネオ島があり、多くはオランダ領ですが、北部の細長い地域は英国領でラブアンとサラワクの教区があります。SPG（かれらは極東教区の救済基金を開設しました）から聞いたのですが、その主教とアーチ・ディーコンは日本に占領されたクチンにいます。5人の女性宣教師はジャワまで逃げることができました。

シンガポールは英国聖公会の中で、最も広大で不便な教区の1つで、タイとマレーシア、そしてオランダ領東インドで活動するチャプレンたちも含まれています。神戸で英国人が大幅に減少したため、給料が未払いとなっていたブルックス司祭は、チャプレンとなって2年目に、SPGと私と電報でやり取りした後、シンガポール教区のチャプレンのオファーを受けました。彼がいつ移動するつもりだったのかは知りませんが、神戸で太平洋戦争に遭遇したことでしょう。彼はまだ神戸にいたはずで、それは少なくとも「マレーシアのどこか」で

遭遇するよりは良かったでしょう。

オランダ領東インドはニューギニア島の広い地域を占めていますが、我が国の地域もあり、第三の地〔パプアニューギニア〕は前回の戦争以来、オーストラリアの委任統治領となっています。ニューギニアの主教、フィリップ・ストロングは個人的な友人であり、時々、文通しています。かれらは最近、主教座聖堂を献堂し、宣教開始 50 年を迎えました。日本人は非常に広く伸びた部隊の一部をその地域に送りましたが、教区への影響については何も聞いていません。再び南東に向かい、日本軍はメラネシア教区のソロモン諸島を攻撃しました。その向こうにはポリネシア教区があり、オーストラリア同様、日本軍が次にどこに現れるか心配しています。

ここまで、遠方のことばかり書いて申し訳ありません。しかし、これらすべての教区が、これまで、また近い将来、神戸や日本の本土よりもはるかに多くの戦闘で苦しむことになるでしょう。そして、ほとんどの宣教師はまだそこにいて、支援を必要としています。SPG が極東救援基金を始めたのはそのためです。幸い、神戸の人々には近年の為替変動に備えて貯めた相当な基金があり、かれらはそれを使うことができます。昨年夏にアメリカと英国が日本の資産を凍結して以来、日本の当局は多くの新しい金融法案を作成しました。それは官僚的手続きに満ちていましたが、それほど悪くはありません。実際に戦争となり、そのような法案は増えるでしょうが、おそらく機能しなくなることはないでしょう。1940～1941 年の冬の 2 か月、神戸に戻ったとき、たとえ私たちの間で戦争が起こったとしても、神戸の宣教師たちは自分の家に住むことを許可され(ただし、借家は違います)、強制収容所に行く必要はないと感じました。しかし、太平洋戦争が始まった今、日本に手紙を送ったり、日本から手紙を受け取ったりすることはできません。昨年の初夏から 10 月中旬までは、4、5 週間を経た日本からの手紙の束を受け取りましたが、途中からは 8 週間から 12 週間かかるようになりました。11 月に出された手紙の束を受け取りたいと願っていますが、それらは届きません。10 月中旬の手紙で、ストロング司祭とアレ

ン司祭は10月20日から新しい検閲規則が開始されるので、その日までに行ける限りの情報を送りたいと書いていました。手紙は海外用郵便局に持って行かなければ、送ることができません。そして、そこで手紙を開き、検閲を待ち、内容について尋ねられるであろう質問に答える準備をしておくのです。そのため、戦争の有無にかかわらず、手紙の数は減ったのでしょうか。

最近、フェローシップのあるメンバーが私の代わりに、外務省のサー・ジョン・モンクと電話で話してくれました。日本に関する問題はアルゼンチン政府次第で、難しいのは途方もなく距離があるということです。すべての問い合わせはアルゼンチンを経由し、そこから日本に送られます。返信には数か月かかり、電報でも大変時間がかかります。現在、かれらは日本にいる英国人のことを何も聞いておらず、サー・ジョンは宣教師を特別リストに追加して送り、返事があれば知らせてくれることになっていますが、答えが届くのは何か月も先だろうと言っています。何か知らせが入ったら、電話するとのことでした。

前回書いたことで、訂正とお詫びをしなければならないことがあります。新しい日本聖公会の規則では司祭が当局に逮捕されたら、教会は当局がその司祭を有罪か、無罪かを決める前に、(面目を保つために)解雇しなければならないと書きました。しかし、日本から戻った英国人主教の1人が私のもとにやって来て、私が間違ったことを伝えていると言うのです。彼の記憶によれば、告発された人が有罪となったら、解雇されることになっているそうです。民事判決は軽く、刑期も短いかもしれませんが、違いはありません。彼は印刷された新しい規則のコピーを持っていて、私に知らせてくれました。彼によると、それは1年前に印刷されたもので、懲戒の第1条には「国法により犯罪となる行動をしたならば」とあります。その条項は、彼と私では詳細が異なり、また反する理解をしているのですが、1940年初夏の(以前、言及した)4日間で議論され、彼はその時に抗議して、後で印刷する前に修正されたというのです。事実を確認することなく、書いたことをお詫びしなければなりません。しかし実際には、この規則やその他の新しい規則についての教会の解釈は、主教会議長に

よって行われます。そして、その主教がその後、1940年の夏の終わりに取った行動は、教会の指導者が逮捕されないようにすることでした。恐れているのは、犯罪で有罪になることではなく、逮捕という事実によってただ面目が失われることなのです。

新しい規則はすべて「日本聖公会」と呼ばれる教会のために作られ、法的な宗教団体としての認可を得るため、政府に申請しました。前回、認可されたキリスト教団体はローマ・カトリック教会だけだと書きましたが、太平洋への戦争の拡大と、日本とのすべての通信が停止される直前に、(公式に確認したとは聞いていませんが)プロテスタント諸教会の合同教会が11月に認可されたという知らせが入りました。そして、私に届いた最新の手紙の1つによると、認可に関係する政府当局は日本聖公会が解釈や礼拝の実践で多様性を内包していると明言し、その聖公会がなぜもう少し先を行って、プロテスタント諸教派の合同に参加できないのか分らないと言っているそうです。とにかく、個別に認可される見込みはすぐにはなさそうです。もしそうなら、迫害ではないにしても、困難が続きます。そして、不確実な状況の中で、戦争が始まりました。

多くの方が、日本のクリスチャンが戦争についてどう考えているか尋ねてきました。私は日本を離れて1年以上経っており、日本の雰囲気はとても急速に変化し、それらはかれら自身によって変わります。また、かれらは政府が良いと思うニュースだけを得ています。広範囲におよぶ成功に誇張が必要だというわけではありません。私はかれらが謙虚さと穏やかさを求める祈りを必要としていると確信しています。私たちの宣教師が自分の家に住むことが許されているなら、使用人はかれらが希望したら買い物に行きます。おそらく、その際に使用人たちは多くの嫌がらせを受けるでしょう。

女学校の礼拝堂は明石に移され、そこで教会になったとお話しました。新しい敷地での再建は、最後の手紙が来たときにはほぼ完成していましたが、残念なことに、小さいが銅で覆われた美しい形の鐘塔は、明石の当局が政府の金属類回収令により銅を求めたので、引き渡さなければならず、手直ししなければなら

りませんでした。鐘塔は屋根なしというわけにはいかないのです、代わりにずんぐりした屋根を設置しました。

神戸教区日本人主教の給料に必要な基金に向けて貯めておきたい資金（今は政府に貸しています）についてはすでに言及しました。もう1つ、幾人かの宣教師は母国の家族を支援するために仕送りしていましたが、現在、宣教師たちは日本にいる間、自身の給料ではなく、手元の現金に頼っており、母国に送金することができません。そこで、戦争が終わるか、宣教師たちが帰国するまで、フェローシップがかれらを支援しています。このことのためにも、ご支援をよろしくお願いします。

主事のミス・メルヴィルは今まで事務局の住所をハラム・ストリートから変更しませんでした。しかし、現在はスコットランドで戦争関連の仕事をしており、追って知らせるまで住所は次のとおりです。「スコットランド、レンフルーシャー、キルマツカム、グリンドルフォード」

前回の書簡から私が外出したのは、歩いてすぐの教会でクリスマスの朝に聖餐式をささげに行っただけです。それはとても嬉しいことでしたが、聖ミカエル日以降、私がささげた唯一の聖餐式です。冬の間、本当に私は「具合が悪かった」のですが、これからより長く、温かい日が戻ってくるように、回復することを願っています。個人や団体からのたくさんのクリスマスの手紙とカード、そして素敵なプレゼントをととても感謝しています。

感謝を込めて

バジル・シンプソン

追伸 ～ 2月24日に書かれたSPGの報告によると、日本から東京にいる2人の女性宣教師は元気になっているとのメッセージを受け取りました。そして、メッセージには家に外国人の女性がいて、とても親切にされているとのことです。おそらく、このことは日本の他の地域の人々にも当てはまるでしょう。しかし、男性宣教師については何も述べられていません。

## 書簡 増補3号

カーディフ、ウィッチチャーチ、ヘオル・ネスト 26

1943年1月

私の親愛なる友人ご一同様

4月末のバジル主教の死以来、まだ日本にいた私たちと全く連絡が取れなくなったため、神戸教区と日本聖公会のニュースを送ることはできませんでした。しかし、私たち宣教師が本国に送還された今、フェローシップのメンバーは私が提供するニュースを歓迎するだろうとの提案を受け、フェローシップの主事の同意を得て、この書簡を皆さんに送ります。

送還された私たちは、7月の最終日に日本を離れ、10月8日にリバプールに到着しました。私たちはロレンソ・マルケス〔現モザンビークの首都マプト〕で2週間過ごし、同胞と交流することができました。そして、そこにいる間、私たちはレボンゴ教区における聖公会の働きを目にする喜びを得ました。ビクター主教の親切なもてなしを忘れることはないでしょう。ロレンソ・マルケスに到着したとき、私たちはバジル主教の死の一報を受け取りました（日本を離れたとき、英国からの最新ニュースは1941年9月中旬の手紙によるものでした）。フェローシップの皆さんなら知りたいと思うのですが、私はそこでビクター主教の計らいにより、臨時大聖堂の祭壇でレクイエムをささげました。アレン司祭が補式し、宣教師団のメンバーに加えて神戸からの多くの友人たちが加わりました。私たちはバジル主教が神戸の「松乃舎」の礼拝堂で11月のレクイエムをささげる際、いつも用いていた聖歌を歌いました。ロレンソ・マルケスを出た後、ケープタウンを訪れましたが、そこでも私たちはとても親切に歓迎されました。リバプールに着く前にその他で唯一立ち寄ったのはカーボベルデのサン・ピセンテ島で、そこでは駐在している英国人夫婦の幼い息子に洗礼を授け、小さな教会で英国人と聖餐式をささげる喜びに与りました。その教会

で司祭が礼拝したことは10年以上ありませんでした。もちろん、私たちは「外交特権」で旅をしていたので、問題はありません。その他の神戸の宣教師団のスタッフですが、ミス・リーはカナダのパスポートを持っていたため、次のアメリカへの船を待つ必要があり、ミス・バッグスは次の英国行きの船を待たなければならず、ミス・ナッシュは長年暮らした松江に留まることを選びました。それ以外は全員、10月8日にリバプールに到着した船に乗っていました。私たちは無事に母国に着いたことを深く感謝していますが、あのような状況下の日本に私たちの教会とクリスチャンの仲間を残さなければならなかったことを残念に思っています。

1941年12月8日のアメリカと英国に対する日本の宣戦布告は、英国のすべての人たちと同様に、日本にいる私たちにとっても大きな衝撃でした。状況は深刻でしたが、最悪の事態は起こらないと思っていました。もちろん、戦争が起こった場合、まだ日本にいる宣教師が抑留されることは十分理解していました。実際、宣戦布告の日、八代主教は地元の当局から宣教師は自分の家に留まることができるだろうと言われていました。しかし翌朝、聖ミカエル教会の聖餐式に出て、私も出席する予定だった教区会の準備をし、朝食のために家に戻ると私を逮捕しにきた警察に迎えられました。かれらはとても親切で礼儀正しく、拘留は大衆の興奮が落ち着くまでの数日だろうと話してくれました。「数日」は8か月になりました。7月29日に本国交換船に乗って出発するまで私たちは抑留されたままだったのです。強制収容所は神戸の「カナディアン・アカデミー」で、松蔭女学校のすぐ近くにあるミッション・スクールの寄宿舎でした。その収容所には私と一緒にアレン司祭とブルックス司祭、そしてミス・ポールズの旧友でアメリカの長老派宣教師がいました。神戸教区の残りの宣教師は、自由（町を離れることはできません）でしたが、ミス・リチャードソンは自宅「軟禁」となり、ミス・バッグスは広島で何人かのローマ・カトリックのシスターや米国人宣教師とともに抑留されました。ミス・コンウォール・リー（戦争勃発後すぐに亡くなりました）～ 主の御許で安らかに憩いますよう

に)の看護を手伝うために、草津から来て明石に住んでいたミス・シェパードは、神戸の私たちと同じような収容所で多くのオランダ人と一緒に抑留されました。カナディアン・アカデミーに収容されたのは40人弱で、そのほとんどがビジネスマンと銀行員でした。私たちは幸いにも、親切で同情的な警察官が担当となり、そこでの生活は思っていたよりは辛くありませんでした。私たちは定期的に主日礼拝を守り、抑留者の一人は日本を離れるときに堅信準備をほぼ終えることができました。毎日、訪問者との面会が許され、使用人が私たちの望む本や服の差し入れをすることも許されました。しかし、私は再び「松乃舎」で一夜を過ごすことはなく、日本を離れる前にバジル主教と私の私物を片付ける許可を得るのは困難でした。幸い、服はほとんど持ち帰ることができましたが、他のものはすべて残さなければなりませんでした。もちろん、すべての本とメモを失うことはとても大きな痛手でした。私が日本を離れる前に、当局は「松乃舎」とその家具を接収し、事務所にしました。私たちはこの家を売却して、日本人神戸教区主教の恒久的なファンドの基本金にしようと考えていたので、八代主教の損失はとても大きいです。しかし、八代主教はより深刻な問題にさらされています。

抑留された8か月間、私たちは日本人聖職者やクリスチャンから完全に切り離されました。抑留されなかった神戸の宣教師たちも日本人の教会に出席することは許されませんでした。八代主教は何度も収容所を訪ね、私たちが日本を離れるまでオール・セインツ教会の英国人会衆のために礼拝する許可を得ました。また、ミスター・ウォーカーは1942年7月までボーイズ・スクールを続けることを許されました。しかし、オール・セインツ教会とボーイズ・スクールはその後、東京と横浜の英国人教会と同じ運命 ～ 「敵国財産」として没収されるでしょう。東京の日本人クリスチャンは聖アンデレ教会とすべての歴史的関連施設が誰かの手に渡ることを恐れ、所有権を確たるものとするために必要な、かなりの金額を集めることにしました。私たちの抑留は八代主教にとって働き手のより深刻な減少をも意味しました。アレン司祭と私は公的にはど

の教会も管理できなくなっていました。抑留されるまで日本人教会で奉仕を続けていました。すでに八代主教は嘆かわしいほどの過労で、最近接手された人たちは経験が浅すぎて他の教会を管理することはできません。私のもと、松山聖アンデレ教会で働いていたヨハネ信岡〔修吉〕は1941年春に昇天教会の牧師として神戸に異動しましたが、1942年1月末に「インフルエンザ」と過労で倒れ、亡くなりました。彼は若い司祭の中で最も有望であり、私たちは大きな期待を寄せていました。彼の死は甚だしい損失です。～ 主の御許で安らかに憩いますように。彼の若い未亡人と残された4人の子どもたちのためにもお祈りください。長男〔信岡章人 司祭〕はまだ8歳にもなっていません。彼の死によって下関聖フランシス教会の牧師が再び異動することになりました（現在、当局は聖人の名前を使用することを禁止しています）。昨年、私の後任となった袴田司祭は現在神戸に連れ戻され、聖フランシス教会は中村〔弘〕司祭に引き継がれました。中村司祭は私の下関時代の後半、海峡を渡った隣の九州教区の門司の牧師をしており、私が不在時にしばしば聖フランシスコ教会で奉仕してくれていました。彼は下関の牧師になることをとても喜んでおり、忠実に仕えることでしょう。

私たちの抑留中、教会執行部と政府の間で重要な交渉が行われましたが、それについてはわずかな情報しか得られませんでした。宣戦布告の時までに、「聖公会」は新しい宗教団体法の下、宗教法人として公式な「認可」を得ていませんでした。そして、当局は（ローマ・カトリックが早くに認可されていたように）全プロテスタント連合体を「日本基督教団」として認可し、これに私たちの教会指導者を加わせようと強く働きかけていました。八代主教のこの計画への抵抗は決して揺らぐことはなく、「聖公会」は三聖職位と sacrament のカトリック主義を何としても守ることによってのみ、その伝統と責任に忠実であると確信していました。そして、一時期は動揺していましたが、他のすべての主教たちも彼と同じ立場を取ったようです。アメリカと英国に対する宣戦布告は、2つの国と密接に関係する「聖公会」のような教会に対する「認可」の

最後の望みを取り去りました。そして「認可」なくして、教会は宗教法人として継続できません。個々の会衆は単立教会として地方で「登録」だけできます。私たちが離れた時はそのような状況でした。公的には、新しい宗教団体法の必要条件により、「聖公会」は宗教団体として「存在」することをやめ、約 250 の独立した会衆の単なる集まりに変えられました。ですが、内実は政府との関係に影響がなければ、教会としての共同体と主教による管理は維持されていました。しかし、いつ当局が介入して地方教会を閉鎖したり、主教の監督を妨げたりするかは分かりません。私たちが日本を離れた時、地方教会が続けられる条件として、ローマ・カトリック以外で唯一認められていた宗教団体 ～日本基督教団～ に加わるよう圧力があることは明白でした。確かに見通しは暗いのです。最悪の場合、かれらにとっては新しい「カタコンベの時代」を意味するかもしれません。公の場で会うことができなくなり、普通に sacrament を受けることができなくなるでしょう。八代主教はこの可能性を想定し、必要に応じて忠実な残りの者を司牧する責任があることを覚悟していました。おそらく、戦争が終わるまでこの闘争について知ることはできないでしょう。すべての連絡が途絶えました。私たちに祈ることしかできません。そして、皆さんに日本聖公会、特に神戸教区と八代主教のために継続的かつ懸命な祈りを促すために、この書簡は書かれているのです。祈りの交わり ～ それが神戸フェローシップの本来の目的でした。そして、祈りが今以上に切実に求められていることはありません。それが私の最後の訴え ～ 今後のフェローシップの責務です。

1925 年にバジル主教が神戸フェローシップを設立したとき、その目的が金銭の寄付ではないことを明言しました。実際、フェローシップを通じて得られた寛大な寄付は、ニーズと責務に応えた祈りの自然な発露でした。それらは今も感謝して受け取られています。これらの責務のいくつかはまだ存在するのです。フェローシップがもはや提供できなくなっても、神が他の方法で提供してくださいと信じなければなりません。しかし、神戸教区のニーズに対して、当

分の間、お金を送ることはできないので、寄付を「リクエスト」するのは間違っているでしょう。それでも、まだ与えたいと思い、そうすることができる人々にとっては、戦争が終わると明らかになる、急を要するニーズがあることはまず間違いないということ覚えておいてください。そのとき、八代主教は最低限の生計を立てる手段が残されていることを知るでしょう。そして、バジル主教がそのような考えを念頭に置いていたことは疑いの余地がありません。彼は最後の訴えで、まだ与えることができる人々の助けを借りて、日本人神戸教区主教を支援するためのファンドを作るという願いを伝えていました。そして、バジル主教の献身的な働きに対して、これ以上にふさわしい記念はありません。八代主教が神戸教区で戦後世界の途方もない問題に直面するとき、（しばらくの間は私たちの政府に貸し出していますが）私たちのいかなる寄付も、必ず八代主教にとってかけがえのない助けとなるでしょう。そして、八代主教を最大限支援することは、間違いなくバジル主教が私たちに最も望んでいたことでしょう。ですから、敬愛する彼の意志に忠実でありましょう。一方、バジル主教がフェローシップを設立したのは、とりわけ祈りによるつながりであることを決して忘れてはなりません。その祈りは、今まさに急を要しているのです。

神戸でバジル主教と一緒に過ごした 16 年間、すべてのメンバーの祈りと寄付による支援に私の名をもって感謝し、この書簡を終わりたいと思います。そして、私が直面している英国での今後についても引き続き、お祈りください。

真心を込めて

ノエル・ストロング

## 注意

ミス・メルヴィルへのすべての連絡は、今後、以下にお送りください。  
オックスフォード、ウッドストック、牧師館、ミセス・ピクルス様方。

## 書簡 増補4号

カーディフ、ウィッチチャーチ、ヘオル・ネスト26

1943年10月

私の親愛なる友人ご一同様

日本から送還された私たちが英国に到着してからちょうど1年になります。しかし、この1年間に、神戸教区に残った3人の宣教師 ～ミス・リー、ミス・バッグス、ミス・ナッシュ～ について、あるいは日本聖公会で何が起きているかというニュースは届いておりません。第2の交換船については当局間で交渉が進められており、カナダのパスポートを持っていたミス・リーは2番目のアメリカ行きの交換船で離れることを許可されたかもしれません。それなら、もうすぐ私たちは彼女の知らせを得るはずです。かれらが皆、日本を離れたと聞けると、とても安心できます。すでに始まっているように、日本軍の戦況が悪化するにつれて、まだそこに住んでいる「外国人」に対する敵対感情はいよいよ難しくなるでしょう。

神戸教区から新しいニュースがない場合、フェローシップの皆さんは私が最近聖オルバン教会でした説教のコピーがほしいのではないかと思いました。私は、今、日本聖公会が直面している途方もない課題と母国の私たちが負っている揺るぎない執り成しの祈りを継続するという、特別な責務についてお話ししようと思いました。知らせは届いていませんが、1つ確かなことがあります ～ それはミカエル八代主教が率いる神戸教区は、国家支配の脅威に対して教会のカトリック的な伝統を保持しようとする大きな闘争の象徴的存在になっているということです。

私たちは日本で起きている情報から切り離されていますが、戦争の悲劇が他の場所でどのように影響し、それが主の働きにどのように作用しているかを想像するのは難しいことではありません。修女たちと一緒にオーストラリアに

取り残されているミス・ボールズからの最近の手紙には、日本人将校の遺体から取られた手帳を見せられた時、その中に妻と子どもと一緒に写った若き将校の写真があったと伝えています。そしてミス・ボールズはその写真は間違いなく、私が下関にいた頃の最後の伝道師で、1941年2月、バジル主教の最後の聖職按手式で執事にされたテトス秋田〔温人〕であると言っています。彼はその7月に姫路の教会から軍に召集されました。彼の父はバジル主教が1925年に初めて神戸に到着し、間もなく聖職に按手した最初の司祭であり、今は3人の息子、全員の死を悼んでいるでしょう。

皆さんは、去年本国に送還された宣教師たちがどうなったか、気になっていることでしょう。アレン司祭は故郷ヨークシャーのブラッドフォード聖オズワルド教会に派遣され、ブルックス司祭はサセックスのライに、ミスター・ウォーカーはミッドランドのYMCAの食堂を任されています。女性宣教師も同様にそれぞれの仕事に落ち着きました。現在、オーストラリアのバッジャー司祭はオーストラリア軍の諜報機関に雇われているという知らせが届いています。ミスター・ギボンズはインドの軍隊に属しています。私はふさわしい教会の仕事が見つかるまで、SPGの代弁者を続けます。

バジル主教から私たちへ託されたファンド ～ 戦後、日本人神戸教区主教の安定した基盤の支援に用いるファンドに向けて、メンバーからの寄付が順調に継続されているということをもミス・メルヴィルから聞くことは大きな励みとなります。前回の書簡で書いたように、邪悪な専制政治が倒されたとき、私たちが収入に従って与えるよりも、バジル主教が命をささげた宣教が、新たな途方もない課題に対して、十分な備えを確実にしておくこと。最愛のバジル主教の記念としてこれ以上にふさわしい追悼はありません。バジル主教は何事においても常に目的は1つ ～ 神の国の宣教における主の栄光でした。私たちもそれにならい、戦争の悲劇が引き起こす対立感情を乗り越える努力をしましょう。

少し早いですが、この機会にフェローシップの皆さんにクリスマスの挨拶を

送ります。

真心を込めて

ノエル・ストロング

追伸 皆さん、ご一読ください。

『日本の牢獄から<sup>9</sup>』

サムエル・ヘーズレット著（元南東京教区主教）SCM 出版

---

<sup>9</sup> サミュエル・ヘーズレット、北條鎮雄・松平信久訳（2011）「日本の牢獄から」『立教学院史研究 第8号』立教学院史資料センター、62～117頁。

## 書簡 増補5号

ホア・クロスの牧師館  
バートン・オン・トレント

1944年11月

親愛なる友人ご一同様

長い間、私は神戸フェローシップの皆さんに新たな書簡が必要だと感じていましたが、私には書けませんでした。

6月にハリファックス卿とメイネル・チャーチの理事会からホア・クロスの牧師に任命されるまで、ほとんどの時間を SPG のために国内を巡り、日本での働きについて話すことに費やしました。ホア・クロスの教会に就任するまで、リッチフィールド教区とその近辺でも臨時の仕事をすることができました。母国にいる人々が思いを巡らせ、祈りに際して、日本聖公会が現在直面している問題を覚え続けることは最も大切なことだと強く確信しています。また、その必要を認めずにはおれない多くの思いに接し、非常に心動かされ、励まされてきたことを付け加えておきます。そして、繰り返し、SPGの使節として国内を行き来し、とても多様な聴衆の中で出会った神戸フェローシップのメンバーの多さに衝撃を受けました。神戸教区には今も全国各地に驚くほど多くの友人がいます。私はいつも同じ質問を投げかけられました。「神戸フェローシップはどうなりましたか。まだ存在しますか。私たちは今、何を祈るべきですか。」もちろん、答えは次のとおりです。「はい、確かにフェローシップはまだ存在しており、バジル主教が設立した執り成しの計画は、今以上に急を要することはありません。」現在、日本聖公会～皆さんが祈りによって立ち上げと成長を助けた神戸教区～は孤立しており、世界のキリスト教とのあらゆる接触から完全に切り離されています。英国聖公会と日本聖公会との霊的交わりが失われるか、生き残って勝利するかは、私たちの絶え間ない祈りによるのです。今

以上に私たちの祈りが求められているときはありません。バジル主教が死の直前まで考えていたことは、私たちに訴えていた、神戸教区の将来の必要に答えるためにフェローシップを維持することであったことは、疑いの余地がありません。

もちろん、前回の書簡以降で、皆さんにお伝えできる新しいニュースはありません。SPG がスイス経由の電報で得た問い合わせから、ミス・リーは神戸の借家に住むことを許されており、元気であることが分かっています。しかし、彼女の孤立と厳しい活動制限下におけるストレスはとても大きいに違いありません。ミス・バッグスとミス・ナッシュは、東京近郊の収容所に移され、元気で満足しているとの報告があったようです。しかし、それは随分前のことです。極東の捕虜の中には、ケテルウェル夫妻のご息子のヒューがいます。彼はタイの収容所にいます。ミス・ボールズと修女たちはまだオーストラリアに取り残されています。修女たちは現地に順応していますが、ミス・ボールズは深刻な心臓の病気で6か月、入院しています。しかし、彼女は底抜けの明るさと気高い勇気をもって手紙を書いています。

日本聖公会や八代主教と神戸教区については、推測し、想像するしかありません。かれらが非常に深刻な困難に直面していることは間違いありません。東京からのプロバガンダ放送（1942年12月）は、すべてのプロテスタントが何らかの連合体（「日本基督教団」）を形成するためにもに合同し、聖公会（私たちの教会）の「大部分」が合同したと伝えました。しかし、そのような放送はほとんど信頼できませんが、少なくとも少数は合同せず、実際に政府の要求に応じていないということが分かりました。拒否の代償はほぼ間違いなく、宗教学法人のすべての特権を失うこと ～ おそらく、すべての教会が閉鎖されるでしょう。私たちには何も分からず、推測することしかできません。しかし私たちは、主が選ぶというものを大切にしており、信仰深い忠誠心は種が百倍の実を結ぶ土地であることを知っています。そして、祈りによってその種を養い、守ることができるのです。それ以上の為すべきことなどありません。全体主義

体制はかれらの ～主の恵みの聖奠的な手段～ を奪うかもしれませんが、主はその慈しみにおいて、別のやり方でかれらに役立つよう、私たちの祈りを用いるでしょう。

日本にいる仲間のクリスチャンが今、困難な誘惑の中に置かれていることは、想像に難くありません。かれらはみんな、熱心なナショナリズムの中で幼少期から育てられ、現在は軍事当局が許可するニュース以外、全く遮断されているので、自国の大義を信じることなく、縁を切ることは非常に難しいでしょう。そして現在、教会を追いつめている人々のナショナリズムを克服するのは非常に難しいでしょう。戦争によって容赦ない規律と犠牲がかれらに押し付けられ、敵意がより強固なものとなるでしょう。キリストの愛が、両国のすべての弟子たちの心に勝利を収め、戦争が終わったとき、神が私たちのうちに和解の道具や主の王権とカトリック的愛の証を見い出すことができるよう、真剣に祈りましょう。

真心を込めて

ノエル・ストロング

追伸 ～ 主事（ミス・メルヴィル）の住所はオックスフォード、ウッドストックの牧師館で、彼女は入会の申し込みを喜んで受け取ります。住所変更も同様にお知らせください。

## 書簡 増補6号

ホア・クロスの牧師館  
バートン・オン・トレント

1945年10月

親愛なる友人ご一同様

神戸フェローシップのメンバーに前回の書簡を書き、日本からどんなニュースでも届いたらお伝えすると約束してからちょうど1年です。ようやく沈黙が破られ、ミス・リーからの手紙がSPGの総主事にスイス経由で届きました。それは私たちの何人かに配布されましたが、私は皆さんにそのすべてのニュースを共有するべきだと考えています。ですから、受け取ったままと引用し、コメントを追加します。

「総主事としてハドソン主教の後任となった人物を見つける手段がなかったことをとても残念に思います。ですから、私は誰にこの手紙を書いているのか分かりません。

日本の真の教会は、神戸教区のミカエル八代斌助主教のリーダーシップのもと、勝利を収めています。

米国聖公会のミス・ネトルトン（かつてはSPG）とCMSの3人、ミス・バッグス、ミス・バグリー、ミス・ナッシュは無事です。おそらくCMSの3人はすでに避難しました。抑留されて、彼女たちは日本人から切り離されていました。私は何が起こっていたか話すことができたのですが、彼女たちが去る前に会うことができなかったことを残念に思っています。八代主教の家は私の家から歩いて10分で、私は主教と毎日コンタクトを取るという特別な恩恵に与っていたのです。

私は機会があればすぐに帰国するつもりです。ほぼすべての捕虜と抑留

者が解放され、おそらく 11 月には自由な民間人のための船が用意されるでしょう。それまでに、私はさまざまな教区に関する情報を入手しようと努めています、数日後に詳細をお知らせします。東京教区は 28 教会のうち、5 つを除いて、すべてが空襲で灰と化しました。神戸教区は 21 教会のうち、明らかに 3 つ（もっとあるかもしれません） - 聖ミカエル教会（八代主教の教会）、聖ペテロ教会、聖マリア教会が燃えました。南東京教区は 24 教会のうち、2 つ（浜松と川崎）は間違いなく燃えています。もっとあるかもしれません。

主教と私は戦争中にスパイ行為の疑いがかけられていたにもかかわらず、主教は私を最初から最後まで抑留と憎悪から守ってくださいました。1944 年 11 月に彼は徴兵され、数か月後に朝鮮で軍務につきました。彼が留守の間、空襲で彼の教会、家、本、衣服、また彼が保管していた宣教師の所有物はすべて燃やされました。彼は教会の残骸で小さな小屋を自ら建てました。

日本の食糧事情は非常に深刻です。医師は病床にある病人だけなら十分な食物があると予測しています。国民は闇市で生きるか、配給で死ぬかです。どうすれば、月 150 円で主教と家族が生きていけるのか、私には分かりません。彼と家族が飢えないようにすることは急を要する重大事です。たとえ一時的にでも、私がかれらに何らかの保証がなされるまで、ここを離れることはできないということを、彼が私にしてくれたことを考えるなら理解して頂けるでしょう。

神戸の大部分が一掃された 1945 年 6 月 5 日の無差別爆撃以降、私の家は避難民でいっぱいになり、敵国人の食糧配給センターになりました。それは多忙な生活で、私たちは続く空襲の間、1 晩に 1 回または 2 回、老婦人と病人を玄関に降ろし、空襲が終わるまでそこに座っていなければなりません。そして、昼間は手に入れたパンや他の食物を配給していました。

私は早く誰がこの手紙を書き送っているのかを知りたいです。フィッシャー博士がカンタベリー大主教に任命されたこと、また母国や日本でのいくらかの事実を知りました。しかし、多くの情報がこの国に届きましたが、重要な情報はほとんどありません。」

この手紙から受ける第1印象は、これからも大きな問題が待ち受けているであろうミカエル〔八代〕主教が、恐ろしい試練を乗り切ってくれたという強い感謝の気持ちでしょう。ミス・リーの冒頭の言葉は、最後までミカエル主教がカトリック主義とプロテスタント諸教派の合同という政府の計画に妥協しなかったことを意味するでしょう。何人の主教が彼と一緒に耐えたかはまだ分かりませんが、少なくとも私たちは忠実な残りの者が生き残ったことを知っています。神を讃えよ〔*Laus Deo!*〕。

ミス・リーの手紙が明らかにした悲惨で急を要するニーズを強調するために、少しコメントが必要でしょう。今後のニュースは日本聖公会の損失と必要としているものばかりとなるのはほぼ確実です。このようなことを見通して、バジル主教は再び私たちが支援できる日に備えて、フェローシップ・ファンドの積み立てを継続することを死に際まで求めたのです。破壊された主の宝は何でも回復するよう、できる限り物惜しみすることなく協力しましょう。私は、日本人クリスチャンが教会の働きを回復し、維持するために最大限に努力することを疑いません。しかし、かれらは今や絶望的に貧しく、おそらく日本聖公会は日本人聖職者の最低限の生活を支援なしに支えることはできないでしょう。そして、生きた働き人がいなければ、何もできないのです。

覚えているように、聖ミカエル教会はバジル主教の家のすぐ近くにあり、私たちにとって最も重要な教会でしたが「大聖堂」とは呼ばれませんでした。バジル主教の家が没収されたとき、「松乃舎」の礼拝堂から聖ミカエル教会に私たちにとって非常に重要な祭壇を移すことができました。それは神戸フェローシップからの贈り物の1つでした。バジル主教の牧杖（マンスター・スクエア

聖マリア・マグダレン教会からの贈り物) はバジル主教の後継者に遺贈されましたが、おそらく他の多くの財産とともに失われたでしょう。聖ペテロ教会はアレン司祭が司牧した教会の1つで、彼の特別な努力によって建てられ、見事に設備の整った教会でした。同様に、聖マリア教会はケテルウェル司祭の名とともに記憶されていました。それらは新しく、素晴らしい建物でした。

主事のミス・メルヴィルはフェローシップ・ファンドを積み増すために皆さんの寄付を喜んで受け取るでしょう(彼女の住所はオックスフォード、ウッドストックの牧師館です)。一方、フェローシップのメンバーにとって一番の責務は、これまで主が神戸教区の働きをととても豊かに祝福し、そして今も祝福しておられるという、祈りによる継続的な働きであることを忘れないでください。主は私たちの祈りに応えて破壊されたものを回復してください。非常に激しい苦難を経た信仰が、来たるべき時に主の特別な証人となることを誰が疑うことができるでしょう。

真心を込めて

ノエル・ストロング

## 書簡 増補7号

ホア・クロスの牧師館  
バートン・オン・トレント

1946年12月

親愛なる友人ご一同様

先月15日、主事のミス・メルヴィルと私とミセス・ジョンソンは、SPGハウスで開催された会議に出席し、ヘーズレット主教と会い、最近行われた日本旅行の報告を聞きました。この報告については別の「書簡」がふさわしいと思いますので、現在の日本、特に神戸教区の状況について私たちが知っているニュースをお伝えします。

おそらく、ほとんどの人はカンタベリー大主教がヘーズレット主教とマン主教に、米国聖公会を代表するライフスナイダー主教（前北関東教区主教）とカナダ聖公会を代表する司祭とともに日本に行き、日本の教会～日本聖公会へのニーズを調査し、その指導者たちと教会が必要とし、私たちから受け取ることができる援助について相談するよう、命じたことを知っているでしょう。帰国後、訪問団は公式な報告書を発行し、その要約は『海外ニュース』の11月号に掲載されました。報告書の全文は、日本聖公会とそこでの主の働きの展望に関心を持っているすべての人が読むべきで、モウブレイズ社などから入手できます（『戦後日本の教会<sup>10</sup>』）。11月15日、SPGハウスでは戦争で荒廃した日本への訪問について、より個人的で親密な報告を聞きました。それは非常に心揺さぶられる話～言葉では言い表せないほどの大混乱と破滅の話で、美しい古都の京都と奈良を除く、日本の主要都市のすべてが10～90%、空襲され

---

<sup>10</sup> ポール・ラッシュ、飯田徳昭訳、立教学院史資料センター編（2008）『日本聖公会 - ポール・ラッシュ報告書』立教大学出版会、157～179頁。

たそうです。また、途方もない復興事業に向けて、忠実な聖職と信徒が置かれているクリスチャンの不屈の物語もありました。ヘーズレット主教は例として若い司祭について話しました。若い司祭はある空襲で自分の教会を守るために奮闘したが空しく、戻って家を探したが、妻と家族は見当たりませんでした。今は彼が建てた小さな小屋に1人で暮らしています。その小屋は、彼の住居と教会を兼ねていますが、それにもかかわらず、礼拝には堅信志願者が8人出席していました。その教会は東京都内で残った数少ない教会の1つで、ヘーズレット主教も出席しました。マッカーサー将軍は教会を軍事政権下の規制法から解放しました。このことは、ビカステス主教の歴史的功績とされ、日本聖公会が自治管区になるために整えていたが、1940年に軍事政権によって廃止された法憲法規が復活し、機能するようになったことを意味しています。

何人かは、聖公会内の悲しい分裂の和解や政府の圧力の下で国が後押しする「日本基督教団」に加わった司祭と信徒の正統性と交わりの復帰の条件について、より詳しい正確なニュースを期待していました。しかし、ヘーズレット主教は、合同問題はほとんど解決したと報告しました。手に入れたさまざまな手紙もそのことを示しています。前回の「書簡」でも紹介したミス・リーの手紙によると、八代主教はカトリック主義を守るための勇敢な闘争において孤独な戦士ではなく、10人のうち3人を除いた日本人主教が同じ忠誠心に固く立っていたことが分かりました。バジル主教の元代理人であるウォルトン司祭は私に手紙でこう述べています ～ 私たちは常に英国教会において歴史的地位と伝統を持っているという、現在の確たる事実深く感謝する機会が与えられました。かれら（日本人）は幼く（そして弱い）「日本聖公会」しか持っていなかったが、それでも使徒継承を保ったのです。世界の他の国々とのあらゆる接触から切り離され、全体主義政権の強い圧力にさらされていましたが、教会における正統性とカトリック性を守り抜いたのです。神を讃えよ。

日本聖公会は恐怖の暗い夜から浮かび上がり、素晴らしい機会の扉が開かれました。しかし、空襲によって教会、牧師館、学校などが破壊され、人材の喪

失と教会生活の全般的混乱は途方もなく、教会はこれまで以上に貧しくなりました。そして、すべてではないにしても、長年にわたって蓄えた基金の多くは、分散しなければなりません。私は、バジル主教が将来の必要に備えて築かれたフェローシップ・ファンドについて、そして私に残したバジル主教の指示について、八代主教からの問い合わせを待っています。さらに、それらの困難に加えて、もちろん生活費の急騰もあります。私たちはどのようにして支援することができるでしょう。ヘーズレット主教は、日本聖公会の指導者たちが伝道協会を通して与えられていた外国援助から自立するという 1940 年の決定を解消しないと決めていると報告しています。しかし、指導者は現在の緊急事態に対する特別な支援は独立に関する決定と矛盾しないと考え、訪問団もその考えに同意しました。ですから、アメリカ、英国、カナダの姉妹教会に、破壊された教会の再建と聖職養成の財政援助を訴えることになっています。生活が安定すれば、宣教師も再び歓迎され、「送る」のではなく「招かれる」のです。

神戸フェローシップは何ができるでしょう。直接的な財政援助の道はまだ開かれていません。おそらく、ほとんどのフェローシップのメンバーが「神戸フェローシップ」は「バジル主教記念」という形で援助することができると考えていることでしょう。～ 特に彼が心にかけていた神戸教区の特別な働きや必要のいくらかを支援するファンドとして。私が知る八代主教は、ケラム神学校から大きな影響を受けており、彼を留学させたことはバジル主教が神戸教区と日本聖公会のために行った最も優れたことの 1 つであると言えるでしょう。神戸フェローシップの支援のおかげで、バジル主教は彼を留学させることができました。1 つの案として私が提案したいのは、多分「バジル主教記念基金」の設立は本国で何らかの責任ある団体（例えば SPG）によって実施され、八代主教のように神戸教区の司祭がケラムに留学することを可能にすることは、最高の支援となるでしょう。おそらく、その上で「奨学金」のようなものとして聖職者の支援をするということもできるでしょう。明確な決断をするのは時期尚早です。しかし、その間に私たちはバジル主教の最後の願いとしてファンドの

積み増しをすることができます。主事によるとその総額は現在、2,000 ポンド近くだそうです。私たちの力を遥かに超えた主への素直な愛と日本聖公会を助けようという主の望みによって、バジル主教が私たちに何を望んでいるかを確信することができるでしょう。しかし、何よりも、フェローシップの一番の目的である絶え間ない祈りによって、私たちのすべての思いと行いに備えましょう。

多くの方はエピファニー修女会のシスターたちが日本での働きを再開するために招かれたことをすでに知っているでしょう。彼女たちが設立した現地にできたばかりの修女会が存続していたことは格別な喜びです。

『チャーチ・タイムズ』に掲載された祭壇の備品やベストリー関係等の提供に関する八代主教の訴えが、とても大きな反響を及ぼしていると主事が教えてくれました。以前、フェローシップのメンバーが贈ったものの多くは、アメリカの爆弾によって炎上してしまったのです。

主事の住所はまだオックスフォード・ウッドストックの牧師館気付となっています。

真心を込めて

ノエル・ストロング

## 訳者あとがき

訳者は2019年5月から2020年3月まで、聖公会神学院で研究生生活を送った。その際、学校に関係する費用は聖公会神学院が負担してくださったが、その他の生活費はUSPGの「神戸フェローシップ・ファンド」に多くを支えられた（詳しくは小林尚明主教の「推薦の言葉」をご覧ください）。

これまで同ファンドによって、神戸教区の多くの聖職が海外留学等を経験している。しかし、そのファンドの由来について、訳者が研究生生活に入る際、神戸教区がUSPGに問い合わせたが、明確な答えはなかったと聞いた。

聖公会神学院での研究生生活が始まり、『日本聖公会神戸教区宣教140年史』編纂の際に、「バジル主教時代」には含まれないと考えて読んでいなかった『Kobe Fellowship Letter. Supplement（増補）』の3号以降を精読した。すると、7号でストロング司祭が、今後の神戸フェローシップのファンドについて、バジル主教の記念に神戸教区教役者の留学奨学金として用いてはどうかと提案している箇所を発見した。ここに、現在USPGが管理している神戸フェローシップ・ファンドの由来があると推察し、未訳の『Kobe Fellowship Letter』を訳出することが、訳者が聖公会神学院で行うべき第一の務めであると感じ、未訳部分を翻訳することにした。

翻訳は容易ではなかったが、バジル主教やストロング司祭をはじめとした宣教師たち、そして神戸フェローシップの信仰と愛の実践に触れ、心が燃え、励まされた。また、戦時下における日本聖公会の苦しい状況に心を痛めながらも、聖公会の過ちを正しく認識し、同じようなことを繰り返さないために、歴史に学ぶということが続ければならないとの思いを強めた。

翻訳に際しては、できるだけ読みやすくすることを心がけ、意識した部分も少なくない。しかし、本書は約80年前に英国の神戸フェローシップという、限定された読者に向けて書かれた書簡集である。多くの注を付すことも考えたが、最小限に留めることにした。読者の皆様には、80年前の読者とバジル主教やス

トロング司祭が置かれた状況を思い浮かべ、訳者の足らざるところを補って頂きたい。

中部教区主教となられた聖公会神学院・特任教員の西原廉太主教には、研究生活の間、翻訳等のご指導をして頂き、推薦の言葉もお寄せ頂いた。広島復活教会副牧師の永野拓也司祭と歴史編纂委員会の大東康人委員長には訳稿を校正して頂いた。それぞれのお力添えに御礼申し上げたい。しかし、翻訳上の誤りや不適切な表現については、すべての責任が訳者にあることは言うまでもない。

訳者の国内留学を受け入れ、研究生活を応援してくださった聖公会神学院にこの場を借りて御礼申し上げたい。同校の研究休暇コースがなければ、翻訳が緒に就くのはまだ何年も先となっていたであろう。

出版に際しては、歴史編纂委員会をはじめ、推薦の言葉をお寄せ頂いた小林尚明主教や神戸教区の諸氏に大変お世話になった。その他にも、多くの方のご助力を得て、本書が刊行できることを心より感謝申し上げたい。

最後に、本書を 2017 年に逝去した父・ヨセフ中原祥志にささげることをお許し頂きたい。

限りない愛と恵みの神が、世にある人と世を去った人との全公会を、み子イエス・キリストによる復活とみ国の喜びに導いてくださいますように。

アーメン

2021 年 使徒聖パウロ回心日

司祭 ペテロ 中原 康貴

## 索引 (人物、神戸教区の教会・関係学校)

- 明石聖マリア・マグダレン教会…11,19,34,37,57,59,64,80,92,98  
秋田温人…23,50,84,92,107  
阿部義宗…89  
アレン、エリック…19,23,24,30,39,45,52,59,72,79,91,93,96,100,107,115  
稲垣陽一郎…62  
ヴァイアル、ケネス…45  
ウィリアムズ神父 (聖ヨハネ修士会) …10,45  
ウィリアムズ、オードリー…10,30,32,37  
植村義久…24,59,80  
ウォーカー、フレデリック…40,45,52,65,78,93,102,107  
ウォルトン、H.B.…51  
ウッド (フォス主教の娘) …24  
ウッド、ヴァイオレット…24,32  
ウッド、フレッド…47  
ウーレイ、キャサリン…44,78  
大原辰三…46,52,56  
岡上千代…50  
岡山聖オーガスチン教会…42,46,56  
オール・セイントス教会…9,29,46,52,55,91,102  
加藤九十九…12,23,59,80  
カーフォート、トマス…65,70  
ギボン、パトリック…30,40,43,45,52,65,70,78,90,93,107  
キャサリン、メアリー…25  
ケテルウェル、ヒュー…110  
ケテルウェル、フレッド…115

呉信愛教会…42  
小池晃男…46  
小池耕造…46,52  
小池俊男…46  
御影聖マリア教会…24,27,28,29,45,52,59,113,115  
神戸聖ペテロ教会…9,16,23,24,39,51,59,80,113,115  
神戸聖ミカエル教会…10,11,28,29,59,60,62,64,84,92,101,113,114  
神戸聖ヨハネ教会…79,80  
神戸昇天教会…28,39,48,79,103  
境復活教会…8,46  
桜井 健…10  
佐々木鎮次…43  
サンダース主事…34  
シェパード、キャサリン…92,102  
下関聖フランシス・ザビエル教会…12,23,32,37,39,50,52,55,66,79,83,103,107  
松蔭女学校…10,24,29,31,44,51,73,78,92,101  
ジョンソン主事…18,29,34,38,39,83,116  
ジョンソン、プリムローズ・メアリー…34,37,38,39,83  
スウィンフォード＝エドワーズ主事補…38  
末好時信…41,60,92  
ストークス、キャサリン…19,30  
ストラックス、チャールズ…24,28,29,30,44,45,51,58,59  
ストロング、ジョージ・ノエル…12,30,32,39,46,50,68,74,79,80,85,91,96  
ストロング、フィリップ…96  
スミス、エヴァ…24,30,40  
イングリッシュ・ミッション・スクール (現聖ミカエル国際学校) …  
24,28,29,30,40,45,52,55,65,78,93,102

寺本房吉…47  
徳島インマヌエル教会…42  
富岡キリスト教会…64  
富田 満…89  
ドルイット、イザベル…30,31,33,44  
名出保太郎…21,35,90  
長寄 泉…41  
中道淑夫…41,46,60,92  
中村 弘…103  
ナッシュ、エリザベス…90,101,106,110,112  
ニコルス、シャーリー…81  
ネトルトン宣教師…112  
信岡章人…103  
信岡修吉…9,12,103  
ノリス主教…35  
袴田観一…9,22,57,60,62,64,80,83,103  
パーキンソン司祭…39,49,51,72  
バグリー宣教師…112  
バッグス、マーベル…33,90,101,106,110,112  
バッジャー、エドウィン…12,23,30,32,39,57,64,78,80,90,107  
バッジャー、ナンシー・エドワーズ…12,30,32,39,78,90  
ハッチンソン、アーネスト…33,56  
ハドソン主教…77,112  
バルト、カール…82  
ハント司祭…55,60  
姫路顕栄教会…10,22,32,37,39,57,60,64,79,84,92,107  
フィッシャー、ジェフリー…114

福山諸聖徒教会…23,33,40,42,46,  
ビクター主教…100  
ビカステス、エドワード…24,117  
ビカステス主教（エクセター教区）…24  
広島復活教会…42,101  
広安孝夫…60  
ビンステッド、ノーマン…81,95  
フォード、ジョン・クリストファー…33,44  
フォス、ヒュー・ジェイムス…11,24  
フジモト・ツネ…24  
ブルックス、オスカー…51,56,60,91,95,101,107  
ブラウン司祭…77  
プライム主事補…34,38  
ヘーズレット、サムエル…20,23,35,72,81,108,116  
ベッキンガム司祭…39  
ホームズ、マリー…50,52,57,60  
ボールズ、ジェシー…28,33,52,56,60,79,90,101,107,110  
ボンソンビー＝フェイン、リチャード…21  
マーガレット修女…25  
牧野興三郎…22  
マシュー司祭…10  
松井米太郎…81  
松江基督教会…46,52,101  
松山聖アンデレ教会…12,80,103  
マッカーサー、ダグラス…117  
マン、ジョン…81,116  
ミッション・トゥ・シーメン（シーフェアラーズ）…29,64,80

村田俊雄…59  
メルヴィル主事…39,58,81,99,105,107,111,115  
モンク、ジョン…97  
八代欽一…81  
八代欽之允…42,46  
八代祥吉…81,92  
八代斌助…35,59,64,74,79,84,87,89,91,94,101,106,110,112,117  
山本早太…42,46,52,56  
吉本要太郎…64  
米子聖ニコラス教会…46  
米村勇雄…41  
ライフスナイダー、チャールズ…81,116  
ラドフォード、イーニッド…51,54,78,92  
ラング、コズモ…86  
リー、コンウォール…92,101  
リー、レオノラ…44,78,92,101,106,110,112,117  
リチャードソン、コンスタンス…90,101  
ロー、ローレンス…19  
ワキノ…84  
ワッツ、F. エリック…64,69  
ワトソン司祭…50

**著者** ジョン・バジル・シンプソン (John Basil Simpson,1880-1942)

1925年から1941年まで、日本聖公会神戸地方部主教。

ジョージ・ノエル・ストロング (George Noel Strong,1897-1996)

1926年から1942年まで、日本聖公会神戸地方部司祭。

**訳者** 中原 康貴 (なかはら やすたか)

1974年、徳島市生まれ。英知大学文学部神学科卒業。ウィリアムス神学館卒業。2004年、日本聖公会司祭に叙任される。

現在、高知聖パウロ教会牧師。

著書 『風の便り-目には見えない大切なもの』(聖公会出版)、『日本聖公会神戸教区宣教140年史』(共著、日本聖公会神戸教区)

---

## Kobe Fellowship Letters Vol.III — バジル書簡集 第3巻

---

2021年2月17日発行

訳者 中原 康貴

発行所 日本聖公会神戸教区 歴史編纂委員会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5-11-1

電話 078-351-5469 FAX 078-382-1095

印刷所 大久保プリント

〒780-0928 高知市越前町1-4-11

---

